

うずまきナルトが幻想
入り～Story of light
and darkness～

ガジャピン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四代目火影に憧れるナルトが、八雲紫のちよつとした気まぐれで幻想入りしてしまつたお話。

※注意書き

この物語に出てくるナルトは、原作終了後からオリジナル展開した、作者の妄想ナルトです。

また、東方Projectに関しては、Wikipedia等を参考にしていません。

目次

序章 運命の出会い	Light en	
counters with girl		
s)		
招待	Welcome to new	
world		1
考察	Where is here?	
)		15
弾幕	First time	
of combat		27
霧雨魔理沙	Thief & wit	
ch)		42
自覚	Contradiction	
)		
前兆	Warning	
異変	Goodbye to a	
careful life		81
第1章 九尾異変	Goberse	
monster		
決裂	Mind passing	
ach other		90
うずまきナルト	VS博麗霊夢	
Unilateral deployment		
)		103
博麗霊夢	Emotional	
ars)		116

nd 救援 Gold of the 211 wi	196 ed of the world 防衛 Dance in the 183 r	up 開始 Malicious wake 168 e	分岐 Another future 155 e	ary 陽遁 Master of Lib 139 r	接触 World freeze 139 s
-----------------------------------	---	-------------------------------------	-------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------

sible 自惚れ Tomorrow in vi 295 i	281 ll of doubt 情報 Information fu 281 u	of darkness 第2章 望んだ運命 Monster 261 r	野心 Berserk mon 243 on	ce 友達 Only one of th 227 h	閃光 Master spark 227 s
---	---	--	-----------------------------	-------------------------------------	-----------------------------

打ち切り	337	案内	323	出発	308	勉強
		の		の日		の
		Fun		of		hell
		Tourism		departu		
352						

序章 運命の出会い〈Light encounter
s with girls〉
招待〈Welcome to new world〉

木の葉の里の門を一人の金髪の青年がくぐる。その青年の表情はどこか嬉しそうだ。しかし、その表情をすぐさま消し、青年は真剣な表情になる。

普段感じている気配と違う気配を感じたからだ。

金髪の青年は辺りを見渡す。だが、周りに不自然なところは何ひとつない。

自分の気のせいかと、金髪の青年は結論付けた。

この金髪の青年の名はうずまきナルトという。ナルトは第四次忍界大戦終結の立て役者であり、その名前を知らぬ者はいない。

少し長めの金髪に青の瞳で、両頬には猫の髭をイメージさせるような三本線がある。その顔立ちは、この里にある四代目火影の顔岩に酷似していた。額には木の葉が彫られた額当てをして、オレンジ色の上着を身に纏い、僅かに見える右手は包帯で巻かれている。

《どうしたナルトオ?》

ナルトの中で尋ねる声が出た。

『いや——なんかさつきから妙な気配を感じんだよなあ。敵意はねーみてエなんだけどさ、なんていうかこう、まわりついてくるってエの?』

ナルトはその声と同じように脳内で応える。

ナルトの中で声をかけたのは九尾といい、ナルトが産まれた時に、ナルトの父親に封印された強大な力を持つ化け物である。

だが、ナルトと長く関わる内にナルトと打ち解け、今では『九喇嘛』という自身の本当の名前でナルトから呼ばれている。ナルトの良き相棒だ。

「はあ、久しぶりの休みだつてエのに、勘弁してほしいつてばよ……」

ナルトは里の通りを歩きながらため息をつく。

ナルトの忍としての実力はトップクラスであり父、波風ミナトの『飛雷神の術』をも会得したナルトは、木の葉の里からだけでなく、他里からも引つ張りだこでどんどん任務がまいこみ、影分身を併用して、任務を並列に素早く処理していくのがナルトにとっての日常だった。

今日はナルトにとって、実に四十一日振りの休暇なのだ。だというのに、さつきからナルトの神経を逆撫でするかのように、違和感のある気配が現れては消え現れては消え

を繰り返している。

《そんなに気になるなら九喇嘛モードやるか。ワシは構わんぞ》

その声に僅かに喜びの感情が入っている事に、長い付き合いのナルトは気付き苦笑する。

『いや、いきなり九喇嘛モードになったら周りにいるヤツらも驚くだろうし、今は気配を感じねエからなる必要ないってばよ』

《むう……本当にいらんか》

『ああ。でもそんな時が来たら頼むぜ、九喇嘛！』

《任せとけ》

九喇嘛が残念そうな声を出し、ナルトが九喇嘛をフォローする。その甲斐あって九喇嘛は元気を取り戻した。

(まさか九喇嘛とこんな風になれるなんてなあ。やっぱり諦めねエって大事だつてばよ)

諦めなかったからこそ苦しい道を歩んだが、その苦難以上に大切なものをたくさん手に入れる事が出来た。今では本当に諦めなくて良かったと思っっている。

「ナルトのお兄ちゃんおかえり〜」

「あ、ナルトさん帰って来てたんですね！ また僕に修行つけてください」

「おつ、『戦場の太陽』が木の葉にご帰還だ。元氣みたいだな」

ナルトの周りに人が集まってくる。

木の葉の里に帰った時はいつもこうだ。

ナルトは顔を綻ばせる。

自分が周りの人を大切に想っているのと同じように、周りの人も自分を大切に想ってくれている。その温かさが心地よかった。

「おうつ、ただいま！ 修行はもうちょいしたらつけてやつから気合い入れとけよ〜。今日はいろいろの術を教えてやるってばよ！」

「え〜、螺旋丸が良いです。それにその術、全然使いどころないじゃないですかあ!？」
「ぼつかお前、この術はあの伝説の三忍といわれた自来也師匠すら骨抜きにした凄い術なんだぞ！ 相手の隙をつくるのも忍には必要。その点において、この術の右に出る術はないとオレは思ってるってばよ！」

更に更にこの術はオレがアカデミーにいた頃に編み出した術！ 会得に必要なのはボンツ、キュツ、ボン！ のイメージだけ！ 簡単に会得できて格上の相手に勝てる可能性もある！ 逆になんで拒むのか不思議だってばよ!!」

グツと拳を握りしめ力説するナルト。

周りからお〜という声がある。

「なんかよくわかんねえけどすげえぞナルト！ ただのエロ忍術なのに！」

「確かに凄い術みたいに聞こえますね。ただのエロ忍術なのに」

「わくく格好良い事言ってるくく。ただのエロ忍術なのにくく」

「お前らしい加減に——っ！」

あまりの言いぐさに苦笑して一言言おうとしたナルトだが、さっきの気配を感じ、表情を引き締めその気配がした方をみる。しかし、さっきと同じで何もおかしいところはない。

（さっきから——一体何だっつてんだ!?!）

「どうしたんです。も、もしかして気を悪くされたんですか」

稽古を頼んできた相手が申し訳なさそうな顔をしている。ちよつと言い過ぎたかもしれないと思っているのだろう。

「いや、お前はちつとも悪くねえよ。ちよつと気になる事があつただけだ」

そうナルトに言われ、ホツと胸を撫で下ろす稽古を頼んできた相手。

「それじゃあ、また後でな！」

ナルトはさっきの人たちと別れ、またしばらく歩くと後ろから声をかけられた。

「ナルト？ ナルトじゃないか！」

「その声は——やっぱイルカせんせエ！ 久し振りだつてばよ！」

ナルトはイルカの顔を見た途端に満面の笑顔になった。

「頑張ってるみたいだな——そうだ！ これから一楽に行こう。好きなだけラーメン奢ってやるぞ」

「やた——！ ラーメン、ラーメン！」

「つたく……変わらないな、そういうところは」

ナルトの嬉しそうな表情に、イルカも笑みを浮かべる。

ラーメン屋一楽はカウンター席のみでテーブル席がないが、ラーメンの美味しさは木の葉一と言っても過言ではない。ナルトも子供の頃からよく食べに来るラーメン屋である。

昼時より少し早く来たせいか、店内にはナルトとイルカしかいなかった。

「ずず——と麺をすする音が店内に響く。」

「それにしてもナルト、お前も成長したなあ。いや、『戦場の太陽』って呼んだ方がいいか」

「んぐつ……イルカ先生までそれ言うのかよ。さつき里の人にも言われたけど、正直やめてほしいぜ」

「そんなにそう言われるのが嫌なのか」

「いや、そういうわけじゃねエけど、なんかこそばゆくてさ、へへ！」

ナルトは照れくさそうに軽く頭を搔く。

「そうか」

イルカは優しげな表情でナルトを見る。

第四次忍界対戦後、各里は著しく消耗していた。

そこを盗賊や暁を支持していた者たちが狙い、執拗に各里を襲ってきた。

里の復興に人員を割かなくてはならない状況の中、その襲撃はかなりの脅威でありまた、まだ平和は遠いのかと誰もが嫌になった。

ナルトは各里に救援に行き、被害を最小限に抑えたのと同時に襲撃してきた者たちと話し、改心させた。

そして、ナルトと一緒に戦場にいた誰かが言ったのだ——『戦場の太陽』と。

太陽のように輝いて戦場を駆け、周りにいる人たちに暖かく希望を与える存在だと。

その名前が周りに広がり、ナルトの通り名は自然と『戦場の太陽』になった。

「それはそうとお前、髪を伸ばしているんだな。四代目の顔岩にそっくりだ。何で四代目みたいにするんだ？」

『四代目がどういう忍だった？』って聞くと、みんなこう答えんだ。

『誰よりも強くて、優しくて、カッコいい忍だった』って。

俺もそう言われる忍になりてエ。四代目は俺の父ちゃんだから、頑張ればきつと俺

だって四代目みてエに成れると思うんだ！　で、まずは形からってことで、父ちゃんみてエな見た目にしてみようって思ってたさ」

ナルトはラーメンのスープを器を持って飲み干し、空になったラーメンの器を見ながら言った。

「あつ、もうこんな時間だ！　わりいイルカ先生、ちよつと行くところあるからもう行くつてばよ！」

ナルトは慌ただしく一樂を出て、少し走った後振り返った。

「イルカ先生ラーメンあんがと！　また一緒にラーメン食べような！」

「ああ、約束する！　何処に行くか知らないが、気をつけてな」

「相変わらず心配性だなあイルカ先生は！　じゃ、行つてくる！」

笑顔で手を振り、太陽の光の中へと走り出して消えていくナルトの背中を見て、イルカは何故か嫌な予感がした。もうナルトとは会えないような、そんな予感。

（ナルトは誰よりも強くなった。絶対に大丈夫だ）

イルカは嫌な想像を振り払うように、そう自分に言い聞かせた。

ナルトは火影の部屋を目指して走っていた。

里に入ってから感じる奇妙な気配。それを火影にだけは伝えておいた方がいいと判断したからである。

その途中に見知っている二人の後ろ姿を見つけた。

「サクラちゃん！ シカマル！」

ナルトは顔を綻ばせ、二人の名を呼ぶ。

「おつ、ナルトじゃねえか！ 久しぶりだな！」

「おかえり、ナルト！」

サクラとシカマルは振り向いて笑みを浮かべた。



（さつきからスキマを繋ごうとすると感づかれる。なんで分かるのかしら）

見た目は金髪のロングヘアで、毛先をいくつか束にして赤いリボンで結んでいる金の少女が思案顔をする。

その少女の服装は紫色でフリルのついたドレスを身に纏い、白い手袋を着用している。

それだけなら普通の少女だが、少女の周りには無数の目があり、少女自身も当たり前のように空間に浮かんでいることが、少女が特別な存在であることを教えていた。

（人一人が入れるくらいの大きさのスキマを繋ごうとすれば気付かれるけど、覗く程度

の本当に小さいスキマなら気付かれぬ。スキマを繋ぐのに使用する妖力の大小の問題？ それともスキマ自体の大きさの問題？ まあ確かめる価値はある)

少女はナルトの頭上に覗く程度の小さいスキマを繋ぐ。ただし、普段より多くの妖力を込めて。それとは別にもう一つ、別の位置に普段のように小さい妖力で創ったスキマを繋ぐ。

結果として、ナルトは頭上のスキマの気配に気付いたが、別のスキマには気付かなかった。

(さっきまで気付けなかったのに、今は気付いた。つまり妖力がある程度使われなければ気付けない。次はスキマ自体の大きさで気付くかどうか試す——って言いたいところだけど、スキマ自体を大きくするためには妖力が不可欠。こればかりは確かめようがないわね)

少女はそう結論する。

確かめる事ができないと分かったのに、少女の顔はどこか楽しそうだ。まるで手頃な暇潰しの相手を見つけたように。

少女がナルトを見つけたのは偶然。どこかに幻想郷を面白くするための人材がいないかと、スキマを利用し探していた。

幻想郷を面白く出来る条件として、まずある程度の強さが必要。幻想郷には妖怪が多

数存在するため、弱いとすぐに死んでしまう可能性があるし、性格だけで相手を認める程物分かりが良いわけでもない。

次に何かをやってくれそうな期待感。これは本当に直感だが、たとえ強くても自分だけにその力を使う者は真つ先に除外。そういうタイプは自分の中で世界が決まってしまっているため、幻想郷に対してそんなに影響が出てこないし、出たとしても自分が望む変化の方向性と外れる。

そして最後に一番重要な条件。幻想郷を壊す危険性がないこと。自分はもつと幻想郷を面白くしたいと思っているが、幻想郷をめちやくちやにしたいわけではない。いつまでも変わらない幻想郷に少し変化が欲しいだけなのだ。

それらの条件を満たしている者を、色々な世界で片っ端から幻想郷へ放り込んで元の世界に帰しを繰り返しているが、未だに幻想郷にそれらしい変化はない。

もうこんな事するのを止めようかと考えていた矢先、目についた金髪にほんの遊びで突っかかったら、なかなか面白そうな相手だった。そして、現在へと至る。

(この青年、頭上のスキマに気付いた時に周りの二人を守ろうとした。いや、さつきもそう。意識は私のスキマではなく、周りの人たちにいつていた)

少女は不敵な笑みを浮かべる。まるで勝ちを確信したかのように。

(この世界の人たちには悪いけど——そろそろ幻想郷に招待しないとね)

（——え？）

ナルトにとって、それは予想外の事だった。

（なんでだ!? こいつはオレを狙ってたんじゃないか!?）

さつきから幾度となく感じた気配。その気配を感じたら周りの人を守るために意識を集中させた。しかし、いつも気配は自分のすぐ近くで、周りの人を無視していた。

ナルトは自分の中で結論を出した。

自分だけ狙ってくるなら、大した脅威じゃない。

もちろんナルトは現火影であるはたけカカシにこの事を伝えようと思っているが、それまでは自分の中で留めておく予定だった。

あの戦争から三年——まだ戦争でできた爪痕もたくさん残っており、忍の里同士もようやく今までのシステムから新しいシステムへと変わる前段取りを終えた。

今までの、一つの里だけで完結しているシステムから他里と手と手を取り合い協力し合うシステムへと。

そんな大切な時期に、説明もできない脅威を伝えたところで不安材料にしかならな

い。

しかし、状況は変わった。

今まで感じていた気配は標的を変えた。うずまきナルトから春野サクラへ。

ナルトは春野サクラの足元に、その気配を感じたのだ。

「危ないサクラちゃん！」

サクラを右手で突き飛ばし、サクラがいた位置にナルトが来る。

そして次の瞬間、ナルトの足元が割れ、ナルトはその割れ目の中に落ちていった。

ナルトが落ちる瞬間に見たものは無数の目。

（何だよ……これ）

「ナルトオオオ!!」

サクラの悲痛な叫びを聞きながら、ナルトは咄嗟に飛雷神のマーキングが入ったクナイを、割れ目に向かって放つ。が、割れ目を越える瞬間に割れ目が閉ざされ、飛雷神の術を使っても、無数の目がある空間から抜け出せなかった。

「くっそお……!」

クナイを握りしめ、悔しそうに身体を震わす。

そして、ナルトは地面に落ちた。

「つてて、なんでいきなり地面が——」

ぶつけた部分を軽くさすりながら、顔をあげる。

ナルトの目の前には、たくさんの木々が生い茂っていた。

「さっきの目はどこいったんだ？ それに、一体ここは何処だつてばよ……」

ナルトは困惑することしかできなかつた。

考察くWhere is here?く

ナルトは近場の木を足だけで木登りして、頂上から辺りを見渡す。

「どうやら自分のいる所は森のようだった。見渡す限り似たような木が立ち並んでいる。」

「見たことねエ場所だつてばよ」

《ナルトオ、なんでさつきクナイ投げたんだ？ ヒナタに渡したクナイや、里にあるマー

キングに飛ばばよかつたじゃねえか》

「……………あつ」

《おい、まさか忘れてたなんてことは——》

「忘れてましたああああ!!」

実はナルトは日向ヒナタと一年前から付き合っており、告白した時に飛雷神のマークが入ったクナイをプレゼントしていた。もし自分の身に何かあっても、ヒナタの所に帰ってこられるように。

だが、無数の目に意識がいつてしまい、その事が頭から抜け落ちてしまったのだ。

九喇嘛はため息を吐く。

《おいおい、そんなザマじゃあ今日が何の日かも忘れちまつてるんじゃないか》

「忘れるわけねエだろ。今日はヒナタと付き合い始めて丁度一年の記念日だ。だからカシせんせ——じゃねえ六代目火影の周りにたくさんの影分身を置いて、この日休ませてください頼んだんだ」

《世間じゃ脅迫っていうぞ、それ》

九喇嘛の指摘も、今のナルトには聞こえない。ナルトは度重なる任務の疲労と今日の計画が台無しになった事で、肉体的にも精神的にも限界にきていた。

「オレの計画はさあ、あいつにちよつと修行をつけつつプレゼントは何がいいかそれとなく聞いて、プレゼントを買ってヒナタと夜デートって流れだったのにさあ、こんなワケわかんねエとこに連れ出されて、帰れるかどうかも分からねエ。何でオレはこういつも上手くいかねエんだ」

頭を抱え自分の世界に閉じこもってしまったナルト。座り込んで、ブツブツと独り言を呟き続ける。

《ええい、鬱陶しい！ 大の男が情けねえ！ へこむより先にやるべき事があるだろうが！》

九喇嘛の怒鳴り声に、ナルトは我に帰る。

「……そうだった。もし、オレをここに連れ込んだ奴が、木の葉の里のみんなも同じよう

に連れ込み始めたら——！」

サクラもシカマルもあの気配に気付いていなかった。つまり、今のところナルト以外にあの気配を感じできる忍はいないということになる。

そうだとすれば、気配の主は木の葉の里の住人を殺すも、ナルトのように連れ出すのも簡単だ。

ナルトは両拳を力一杯握りしめる。

(ぜってえそんなことさせねエ——！)

ナルトは立ち上がり、『多重影分身の術』を使う。

すると、ナルトの周りに五人のナルトが出現した。

「まずは此処が何処なのか調べねエとな。お前ら、頼んだぜ！」

「よっしゃあ、行くぜエ！」

ナルトの分身たちが、それぞれ違う方向に消えていく。

影分身は、術が解かれた時にそれまで分身体が得た情報や経験、感覚などが本体に受け継がれるという特徴を持っている。

ナルトはそれを利用して、短時間で周囲の情報収集をしようと考えたのだ。

「よし！ オレもやるかつ！」

もちろん分身に全て任せて、自分は此処でただ待っているような事はしない。

此処が何処なのかを知るための方法は周囲の情報収集だけではないのだ。
ナルトは気合いを入れるため、両手で両頬をばちんと叩いた。

分身たちが戻ってくる頃には、すっかり日も暮れて、辺りは赤く染まっていた。

「う〜ん……」

分身たちの情報を得たナルトは、あぐらをかいて腕組みしながら考えこんでいる。

ここは何処か。

可能性としては三通りあった。

可能性一、自分の住んでいる場所からとても遠い場所。

可能性二、この世界がうちはオビトの万華鏡写輪眼、『神威』で送られる時空間のよう
な、術者が創り出した異空間。

可能性三、この世界自体が自分の脳内だけで展開している幻術。

とりあえずこの世界には、自分の知る木の葉の里や、他の里は存在しない。

何故なら、ナルトは『飛雷神の術』のマーキングを各里にしてあり、少なくともナル
トの住んでいる大陸の端から端までは、『飛雷神の術』の有効範囲内だからだ。

それだけ広範囲のマーキングを感じする事ができないのは、此処が自分がいた大陸よ
りも遥かに遠い場所だという何よりの証拠になる。

もしかしたら自分がいた大陸とは別の大陸が存在したのかとも考えたが、その考えは『口寄せの術』が失敗した事により否定された。

『口寄せの術』に対象との距離は関係ない。対象と同じ世界にいれば、必ず術者の元に現れるのだ。

つまり、可能性一は完全に消えた。

可能性三に関しては、そもそも自分には『九喇嘛』がいるため、幻術にかかれば九喇嘛が解いてくれるし、周りにはサクラとシカマルがいた。

もう何時間も経っているのに、未だに幻術を解く事ができないのは、ナルトには考えられなかった。

てなわけで、消去法により可能性二の、ここは異空間という結論に達した。達したのだが、ナルトはすんなり納得ができなかった。

異空間と断ずるには違和感があるのだ。

違和感の正体、それは――。

(『無駄』な物が多すぎる)

異空間は術者が創り出した世界。

ならば、必ず目的がある。

閉じ込めるだけならば、殺風景で無機質な世界が広がっていなければおかしい。それ

以外の物を用意する事は、術者の負担に繋がるからだ。

閉じ込める相手のために、わざわざ自分の負担を大きくする術者などいないだろう。

しかし、分身たちの情報によれば、木々の他にも広い湖や、真つ赤な館やかたがある事が分かっている。

ナルトはこの世界を創り出した術者の真意が掴めない。

だからこそ、考えてしまったのだ。

まるで元々あつた別の世界に放り込まれたみたいだ、と。

ナルトは首を振って、そのバカげた妄想を振り払う。

別の世界なんてあり得ない。

この世界を創った術者が変わっていただけだ。

《これからどうする》

『真つ赤な館に行こうと思う。此処に連れて来た奴がいそうだからな』

行く前に、今自分が所持している忍具を確認する。

場合によっては戦闘もあり得るからだ。

「えくと……クナイ八本、マーキング付きクナイ十本、マーキング札五枚、起爆札三枚、煙玉二個、光玉二個、兵糧丸七個、イチャイチャパラダイス一冊」

《最後のは忍具にいれねえでいいだろ》

九喇嘛のツツコミを黙殺して、ナルトは地面にマーキング付きクナイを突き刺す。数時間かけて、ナルトは此処に簡素な木の家を造った。

当てができるまでは、この場所を拠点にして行動するつもりなのだ。

「これで、なんかあつても此処に帰つてこれるなあ……よし！ あの赤い家に行くつてばよ、九喇嘛！」

ナルトは赤い家の方向に向かって、次々に木の枝に飛び移りながら移動を開始した。もうすっかり辺りは暗くなり、月明かりだけが唯一の光源になっている。

ナルトが今頃動き出したのにも理由があつた。

その理由とは、此処に連れて来た術者がコンタクトを取りに来るんじゃないかと思つたからだ。

拠点が連れて来られた場所なのも、術者からのコンタクトを期待しているからである。

しかし、数時間動かなかつたにも関わらず、一度も接触して来なかつた。

そのため、自分から動こうという結論になり、夜ならば何かあつても逃げやすいだろうと考えて、日が完全に暮れるのを待った。

ナルトのその発想は正しい。

ナルトは攻める側であり、赤い館の主は守る側である。

ナルトは、此処に連れて来た相手と話し合いに行くわけではない。完膚なきまでに叩き潰して、自分を木の葉の里に戻すよう脅迫するために、赤い館に向かうのだ。夜陰に紛れての奇襲は基本中の基本。基本であるが故に、安定的な結果を期待できる。

だが、ナルトは知らなかった。

赤い館に住まう住民たちにとって、夜こそが本領を發揮するホームだということに。こうして、ナルトは吸血鬼の住まう館、紅魔館に行く事になった。



「——咲夜、これからお客さんがここに来るわ」

月明かり以外の光源がない薄暗い部屋の中、背中に大きな翼が生えている少女が、ティーカップ片手にそう言った。

少女の名はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主である。

「分かりました。もてなす準備を始めます」

咲夜と呼ばれたメイド服の少女は、レミリアの言葉を何一つ疑わず、レミリアに一礼して部屋を出ようと歩きだそうとする。

しかし、その行動をレミリアが片手で制した。

「お嬢様、お客様が来るのでは……？」

咲夜はレミリアの方を振り返り、僅かに戸惑いの表情になる。

「ええ。でも、もてなす必要はないわ。その代わり、フランにこう言ってきて欲しいの」

その後が続いたレミリアの言葉に、咲夜は絶句した。

「お嬢様、それはさすがに無理があります！ 間違いないく、お客様は良くて生死をさまよう重傷を負うことに——！」

「そんなのどうでもいいから、早く行きなさい！ 私を困らせたいの!？」

「……分かりました」

咲夜の姿は一瞬にして、その場から消えた。

一人になった無音の部屋で、レミリアはティーカップに上品に口をつける。流石にお嬢様と呼ばれるだけのことはあり、その姿はさながら貴族——。

ずずーつと紅茶をすすする音が部屋に響き渡る。

貴族と肩を並べるくらいの上品さが——。

ガチャツと音を立てて、ティーカップがソーサーに置かれる。

どうやら周りに人がいないと、レミリアは見た目相応の振る舞いになるようだ。

レミリアはふうと息をはく。

「これで——全てが変わるわ。フランの運命、ここに来る人間の運命、この幻想郷の運命、そしてこの——私の運命も」

レミリアの瞳に、悲しさとも寂しさともとれる感情が浮かんでいる。

ちらりと窓からの明かりが、視界の端によぎった。

レミリアは目を細める。

「今夜は一段と、月が綺麗ね」



「え〜！ それ、お姉様が言ったのぉ!？」

「そうですよ、妹様」

レミリアと同じように、背中に翼がある金髪の少女が目を輝かせて嬉しそうにする。

少女の名はフランドール・スカーレット。レミリア・スカーレットの妹である。

その少女の横には、緑色の帽子を被った女性がいる。

彼女の名は紅美鈴。紅魔館の門番及び庭師を任されている。

彼女はフランとは対照的に、あんぐりと口を大きく開けていた。

今、彼女たちは紅魔館の庭にいる。

フランと美鈴が庭で遊んでいたところに咲夜が来て、レミリアの言葉を伝えたのだ。
「咲夜さん、死にますよ」

美鈴が口元に手を当て、小声で咲夜に話しかける。

「そうね。今までにもたくさんの方の外来人が来たけど、誰一人として妹様を満足させる事ができなかった。」

だから、死ぬ前に私たちが止めるの」

咲夜と美鈴の間に、暫し沈黙の時間が流れる。

「……………マジですか？」

「美鈴、涙を拭きなさい。私たちにしかできないのよ」

滝のように涙している美鈴を、咲夜がたしなめる。

美鈴が涙している理由はただ一つ。

フランが暴走すると、こちらの言葉は一切通じず、文字通り命懸けで取り押さえないといけないからだ。

しかし、はつきり言つてフランの方が遥かに強い。死刑宣告を受けた囚人の気分を、彼女たちは今味わっているのだろう。

涙して嘆いていた美鈴だが、何かに気付いたように頭を上げて、涙を服の袖で拭い、キリツとした目になる。

「どうやら、お嬢様の言う“お客様”が到着されたようですね」
「——そのようね。ここまで殺気が伝わってくる」

二人の視線の先には、紅魔館の門があつた。

弾幕(づ)つ(こ) First time of comba
t()

紅魔館の門の向こう、姿形は見えなくとも、咲夜と美鈴は人がいることを確信していた。

この館全体に向けて放たれている殺気と敵意。肌を刺すようなピリピリとした感覚。これは警告。死にたくなければ降参しろという脅し。

「うくん、ここまで敵意を剥き出しにされると私、外の人のこと、守りたくなくなっちゃいます」

「これは予想外だったわ。普通に訪ねてくると思っていたのに」

二人はそれに一切動じず、美鈴は面倒くさそうに頭を掻き、咲夜は呆れたように右手で軽く頭を抱えた。

絶対に外にいる者は、ここがどういふところか、ここに喧嘩を売ってくるという行為が何を意味するか分かっていない。

こんな事したら、妹様は——。

二人はフランの方に視線をやる。

フランはまるで新しい玩具を貰った子供のような笑みを浮かべ、今か今かと玩具お客様の到着を待ちわびている。

フランにとって、この殺気は自分の気分を高めるスパイスでしかない。

二人の脳裏にレミアの言葉が浮かぶ。

——これから来るお客さんは、フランの好きなように遊んでいいから。

この幻想郷に住んでいる者がこれを聞けば、誰もが両手を合掌し、哀れな生け贄のご冥福をお祈りするだろう。

フランの方に二人は意識がいつていた。

そんな二人の耳に、紅魔館の壁を蹴る音が飛び込む。

そして、再び門の方に視線を戻すと、空から一人の男が落ちてきた。

男は危なげなく着地し、こちらを睨んでいる。殺気や敵意も変わらない。

「紅魔館にようこそお出でくださいました。ご用件は何ですか？」

咲夜は深々と一礼し問いかける。

「コウマカン？ ——ああ、この名前か。

お前今、用件は何だって言ったな。とぼけんじゃねエよ！ お前らか、お前らの仲間

がオレをここに連れてきたのは間違いないエ！

オレがここに来た理由は、オレを元の場所に帰してもらおうのと、オレを連れてきた理

由を聞きに来たんだよ！」

男は剣呑な目をして怒鳴った。

「何故、ここが自分がいた場所ではないと？」

「口寄せの術が失敗したからだ！」

咲夜と美鈴は首を傾げる。

クチヨセノジユツ——今まで聞いた事のない言葉だ。

ノジユツはおそらくの術で正しいだろうが、クチヨセの意味が分からない。

「口寄せの術を知らねえのか!? そんな訳——アカデミー忍者学校で名前くらい聞く筈だぞ！ 契約した対象を術式の場合に呼び寄せる術だ。それが失敗したって事は、対象と同じ世界にいない何よりの根拠になるんだってばよ！」

男の説明に咲夜と美鈴は、なるほどと頷いている。

確かにそういう技が失敗したなら、ここが違う世界の場所だと確信するだろう。

ここで二人と男の間に一つ、すれ違いが生まれる。

咲夜と美鈴は、男が既にここが異世界だと気付いていると思つた。

しかし、男のいた世界では、別の空間に連れていかれる事は珍しい事ではあるが、無
いわけではない。

男は異世界ではなく、異空間だと考えている。

つまり、男は男のいた世界の理屈で、ここが通ると思っっているのだ。

「それで？ オレを元の場所に帰すのか、それとも断るのかどっちだ？ 返答次第じゃ少し痛い目にあつてもらうぜ」

男の殺気と敵意が更に大きくなった。

咲夜と美鈴は目を合わせる。

——ここは正直に言つた方が良い。

「申し訳ありませんが、それは無理です。でも、あなたをここに連れてきた人物には心当たりがあります」

「そいつの名は？ 何処に行けば会えるんだ？」

「名前は八雲紫。何処で会えるかは私たちも知りません」

男は顔を険しくした。

だが、落ち着かせるように深呼吸をして、数秒の間、目を閉じ腕組みをする。

咲夜と美鈴の目には、考えこんでいるように見えた。

やがて男は目を開け、背を向ける。

「分かつたつてばよ。こんな夜更けに悪かつたな」

そして、紅魔館の門に向かって歩き出す。

咲夜と美鈴はほっと息を吐いて安堵した。

——何とか最悪の事態を回避することができた。

「ちよつと待つて、お兄さん」

しかし、そんな二人の安心を打ち砕く一言が、フランから飛び出した。

「ここまで気分盛り上げといて、このままお預けなんて許すわけないじゃん！」

男は振り返り、フランを見て息を呑む。

フランの目は、獲物を前に舌舐めずりをする肉食動物に似た獰猛な輝きをしていた。



ナルトは目の前の金髪の少女に本能的な恐怖と、どこか懐かしさを感じていた。ナルトが大人しく紅魔館を去ろうと思ったのには、理由があった。

その理由とは、彼女たちも自分と同じでここに連れて来られた被害者かもしれないと考えたからだ。

口寄せの術を知らないのも、物心つく前にさらわれたと考えれば説明がつく。

館にいたのが少女ばかりというのも、ナルトの仮説に真実味を持たせた。

こんな少女たちが自分を連れ去る理由が思いつかないし、自惚れかもしれないが、こんな少女たちにどうにかされるような自分じゃないとも考えていた。

この異空間には、自分のいた世界のように様々な、いわゆる里のようなものがあり、自分のような被害者が寄り添って生きているのではないだろうか。

ナルトはこう仮説を立て、とりあえずこの館は保留にして、この仮説が正しいかどうか、他に人がいそうな場所を探そうと結論づけた。

それに――。

(女の子を痛めつけるなんて、できねエ)

ナルトのイメージでは、人相の悪い男たちがいると思っていたのだ。

なんせ、あの信じられない館の色のセンスをしている住人だ。

だが、出てきたのは少女。自分に対して敵意も感じない。

だから脅す振りだけして、情報を得たらとつとと去るつもりだった。

「ねえ、『弾幕ごっこ』しようよ」

金髪の少女の言葉で、意識を外に戻された。

「『弾幕ごっこ』?」

今度はナルトが首を傾げる番になった。

金髪の少女は、うつかりしていたというように声をあげた。

「あつ、そういうえば外来人なんだっけ。」

『弾幕ごっこ』っていうのは、スペルカードっていう自分の技を閉じこめたカードを、

カード名を言うのといっしょに発動して、「参った」とか「降参」って言わせれば勝ちだよ。自分だけが楽しまない、相手といっしょに楽しめる、それが『弾幕ごっこ』。

お兄さんは外来人で、弾幕もスペルカードも持っていないだろうから、好きに闘えばいいよ。その代わり、逃げまわるのだけは止めてね。そんな事したら、追いかかわすのに夢中になって殺しちゃうかもしれないから」

「オレはお前と闘う気は——！」

「それじゃあ、行くよ！ 禁忌『クランベリートラップ』！」

いつの間にか少女の手にあったカードが光を放ち、少女の周囲に見たことのない陣が二つ召喚される。

そして、その陣から赤と青の球体が次々と発射された。

ナルトは咄嗟にそれらを避け、視界の端をよぎったものに一瞬息が止まった。

陣が球体を発射しながら、自分の真横に動いていたのだ。

挟み撃ちのかっこうになったナルトは跳躍して、後方の紅魔館の壁に足だけで張りつく。

「何だつてばよ、アレ？ あんな術見たことねエ……ん？」

ナルトの視界が、緑色の帽子を被った少女がその場で構え、もう一人が包丁を小さくしたような物を持っているのを捉えた。

ナルトは舌打ちする。

(あいつらも加わる気か!?)

本当は、ナルトが危なくなつたらいつでも救えるように二人は構えているだけだが、ナルトにその発想はなかった。

(仕方ねエ——！ できりゃあ使いたくなかつたけど)

ナルトは上空に光玉を投げ、それにクナイを当てる事で光玉を割つた。

割れた瞬間、太陽に匹敵する光が上空で生まれ、一瞬昼間のような明るさを紅魔館は取り戻す。

フランたち三人は咄嗟に手を翳し、光を遮つた。

「何今の？ 光を操る能力なの？」

「さあ——っ!? 咲夜さん、後ろ！」

美鈴は声をあげ、咲夜は声につられて顔だけ振り向き、後ろを見る。

その眼前には、ここに来た男と全く同じ姿をした男が迫っていた。

咲夜は持つていたナイフを手放し、男の伸ばしていた腕を両手で掴んで投げ飛ばした。

どうやら美鈴の方も同じ状況だったらしく、美鈴は男の腕を右腕で払い、軽く踏み込んで両手で突き飛ばした。

吹き飛んだ男は上手く空中で体勢を整え地面に着地。着地しても勢いを全ては殺せず、そのまま数メートル後ろにずり下がった。

「何ですかコレ!?! 三つ子!?! 今回は三つ子が幻想入りしたんですか!?!」

「落ち着きなさい! そんな訳ないでしょう!?!」

咲夜が、突拍子のない事を言い出した美鈴を一喝した。

やられたと、咲夜は下唇を噛んで出し抜かれた悔しさを堪えた。

あれだけあからさまに殺気と敵意を放っていた理由。

あれは自分に意識を向けさせるための罠だったのだ。

そうやっている間に、どういう原理かは知らないが自分と全く同じ人間を紅魔館の屋

根の上に潜ませ、合図と同時に突入させる。

合図はさっきの光だったのだろう。

でも――。

咲夜は唇の端を吊り上げる。

――その程度の実力じゃ、私たちには勝てません。

「咲夜、美鈴……今、私の邪魔しようとした?」

フランは顔をしかめて静かに問いかける。

咲夜と美鈴は必死に首を横に振った。

それを見て、フランは無邪気さを感じさせる笑顔になった。

「な〜んだ。それならいいや。」

お兄さん！ この二人は手を出さないから気にしなくていいよ！

私、楽しくなつてきちゃった！ お兄さんも分身できるんだね！」

ナルトは紅魔館の壁に張りついたまま、フランの言葉を聞いた。

（あの子の言葉を信じるなら、あの子だけに注意をはらえばいい。）

それに、オレは危なくなつても大丈夫だ。

あの見たことねエ術。もつと色々見ておきてエ。

てかあの子、影分身が使えるのか？）

「禁忌『フォーオブアカインド』！」

ナルトの思考はフランの声で中断された。

フランの身体が光を放ち、光が収まった後には四人のフランがいた。

「やっぱ影分身使えるのかい!? お前ら、こっち来い！」

ナルトは分身たちに向けて声をあげる。

「いいよ呼ばないで。このまま闘えば」

ナルトの方に向かおうとしていた分身たちに、四人のフランが攻撃を開始した。

色とりどりの球体や、鋭く尖った赤色の玉が大量に撃ちだされ、二人の分身たちを包

み込んだ。

分身たちは避けきれず被弾し、大きい爆発とともに姿を消した。

「やられちゃったね。これでまた、お兄さん一人だよ！」

次はどんな面白いもの、見せてくれるのかな？

あ、分身はもう要らないや。一対一の方が楽しそうだし」

フランの周囲にいた三人のフランは姿を消し、代わりにフランの手に一枚のカードが握られた。

(もう——あの子に負けを認めさせる以外に、これを終わらせる方法はねエみてえだな)

ナルトは一本のクナイをフラン目掛けて投げた。

「刃物？ あははっ、そんなの当たらないよくだっ！」

フランはひらりとクナイを避けた。

が、次の瞬間には右腕をとられて、ぐっと上から地面に押さえつけられる。

クナイにつけていたマーキングに、ナルトは『飛雷神の術』で飛んだのだ。

ナルトは素早くクナイをしまう。

そして、フランの目に飛び込んだのは、渦を巻きながら青く輝く球体。

「螺旋——っ！」

(やっぱ直接当てるなんてできねえ！)

「丸！」

フランから離れるのと同時に、フランのすぐ横の地面に螺旋丸をぶつける。

螺旋丸が地面にぶつかった時に生まれた爆風で、フランは紅魔館の壁に叩きつけられた。

「今のを直接ぶつけてたら、お前はボロボロになってた。お前の負けだ。まだやるってんなら、次は直接当てる」

（頼む……負けを認めてくれ——！）

「どうして？」

フランはゆっくりと起き上がる。

「私、まだ全然動けるよ。それに、そんな面白いもの見せられて、ここで止めるとかそんなのもつたいな過ぎるよ。」

えくと……こんな感じ——だったかな？」

フランが一瞬にしてナルトの背後に回り、左手でナルトを掴んだ。

「なっ——！」

（なんだ!?! 速度が全然違うってばよ!）

そして、ナルトはフランの右手を見て背筋が凍った。

フランの右手には黒い球体が渦巻いていて、その中に目のようなものが見え隠れして

いる。

それは、いうならば黒い螺旋丸。

フランはそれを一切躊躇うことなく、ナルトへとぶつけた。

「うわああああああ！」

今度はナルトが紅魔館の壁に叩きつけられ、そして——消えた。

本体だと思っていたナルトも分身体だったのだ。

「——あはっ、本当に面白いお兄さん！ 今度はかくれんぼだね！」

フランは狂気に満ちた笑みになった。

紅魔館の屋根の上、ナルトの本体はそこにいた。

（これ以上長居する必要はねえな。『飛雷神の術』で戻るってば——）

「かはっ——！」

ナルトがいきなり口から血を吐き出した。

《ナルト、しつかりしろ！ 一体何があつた!?!》

九喇嘛の声を遠くに聞きながら、ナルトは紅魔館の屋根に両手をつく。

（なんでだ……？ 影分身の物理的なダメージは、本体に反映されねえ筈だぞ!?!

いや、それより早くこの場から逃げねえと、あの子が——！）

「みくつけたっ!」

紅魔館の中で一番高い時計台の上、満月を背にしたフランが立っていた。

集中しろ……集中——。

「苦しそくだけど、だいじょくぶ? すぐに楽にしてあげるよ! その代わり、弾幕ごっここの決着はつけさせてね!」

フランがナルト目掛けて一直線に襲いかかる。

『飛雷神の……術』——!」

フランの眼前から、ナルトの姿が消えた。

辺りを見渡し、それらしい気配がないことが分かると、フランは地面に飛び降りた。

「まあいいや。けっこー楽しめたから、今回は見逃してあげる。

でも、今度会ったらまた遊んでね、お兄さん!」



「がはっ……ごほっ——!」

拠点に戻ってきたナルトは、マーキングクナイを手に握りしめ、口から血を吐き出す。吐き出した血は、地面に染みるように吸い込まれていく。

そして、ナルトはゆっくりと地面に倒れこんだ。

《ナルト！　おい、ナルト!?!》

意識が遠のき、視界が狭くなっていく。

ナルトはすぐそばで、足音を聞いた気がした。

「こんなところで無防備に寝るなんてな……手癖の悪い奴が来たらどうするんだぜ」

ナルトは必死に声の主を見ようと頭を上げようとするが叶わず、僅かに見えたのは黒いスカート。

それを見た後、ナルトは完全に意識を手放した。

霧雨魔理沙～Thief & Witch～

ナルトは目を閉じたまま、覚醒する。

『九喇嘛……ここは何処だ？ オレは今、何処に寝かされてる？』

《お前の造った家の床の布団の上》

『九喇嘛、冗談は止めてくれ。』

確かに家は造ったけど、布団なんて持ってきた覚えも準備した覚えもねエ』

《そうだな。だから、嬢ちゃんには感謝しろよ。』

嬢ちゃんが自分の家からここまで布団を持って来て、二日間看病してくれたんだから
《な》

『二日!? オレは二日間まるまる寝てたのか!?』

《正確にいやあ二日半だがな》

『で、その嬢ちゃんってのは誰だつてばよ』

《おととい
昨日の話だ。』

嬢ちゃんと一緒に別の女がここに来た。医者みてえだったその女が、嬢ちゃんのことをマリサと呼んだ。そして、嬢ちゃんはその女をエーリンと呼んだ。その医者が言うに

は、お前の胃が損傷していたんだと。だから吐血してたって話らしいぞ》
胃の損傷。

ナルトは思案顔になる。

影分身の腹部に、金髪の少女の黒い螺旋丸が当たった。

まさかあの黒い螺旋丸は、分身体の物理的ダメージを本体にも反映させる事ができる術なのか。

だとすれば、あの少女の前で影分身は使えない。

《ナルト、お前も薄々気付いてるんじゃないやねえか。この場所が異空間じゃねえってことに》
術者の意図が全く読めない空間、翼のある少女、見たことのない術、そして『弾幕ごっこ』という言葉。

自分の中の常識や知識が、全く意味をなさないこの空間。

『けど、だったらここは何だっつてんだ!? それ以外の可能性はねエだろ!』

《確かにそうだ、ワシらん中ではな》

『どういう意味だよ』

《ワシらの常識や知識が当てにならないと言っつてんだよ。

お前も一旦木の葉の連中は忘れて、友好的にここの奴らと話した方が、結果的にここが何処かを知れると思うが——》

『木の葉のみんなを忘れるなんてできねエ。それに、ここは敵に連れてこられた場所だ。警戒しながら話して損はねエ』

《ナルト、お前の言う通りだ。》

だがな、お前を二日間必死に看病してくれたマリサつてやつにも、そういう態度をとるのか。だったら、ワシはお前を見損なうぜ。これから一人で頑張れよ。ワシは力を貸さんからな》

ナルトははつとした表情で九喇嘛を見た。

九喇嘛の言う通りだ。

敵なら看病なんてしないし、よしんば看病したとしても、身体を拘束しないわけがない。い。

けど、オレの手足に拘束具らしい感触はねエし、もし拘束具をされていたら、九喇嘛がこんなに大人しい筈がねえ。

『わりい、九喇嘛。頭に血が上り過ぎてたみてエだ。』

受けた恩を仇で返すのは良くねエよな。そのマリサつて奴にはお前の言う通り、始めから信じて接する。

九喇嘛、ありがとな。それと、心配かけてゴメン』

《……フンツ、次はあんなガキに遅れをとるな。いくら疲労がたまつて、普段の実力が

全然出せてなかったとしても、さすがにあのザマはねえぞ』

『だからわりいって言ってるんだろ。で、そのマリサつてのは今何してる？　なんかぶつぶつと声は聞こえんだけど』

《そいつなら、今イチャイチャパラダイス音読してるぞ》

『マジで!?!』

リボンの付いた黒い三角帽を被り、黒いドレスと白いエプロンを足したような服を着て、背に箒を背負った金髪の少女が、本を声に出して食い入るように読んでいた。

その顔は、僅かに赤くなっている。

「——その時じゅんこは言った。

『あーあたし、あなたを見失いそう』

この本内容はちよつぱりエロいけど、なかなか面白いな」

「そいつは良かったってばよ」

「えっ!?!」

魔理沙は後ろを勢い良く振り返る。

魔理沙のすぐ後ろに、ナルトがいた。

「そ、そういう目的で読んだわけじゃないからな！

ただ、本を見ると読みたくなる一種の条件反射みたいな——と、とにかく好んで読んだわけじゃないんだぜ！」

魔理沙は顔を真っ赤にしながら、あたふたしている。

その姿に、ナルトは吹き出した。

「ははっ、分かっているって！ その本、けっこー女の読者もいるんだぜ。映画化だってしたしな。」

お前がオレをここに寝かせてくれたんだろ？ サンキューな！

オレの名前はうずまきナルト！ 火の国木の葉隠れの里上忍及び、忍連合軍四番隊切り込み隊長を任されてるってばよ！」

「ナルトか。私は霧雨魔理沙、魔法使いだぜ！」

「魔理沙って呼べばいいか？ てか、魔法使いつて何だ？」

ナルトは首を傾げた。

魔法使いなんて言葉は聞いたことがない。

やはり、ここは自分の常識が通じない場所なんだと、ナルトは再認識した。

「そのままの意味さ。魔法を使う者のことを言うんだぜ。魔法っていうのは、魔力を使った技だっと思ってくれればいい」

「魔力？」

再びナルトは首を傾げる。

魔理沙は深く息を吐き出した。

「……………これじゃ話が進まないぜ……………。ナルト、とりあえず今は気にしなくていい。説明が必要になったら、その時私が教えてやる。

それよりも、だ。ナルト、私は倒れていたお前を一生懸命背負って近くの家まで運び、布団と調理道具と食材を自分の家から持ってきて、その後、薬師を連れてきてお前の傷を治し、それから今までずっとお前の看病をした。

「ここまでは理解できたか？」

「……………お、おう」

ナルトはとりあえず頷く。

「つまり、私がいなかったらナルトは今頃死んでたかもしれない。そう考えれば、私はナルトの命の恩人になるわけだよな？」

ナルトは無言で頷く。

確かにそうなるだろう。

だが、ここまではつきりと自分から言えるのは凄い。

「物分かりが良くて助かるぜ。だから、お前を助けたお礼が欲しいんだよ。お金は要らない。

ただ、お前の持つてる持ち物で、私が欲しいと思つたやつをくれないか？」
ナルトは腕組みをする。

自分が持つてている持ち物は、自分専用のマーキングが入っている以外は別に珍しくない忍具ばかりだ。

木の葉の里に帰れば、すぐにまた準備できるだろう。

「いいぜ、お前にやつても。それに、そうやって貸し借りなしにした方が話しやすいな」

「そうそう！ 話の分かる奴は好きだぜ！ とりあえず、お前に持ち物返すぜ」
魔理沙は目を輝かせ、ナルトの方に忍具が入っていたポーチを渡す。

「おーっ、サンキューって——」

ポーチを持った瞬間、違和感があつた。

あきらかに軽くなっている。

ナルトはポーチを開けて中を確認する。

中にはクナイ二本、イチャイチャパラダイス一冊——以上。

「すくなっ！」

ナルトは思わず声をあげた。

「魔理沙、お前これ、さすがにやり過ぎだろ!? バカでも盗られたことに気付くつてばよ

！」

「盗ってないぜ。借りたんだ、私が死ぬまでな」

「一緒だってエの！」

で、盗った方がいいが、使い方や効果が分からない。だから、オレから説明してもらおうと持ち物が欲しいなんて言っただんな？」

「お前……天才か！」

魔理沙は目を大きく見開いた。

「いや、誰でも分かるって」

この先の少女に振り回されるような嫌な想像がナルトの頭を駆け巡り、脱力感に襲われたナルトは大きくため息をついた。

「——それにしても、なんでイチヤイチャパラダイスは盗らなかつたんだ？ まだ読んでいる途中だっただろ？」

ナルトがそう尋ねると、魔理沙はニカツと笑った。

「お前に読みたいって言えば、読ませてくれるだろ？ それは私が持つてるのと一緒なんだぜ」



紅魔館の地下には、大図書館と呼ばれる見渡す限り書物を保管している部屋がある。そして、そのさらに下には地下室があった。

つい最近まで、フランドール・スカーレットが監禁されていた部屋だ。

フランはその部屋の隅で体育座りをしていた。

フランの表情は、親に叱られた小さな子供のようにしゅんとしている。

フランがこうなっている原因は、ナルトと弾幕ごっこをした日まで遡る。

「……お姉様」

ナルトとの弾幕ごっこが終わった後、フランはレミリアの部屋に行った。

レミリアはフランの方に向き、フランの言葉を待つ。

「また、やっちゃった」

フランはうつむいている。

その表情は、レミリアからは見えない。

しかし、きつと悲しい表情をしているんだろぅなどと、なんとなく分かった。

「能力は全然使う気なかつたんだよ。ただ、あの技を真似てみようとして妖力を右手に集中させただけなの。」

なのに、ぶつける直前に能力が発動しちゃった。能力なんて、使おうと思っ
てないの
に——」

フランは両手で顔を覆う。

「私、怖いんだよ。お姉様と手を繋いでいる時、美鈴と遊んでいる時、自分以外の誰かと
触れ合っている時、能力が勝手に発動して壊しちゃうんじゃないかって」

「大丈夫よフラン。あなたは優しいから、絶対にそうはならないわ」

レミリアはそう言っ
て、フランの両手をとろうと手を伸ばす。

だが、フランは怯えながらその手を払いのけた。

「……あ、ご、ごめんなさい、お姉様。私、地下室に行ってくるね。ちょっと懐かしくなっ
ちやっ
たから」

フランは逃げるようにレミリアの部屋から出ていった。

レミリアは払われた手を軽くさする。

「——もう少し待ってて、フラン。私が必ず、能力を制御できるようにしてあげるわ。た
とえ、どんな犠牲を払ってでも」

それがきくと、私がフランにしたことに対する罪滅ぼしになるのだ。



「へえ、成る程な。なら、これとこれとこれは要らないか」

魔理沙はナルトから忍具の説明を聞き、クナイ六本とマーキング付きクナイ十本、そして、マーキング札四枚をナルトに返した。

ナルトと魔理沙は今、家の外にいる。

「ん？ マーキング札が一枚足らねえぞ」

「ああ、それはな——こうするためだぜ！」

魔理沙は勢いよく背負っていた箒を取り、箒の柄の一番先端と遠い場所にマーキング札を貼り付けた。

「これで、ナルトはいつでも私のところに来れるわけだ。

もし私の身が危なくなったら、空に向けて『マスタースパーク』を放つ。それを見たら、必ず来てくれよ」

『マスタースパーク』ってどういうのだ？」

ナルトの問いに、魔理沙は得意気な表情をした。

「いいぜ。今日はナルトと友達になった日だ。特別に見せてやるぜ」

「……友達？」

ナルトは呆然とした表情で呟いた。

「違うのか？ だったら、私は少し傷つくぜ」

魔理沙は拗ねたようにそっぽを向いた。

——ああ、そうか。

ナルトは気付いた。気付いてしまった。

——オレは一人だったんだ。

九喇嘛がいてくれたから、その事に気付かなかった。

ここには、自分を知ってる人は誰もいない。

もしかしたら、そんな孤独を心の底で感じてて、一刻も早く木の葉に帰らなくてはと焦っていたのかもしれない。

けど、それもこの瞬間までだ。

「いや、お前はオレの友達だ」

魔理沙は嬉しそうに笑った。

「これからよろしくな、ナルト」

「こつちこそよろしくな、魔理沙！」

二人は握手を交わす。

魔理沙の手には、スペルカードとミニ八卦炉が握られている。

そして、雲一つない青空に向けて、八卦炉を構えた。

「よしっ！ よろく見とけよ、ナルト！ こいつが魔理沙様の——『マスタースパーク』だ！」

八卦炉に魔力が収束し、極太のレーザーが発射された。

天を突き破るんじゃないかと錯覚する勢いと威力。

しかし、太陽の光がレーザーをキラキラと彩るアクセントになっており、力強さと見る者を惹き付ける美しさを兼ね備えていた。

「ははっ、震えるってこんなの見せられたら——」

ナルトは我知らず笑みを浮かべていた。

「約束するぜ、魔理沙！ この光が見えたら、必ずお前のところに行く」

「ホントだな？」

どこか魔理沙の声が不安気になっている。

ナルトは満面の笑みで、魔理沙の頭を軽く撫でた。

「心配すんな！ オレは約束を必ず守るぞだ！」

自覚とContradiction

「魔理沙、オレってば聞きたい事があるんだけど——」

「なんだ？」

「ここは何処だ？」

「まあ分かっちゃいたけど、やっぱナルトは外来人だったか。とりあえず、どうやってこの世界に来たのか教えてくれないか」

ナルトはこの世界に来た状況と、その後の紅魔館での出来事を魔理沙に話した。

自分は無数の目が浮かんでいる裂け目に落ちてここに来たこと。

どれだけ待っても術者からのコンタクトがなかったこと。

周辺を探索して、赤い館と湖を見つけたこと。

赤い館に行き、翼の生えた金髪の少女と『弾幕ごっこ』というものをして、重傷を負ったこと。

その館の一人から、八雲紫という人物が自分をここに連れてきた奴だと言われたこと。

魔理沙はその話を聞いて、小さく笑った。

「くつくつ……ナルト、運が良いぜお前は。紅魔館に喧嘩売って死ななかつたからな。それと、ナルトをここに連れてきたのは間違いなく八雲紫だな。あいつの使うスキマには、無数の目が浮かんでるんだ」

「その八雲紫って奴は危ねエ奴なのか？ オレがいた元の場所の奴らを、オレみたいにここに連れ込んだり、殺したりしないか」

ナルトは祈るような気持ちで尋ねる。

「紫は何の理由もなく、そんな事はしないぜ。だからナルトの世界の奴らは大丈夫だ」

魔理沙の言葉に、ナルトはとりあえず安堵した。

そのすぐ後、疑問が浮かびあがる。

「……ん？ オレの世界？」

「そう！ ナルトが今いるこの世界は『幻想郷』といって、ナルトのいた世界とは全く異なる世界なんだぜ！ つまり、ナルトは異世界に落ちまつてるんだ!!」

ナルトは口をばくばくと動かす。

そして、数秒かけて内容を理解した。

今いるここは異空間ではなく、異世界。

「ええええええええええええ!!」

ナルトの絶叫が辺りに木霊した。

「いや、そんな良いリアクションされると、私も力強く言った甲斐があるぜ！」
魔理沙はグツとガツポーズをした。

「いやいやいや、なんでこっちはシヨック受けてんのに楽しそうなんだよ!?」
お前ちよつと性格悪いぞ!」

魔理沙はナルトの言葉に、心外だと言わんばかりにムツとする。

「私の性格の悪さはちよつとどころじゃないぜ!　そこんどこよろしく!」
(だ……駄目だこいつ……早くなんとかしないと……)

ナルトは思わず頭を抱えた。

(魔理沙のペースに呑まれたらダメだ)

ナルトは深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

「それで、その紫つて奴には何処に行けば会えるんだ?」

「何処に行つても会えないぜ。あいつは引きこもりだからあ“あ“あ“あ“!」

魔理沙の頭上に腕が現れ、帽子の上から拳骨をした。

魔理沙は頭を両手で抱えて地面を転がり回っている。

魔理沙はやつとの思いで立ち上がり、右拳を握りしめた。

「いきなり何するんだぜツ!　このバ——」

今度は魔理沙の腹部のすぐ近くに腕が現れ、魔理沙の鳩尾みぞおちを殴った。

「ぐおおおおおー！」

魔理沙はお腹を抱えるようにうずくまった。

「お、おい魔理沙、もう余計な事言うの止めろよ……」

ナルトの声は僅かに震えている。

（たかがちよつと気に入らない事言われただけなのに、この容赦のなさは何だよ。こんな異常だ）

「いい加減にしろよ、この覗き魔が……！」

魔理沙の目は据わっていた。

その手にはスペルカードが握られている。

「魔符『スターダストレヴアリエ』！」

魔理沙の周囲に、色とりどりの星形の弾幕が張られた。

「わったったっ——！」

ナルトは必死にそれらを回避した。

魔理沙は意識を周りの弾幕に集中させる。

その弾幕の中で一部分だけ、何かの影響で弾幕が消えているところがあった。すかさず、もう一枚スペルカードを取り出す。

「彗星『ブレイジングスター』！」

魔理沙は箒に乗り、マスタースパークをミニ八卦炉で後方に発射しながら、その推進力を利用して、猛スピードで弾幕が消えている場所に突っ込む。

充分に加速したところでミニ八卦炉を手放して、一度スカートの中に左手を入れる。そしてスキマの中へ左手を伸ばし、逃げようとしていた紫の右腕を掴む。

だがその手はすぐに払いのけられ、魔理沙の左手はスキマの外に弾きだされる。

魔理沙の左手が弾きだされた瞬間、紫のスキマは完全に閉じた。

そして、それからスキマが出てくることはなくなつた。

魔理沙は箒から飛び降り、再び箒を背負う。

気まずい空気がナルトと魔理沙の間に流れた。

「魔理沙……その、残念だったな」

ナルトは魔理沙を傷付けないよう、慎重に言葉を選びながら話しかけた。

「……………」

魔理沙は無言で肩を震わしている。

よっぽど悔しいんだろうなと、ナルトは思った。

「くくっ……あつはっはっはっ！ 勝った——！ この私が、あの大妖怪に勝ったぞ！」

魔理沙は高笑いして、勝利に浸っている。

「勝ったって……紫って奴には逃げられたんじゃない——」

ナルトは困惑していた。

勝ったといえる要素は何一つとしてない。

魔理沙と紫の闘いを思い返してみる。

最終的に、紫は魔理沙から逃げていった。

別の角度から見たら、それは勝ったといえるのではないだろうか。

しかし、魔理沙の意味する勝利はナルトの考えの斜め上の結末だった。

「紫は逃げたさ、その右腕に『起爆札』を付けて……。今頃紫は、スキマの中でドカーンだぜ！」

「え？」

ナルトは啞然とした。

『起爆札』を付けて……？

『起爆札』を人体に直接付けたまま爆発させれば、その身体は粉々に吹き飛ぶだろう。「魔理沙！ オレは言ったぞ！ 絶対に人には直接付けるなって！ 威力がどれくらいあるかも説明しただろ！」

ナルトは目を吊り上げて、魔理沙を叱る。

だが、魔理沙は別に何とも思っていないようで、自分の服に付いた埃や土を両手で払っていた。

「私は人には付けてないぜ。それに、あんな札一枚の爆発で死ぬほど、紫はやわじやない。ああ見えて紫は、千年以上生きてる大妖怪だからな」

「千年以上生きてる大妖怪?」

紫の腕らしいものを見たが、人間そのものの腕だった。

「ああ……まだナルトには言つてなかつたな。」

この幻想郷は人間の他にも妖怪、妖精、幽霊、神とかが入り交じつて暮らしている世界なんだぜ。ナルトが紅魔館で闘った金髪はフランドール・スカーレットっていう名前前で、吸血鬼だ。ああ見えて五百年くらい生きてる」

「……マジかよ」

ナルトは面食らいながら呟いた。

ナルトには吸血鬼が何か分からなかったが、五百年生きてると聞いただけで人外だと分かる。

そういう存在を妖怪と呼ぶのだろう。

「けどっ——！ たとえ人じゃねエにしても、『起爆札』を付けるなんて駄目だ!」

「何で駄目なんだ? ただ大怪我するだけだぜ。」

それに、ナルトは矛盾してるぜ」

魔理沙はスカートの中から、一枚の『起爆札』を取りだし、スペルカードのように指

に挟んでナルトに見せる。

「この道具の用途目的は相手を殺すためだろ。そんなこと、ナルトに言われなくても分かる。道具を用途目的通りに使って何が悪いんだ？」

「何が悪いって……紫って奴を大怪我させるほど嫌いだったのか？」

ナルトは絶句した。

「別にそこまで嫌いじゃないぜ。こんなのいつもの事さ。それに、これは人間を殺す道具だぜ。妖怪は殺せない。だから私は、躊躇うことなく使えた。これからも妖怪相手なら躊躇うことなく、私は『起爆札』を使うぜ」

魔理沙は平然とそう言つてのけた。

ズレがある。

この幻想郷に住む者と自分のズレ。

大して嫌いでない者でも、大怪我を負わせる攻撃を躊躇せずに行ける。

(いや……オレも同じか)

ナルトは自分の右手を見つめる。

今まで螺旋丸で一体何人大怪我させただろう？

いや、螺旋丸だけじゃない。

アカデミー
忍者学校を卒業して初めての中忍試験の時、大して嫌いじゃないキバをボコボコにし

たっけ。

——成る程な。

自分は大怪我させたことに怒っているわけじゃない。

『起爆札』を身体に貼り付けるといふ非人道的な行為に怒っているのだ。

もし魔理沙が『起爆札』を使わずに、紫を大怪我させていたとしたら、自分はここま
で頭にきただろうか。

きつと怒るどころか、良かったなと勝利を祝福していただろう。

闘いの勝負で無傷で決着なんてあり得ないから、怪我をさせても気にならない。

だからこれは、自分と魔理沙の考え方の違いだ。

過程も含めて勝利を決めるか、過程を一切無視して、ただ結果だけを見て勝利を決め
るか。

ただそれだけの違いなのだ。

——オレの言ってる事は矛盾してる……か。けっこうくるもんがあるぜ。

「ナルト、お前みたいな外来人が真っ先に行くところがある。紫を頼るのは、それ以外の
選択肢が無くなってからでも遅くないぜ」

魔理沙は帽子を被り直しながら、ナルトに向けて右手の人差し指を立てた。

「何処に行けばいい?」

「博麗神社。そこには巫女？　がいて、外界とこの世界を隔てている博麗大結界を維持しているんだぜ」

魔理沙が言うには、そこに行けば紫の力を借りなくても元の世界に帰れる可能性があるらしい。

「どうやって行けばいいんだ？」

「私が案内してやるよ。ナルトは友達だからな」

魔理沙がナルトに向かってウインクした。



とある神社の鳥居の場所からは、幻想郷が一望できた。

その鳥居のちょうど真下に、箒を手にした少女がいる。

その少女の容姿は、肩と脇を露出させた赤い巫女服を着て、後頭部に大きな赤いリボンを結んでいる。

少女の名は博麗霊夢。

博麗神社の巫女であり、幻想郷で起こった数々の異変を解決してきた実力者でもある。

その少女は、森の方をまっすぐ睨むように見ていた。

「さっきの光は、魔理沙の『マスタースパーク』の光よね」

だが、闘っている感じは全くしなかった。どちらかといえば、見せびらかすような一。

霊夢は舌打ちした。

「魔理沙……そんな事してなんにも起きないほど、幻想郷は大人しくないわよ。けど、どうでもいいわね。自分で蒔いた種なんだから、自業自得よ」

霊夢は止めていた手を動かして、神社の境内の掃除を再開した。

「あーお賽銭参拝客が全然こないわー、お金貯まんないわー」

呪文のように呟きながら、境内の掃除を着実に終わらしていく。

霊夢は嫌な予感がしていた。

見せびらかすということは、『マスタースパーク』を知らない者が魔理沙の傍にいた可能性が高い。

だが、幻想郷にいる者で『マスタースパーク』を知らない者など、ごく少数だろう。

つまり、魔理沙の近くには外来人がいる可能性が高い。

霊夢はため息をつく。

「外来人なんて、この世界に来なければいいのに……」

出会わなければ、別れる時の寂しさも哀しさも切なさも何一つ感じないのに。
しかしその考えは、全てを受け入れる幻想郷を否定する。

「ああ、もうッ！ めんどくさいわねッ！」

霊夢は思考を振り払うように、境内の掃除に没頭した。

前兆（Warning）

ナルトと魔理沙は森の中を歩いていた。

「へえ、この森って魔法の森っていうのか」

魔理沙が言うには、この森は湿度がとても高く、化け物茸と呼ばれる茸の胞子が宙を舞い、瘴気を放っているらしい。

さらに、その茸の近くにいるだけで幻覚を見せられ、瘴気を吸い込めば普通の人間は体調を壊してしまう。

人間はおろか、妖怪すら居心地が悪く滅多に足を踏み入れない森——それが魔法の森だった。

「そう。だからナルトの判断は正しいぜ」

ナルトは家を作る時、とりあえず周辺の木々を全て切り倒し、茸も吹き飛ばして周りを何も無い状態にした。

これをしたのには理由があった。

——仙人モードになれなかったから、やったんだけどな。

ナルトは影分身に情報収集させている間、色々術を試していた。

そして、仙人モードになってみようとその場で自然エネルギーを得ようとしたら、自然エネルギーの中に不純物というべきものが大量に入っていたのだ。

それを取り込んで仙人モードになったら、どういう影響が出るか分からない。

だから不純物を取り除こうと思った。

この森の木々や茸には、自分を妨害するための術がかかっているんじゃないかと当時のナルトは考えた。

故にナルトは木々を切り倒し、太陽の光を届くようにして、再び仙人モードになろうとした。

その結果、自然エネルギーに含まれていた不純物の量が減ったのだ。

ナルトは自分の仮説が正しいと考え、木々や茸を自分の周辺から術を使って消した。

「——オレってば二つ、魔理沙に聞きてエことがあるんだ」

「なんだぜ？」

「魔理沙はこの森に住んでるのか？」

ナルトの問いに、魔理沙は頷いた。

「ああ。この森に生えてる茸の幻覚作用は、魔法使いの能力を高めるんだ。私はこの森で霧雨魔法店っていう名前の店をやってる。

で、二つ目の質問はなんだぜ？」

「ああ——」

ナルトの目が鋭くなり、臨戦態勢になる。

「さつきからオレらをつけまわしてる連中は、魔理沙のお得意さんか？」

「——自慢じゃないが、私の店にお得意さんはいないぜ。多分、私のファンだな。私のことが好き過ぎて、スキンシップをとろうとする奴が大勢いるんだ」

魔理沙はその手にスペルカードを握る。

「すっげエ殺気だけど？」

「最近流行りのヤンデレってやつだぜ」

そんな会話の最中、木々の影から次々に何か飛び出した。

ナルトは出てきたものを見て、思わず後ずさりする。

それらは様々な姿をしていた。

数メートルはある大百足や蛇。

人間ほどの大きさがあり、黒い斑がある黄色い目をした蜘蛛。

特にナルトの目を引いたのはこれらの妖怪で、他にも多数の妖怪がいたが、ナルトの目には入らなかつた。

「ナルト……今度は私から質問だ。こいつら倒せそうか？」

魔理沙は顔に冷や汗を浮かべている。

「この森を滅茶苦茶にしているってんなら、一瞬で倒せると思うけどよお」

ナルトは顔を引きつらせていた。

控えめに言って気持ち悪い。

大蛇は慣れているが、大百足や大蜘蛛には全く耐性がない。

魔理沙は大蛇も駄目なようで、スペルカードを持つ手が震えていた。

「さっきの『マスタースパーク』が、こいつらを呼び寄せた。こいつらの食料は人間なんだ。私たちをつけて、襲いかかる機会を窺ってたんだけ。別にこいつらは退治しても問題ない。だから倒せるなら早く倒してくれ！ さっきから鳥肌が立って仕方ないんだぜ！」

人間を食料にする化け物が平気な顔してのさばり、はびこる。

これも『幻想郷』らしさだというのだろうか。

ナルトは息を大きく吸い込む。

その後、妖怪たち目掛けて勢いよく息を吐き出した。

その息は台風のような強風となって妖怪たちに襲いかかり、周囲の木ごと妖怪たちを天高く吹き飛ばした。

風遁・大突破——かつて大蛇丸が使っていた、口から吐く息をチャクラで増幅し、風圧を強くする印を使わない術である。

すかさずナルトは印を結びながら、足だけで近くの木を木登りして木の頂上に行き、上に跳躍。

その更の上にいる妖怪たちに狙いを定める。

「火遁・豪火球の術！」

ナルトが口から火を吹き、その火が巨大な火の玉を形作る。

妖怪たちはその火に吞まれて、全てを燃やし尽くされ灰になった。

幻想郷の空の一部分を赤く染めあげた火球は徐々に小さくなり、ナルトが再び木の頂上に着地する頃には消えていた。

ナルトは第四次忍界大戦後も修行を怠らず、基本的な風遁の忍術や火遁の性質変化をマスターし、尾獣たちのチャクラを借りなくても、それら二つの属性の忍術を扱えた。

飛雷神の術と螺旋丸を併用した一撃必殺技に加え、風遁や火遁といった広範囲殲滅忍術も扱える。

更に影分身で数の暴力。そのうえ、仙人モードや九喇嘛モードといったパワーアップ技。

第四次忍界大戦後から修行を続けたナルトの強さは止まることを知らず、どんどん高みにのぼっていった。敵からすれば、もう笑うしかない反則的な強さになっている。

ナルトは軽やかに木の頂上から飛び降りた。

「へへっ、身体が軽いつたらねエゼ」

身体中のチャクラ穴からチャクラが溢れ、身体中を満たしている感覚。それがとても心地良い。

それに二日間半寝てた影響か、ナルトの身体から疲労感はさっぱり抜けていた。

地面に着地したナルトに、魔理沙が勢いよく詰め寄る。

「ナルト！ お前今、口から火い吹いたぜ!? 一体どういう身体構造してるんだ！ちよつとだけ解剖させてくれないか!?!」

魔理沙の目は好奇心に満ち溢れてキラキラしている。

「さすがにそれは——ッ!? 魔理沙、危ねエー!」

ナルトは魔理沙を抱えて横に跳んだ。

その一瞬後、ナルトたちのいた場所を鋭利な爪が切り裂いた。

鋭利な爪を持った妖怪は憎々しげに舌打ちする。

「魔理沙！ 博麗神社の方角は!?!」

「……あ……あっち……」

魔理沙が赤面しながら弱々しく指を差した方に、ナルトは全力疾走する。

ナルトが後方を振り返ると、森を埋め尽くす程の多数の妖怪たちがナルトを追ってきた。

「一体どうなってるんだよ魔理沙！ この森は妖怪も滅多に足を踏み入れねえ森じゃなかったのか!？」

「分からない！ 私だってこんなの初めて見たぜ!!? 多分、魔法の森にいる妖怪全てが集まってるんだ!？」

魔理沙はあまりの迫力に青ざめた顔をしていた。

（けど、なんで私たちのことを協力して襲ってくるんだ!? この森の妖怪たちは手を組むほど仲が良かったか!? こんな異常だぜ!?)

ナルトは魔理沙を抱えたまま妖怪たちを撒き、魔法の森を抜けた。

「はあ……はあ……なんとか……抜けたな」

「そうだな……とところでナルト。最期に言い残しておきたい言葉はあるか」

「……へ?」

そう言われて、初めてナルトは気がついた。

自分が魔理沙の胸に、思いつきり腕を押し付けて抱えていたことを。

「ああ、そうか。悪かったな、無我夢中だったからよ」

ナルトは平然とした顔で、魔理沙から手を離して地面に降ろした。

対する魔理沙は驚愕の表情をしていた。

「あ……あり得ないぜ……この魔理沙様の胸を腕で押し潰しておきながら、何の反応も

しないなんて……」

「いや、オレってば子供をそういう目で見れねえ——」

「恋符『マスターズパーク』!!」

「あぶなっ!？」

いきなりの『マスターズパーク』をナルトは紙一重でかわした。

魔理沙の手にはミニ八卦炉が握られ、顔からは表情と呼べるものが消えていた。

「私を子供だと……? 私レディだ。レディの胸を触っておきながら、何の反応も示さないのはレディに失礼だぜ」

「反応って言われても、狙って触ったわけじゃねえからな。正直、何も覚えてねえってば

——わっ!」

今度は無言で『マスターズパーク』を放った。

ナルトはそれもなんとかかわす。

「あんまりだぜ。確かに私は男口調で、性格も女らしくないかもしれないけど、私だって女なんだ。そういう反応されたら、傷付くに決まってるじゃないか」

魔理沙が悲しそうな顔をした。

ナルトはそれを見て焦り始める。

「じゃ、じゃあ! 嬉しそうにすれば良かったのか!？」

「そういう反応したら、ボコボコにした」

「それなら、悲しそうにしたら——！」

「万死に値する」

ナルトの言葉を次々に叩き斬っていく魔理沙。

ナルトは頭を抱える。

（もうどうしたらいいんだよ！女心なんてわかんねえぞ!?）

ナルトは心を落ち着かせるように大きく息を吐く。

必死に魔理沙をかわそうとするから、どつぽにはまる。

思ったことを、そのまま言えればいい。

偶然とはいえ結果的に悪いことをしてしまったのは事実なのだから、はつきり言つて魔理沙を怒らせたとしても、その怒りは全て受け入れよう。

そう思つて、ナルトは覚悟を決めた。魔理沙に何をされても受け入れる覚悟を。

「魔理沙、オレはお前に興奮しねエ。魔理沙が何て言おうと、オレから見りやあ子供に見える」

「なっ——」

「けどさ、可愛い女の子だつて思う。あと数年後には、誰もが振り返るような美人に間違いないなくなつてるぜ」

ナルトはニカツと笑ってそれだけ言うと、魔理沙の反応を窺った。

最初の言葉を聞いて、魔理沙は怒りで顔を真っ赤にしたが、その次の言葉で黙り込み、うつむいてしまった。

（やつベエ、やつぱ駄目だったか。けど、仕方ねエ。ここは大人しく魔理沙の制裁を受け
——）

ナルトは身構えるが、いつまで経ってもその制裁が来ない。

「……魔理沙？」

「ホントか」

うつむいたまま、魔理沙が尋ねる。

「え？」

「ホントに私は、数年後に美人になってると思うか」

「なってる。オレが保証する！」

この言葉に嘘はない。

暗闇の中でも光を放っている程に輝く金髪。

勝気な性格を象徴するかのように自信に満ち溢れる金色の瞳。

それ以外にも、バランスの良い整った鼻と口。

ナルトは自分の美的感性が狂っているとは思っていない。

誰もが美人だという女性を美人と思える自信がある。

「そうか」

魔理沙は帽子を右手で深く被り直す仕草で目を隠したが、見えている口元が微妙に吊り上がっている。

そして数秒後には帽子を上げ、いつも通りの勝気な笑みを浮かべた魔理沙がいた。

「ならッ！ ナルトを興奮させることができたなら、私はレディになったって何よりの証になるわけだな！

見てろよナルト！ 絶対に私がレディだと思わせやらせてやるからな！」

パシヤ！

魔理沙がそう言った瞬間、フラッシュがたかれた。

ナルトと魔理沙がフラッシュの方を見ると、二人の傍に近寄ってカメラを向けている十代後半くらいの女性がいた。

彼女の容姿は、髪型が黒髪のボブ、頭には山伏風の頭巾、瞳は燃えるような赤色の瞳。服装は上が白い半袖のシャツ、下にフリルのついた黒いミニスカートを着ている。

彼女の名前は射命丸文。

妖怪の山に住んでいる鴉天狗で、幻想郷で起きた様々な出来事の記事を書いている『文文。新聞』という新聞を書いている新聞記者である。

「あ、私のことはどうぞお気になさらずに。ささ、続きをどうぞ」

「こんな風に邪魔されて、続きもなにもないぜ！——まさか、私が抱えられてたところも撮ったのか!？」

「いや、なかなかいい写真が撮れました!」

射命丸は額を右腕で拭うような仕草をしながら、満足気な表情をしていた。

「絶対記事にするなよ！ いいか!? 絶対だからな!」

「それは記事にしろってことですね、分かります。」

それはそうと魔理沙さん。とんでもない方をお連れになつてますね」

射命丸から笑みが消え、どこかピリツとした空気を纏わせる。

「ナルトのことか？ 確かにとんでもないぜ！ なんせ口から火や風を吹くからな」

「ほうほう。では、先ほどの火や突風は彼がやったのですか」

「ああ」

「なるほどなるほど。なかなか良い記事が書けそうですね!」

では、これまでのネタの提供のお礼として、一つだけ忠告しておきます」

射命丸の顔から新聞記者の面が剥がされ、彼女は天狗の顔になる。

「その外来人と妖怪の山に来ないで下さい。もし来たら、たとえ魔理沙さんでも命の保証はできない」

射命丸から発せられる殺気が二人を襲う。

魔理沙とナルトは身体を強張らせた。

「その人、お名前を伺っても……？」

「オレの名前はうずまきナルトだ」

「私は射命丸 文。以後お見知りおきを。それでは、用事ができましたので失礼します」
射命丸の身体がふわりと浮かび、瞬く間に彼女は空を飛んでどこかへ行ってしまった。

「あーっ！ カメラ取り上げるの忘れてた！」

魔理沙は両手と両膝をつく。

その顔は、世界の終わりに直面したような絶望感漂う顔だ。

「絶対、面白おかしく大げさに記事を書く気だぜ！」

「……なんかよく分かんねエけど、元気だせよ。オレがいつでも力になってやるから

さあ」

魔理沙の肩を、ナルトが軽く叩く。

魔理沙は顔を上げ、ナルトの顔を見つめた。

「ん？ オレの顔になんか付いてつか？」

(なんか懐かしいぜ、こういう感じ。それに、ナルトなら悪くないかもな)

「別に何も付いてないぜ！ それよりナルト、そろそろ博麗神社を目指そう」
魔理沙は立ち上がり、上機嫌に歩き出した。

それを見て、ナルトは頭を搔く。

「落ち込んだり、いきなり元気になったり……やっぱ女心は分かんねエ」

この時の二人は気付けなかった。

すでに異変が始まっていたことを――。

異変 Goodbye to a peaceful
life

雲一つない透き通るような青い空。

射命丸は妖怪の山を目指して、澄んだ空を切り裂くように翔かけっていた。

「うーん、魔理沙さん絡みのこういう記事は本当に久しぶりですねー！ 腕がなっちゃいますよー！」

射命丸は良いネタをいくつも手に入れて上機嫌だ。

楽し気な笑みで、どんどん目的地へと近付いていく。

しかしその道中、射命丸の行く先を遮るように妖怪たちが立ち塞がる。

「……せつかくの良い気分が台無しですよ。さては、あなた方も『あの力』を取り込んだのですか」

妖怪たちは何も答えない。ただ口を歪ませて嗤わらった。

「答えませんか。では、さようなら」

目にも止まらぬ速さで、射命丸は妖怪たちの間を縫い、妖怪たちを通りすぎた。

妖怪たちは何が起きたか分からず困惑していたが、一拍置いた後、身体中が鋭利な刃

で斬り裂かれたようにバラバラになった。

射命丸はため息をつく。

「こんな哀れになる程弱々しい妖怪が、私に喧嘩を売るなんてやっぱりおかしいですね。

まあ、十中八九幻想郷に流れているこのおかしな力のせいでしょうけど」

射命丸は空から目を凝らした。

本当に微妙だが、幻想郷の空気に何かの力が混じっている。

その何かの力を色で言うなら赤色かなど、射命丸はなんとなく思った。

この何かには、妖怪しか気付けないようだ。

おそらく妖力に近い力なのだろう。

別にこの力自体が悪いわけではない。純粋な力といつてもいい。

問題は、その力を妖怪が己のものにできてしまうこと。

さっきの妖怪たちは、弱いくせに力を手に入れたことに酔い、好戦的になっていたのだ。

そこまで考えて、射命丸は一つ腑に落ちないことがあるのに気付く。

「私は争い事を好まない平和主義者の筈なんですけど、なんで相手にしてしまったんでしょう?」

いつもなら、あんな相手にしたところで何のメリットもない奴らを倒さないだろう。

自分の速さは、幻想郷一だと自負している。

あんな雑魚妖怪をスルーすることなど朝飯前だ。

ふと射命丸は己の両手を見つめる。

「私も——好戦的になってる?」

千年生きている私が——こんな力の影響を受けている。

それはどうしようもなく屈辱的で、なのに嫌な気はしない。

妖力が身体中を縦横無尽に駆け巡る。幻想郷に身を置くだけで、妖力が際限なく上昇していく。

身体の奥底で熱が灯り、自分の身を燃やしている。

射命丸は自分の中にチリチリとした火種があることを自覚している。

「ああ……それでも、この高揚感は止められない」

目の前に無償で自分の力を高める力があつたとして、一体どれだけの妖怪がそれを拒否出来るだろう。

おそらく拒否する妖怪なんていない。

射命丸には、この力が何かは分からない。

だが、この力の発生源は分かっていた。正確に言えば、魔理沙に会い外来人を見た瞬間に気付いた。

外人は気付いていないようだが、彼の身体から幻想郷に漂う力と同じものが微かに漏れていた。

あんな力を垂れ流しながら妖怪の山にすれば、一瞬で危険人物とみなされ、妖怪の山にいる妖怪全てが排除しようとするだろう。

「——さて、魔理沙さんとナルトさんは博麗神社に向かっているようですね」

だとしたら、二人は博麗霊夢と出会うことになる。

彼女は人間だが、ナルトの力に気付くだろうか。

そして、この異変の原因が彼だとしたら、彼女は一体どんな選択をするのだろうか。

ただ、一つだけ確信している事がある。

二人が出会うとき、平和だった幻想郷は終わりを告げ、異変が本格的になる。

「私は新聞記者。物事には直接介入せず、事の成り行きを見守るのが常。ですが、霊夢さんには色々お世話になってますからね。人里を襲う妖怪から、人里を守るくらいのこととしてはあげますよ」

それに、人里には自分の新聞を読んでもくれる読者もたくさんいるのだ。

「そうと決まれば、早く記事を書き上げないと——！」

射命丸は止めていた身体を動かし、妖怪の山に向かって飛翔する。

射命丸が通った後の軌跡は、僅かに赤色を帯びていた。

◆ ◆ ◆
ナルトと魔理沙は博麗神社目指して全力疾走で走っていた。

博麗神社の周辺の森には妖怪がいて、魔法の森と同じようにそれらの妖怪たちが束になつて二人を襲つてきたからだ。

「これが普通なのか魔理沙!? こんなところに本当に人が住んでるのか!」

「住んでる! 魔法の森を抜けた時に、指差してあれが博麗神社だつて言つただろ!」
「博麗神社は見たけどさあ! こんな人があそこに行けねエだろ!」

ナルトの疑問はもつともである。

ナルトや魔理沙でなければ、たちまちに妖怪に追いつかれ、命を落としてしまうだろう。

「確かに人間がここに来たら、妖怪たちに襲われるかもしれない! だから、普通の人間は滅多にここに来ようとしなせ! ただ、霊夢だけは例外だ! あいつは何故か妖怪に好かれるからな!」

魔理沙は箒に乗って低空飛行をしながら、後方を振り返る。

(けど……こんな風に妖怪が人を襲うなんて、やっぱりおかしいぜ!)

魔法の森の時といい、間違いなく幻想郷で何かが起こってるぞ!?)

そんな疑問を胸に、魔理沙はナルトとともに博麗神社の鳥居前の石段にたどり着いた。

ナルトたちを追いかけていた妖怪たちは、石段前にたどり着いた時にはいなくなっていた。

「さすがにこの場所までは、来ようと思わないようだな。安心したぜ。妖怪を引き連れて霊夢のところに行ったら、何て言われるか想像もしたくないからな」

「なんでこの場所には来ないんだ?」

ナルトは肩で息をしながら尋ねる。

「博麗神社に住んでる霊夢は、問答無用で妖怪を退治するときもあるからな。妖怪にとつては天敵みたいなもんだぜ。まあそれで妖怪に好かれるんだから、不思議だけだな」

会話をしながら石段を上がっていく。

そして石段を登りきり鳥居をくぐった時、ナルトと魔理沙は霊夢を見つけた。

霊夢はナルトたちのほうに背を向けて、境内の掃除をしている。

「おーい霊夢! 魔理沙様が来てやったぞーッ!」

魔理沙が声を出しながら、霊夢に近付く。

「うるさいのが来た。一体何の用——」

鬱陶しそうにしながら魔理沙の方に振り向いて、霊夢は目を僅かに吊り上げた。

「……呆れたわ、魔理沙」

「え？ ああ、いきなり来たのは悪いと思ったけど、こんなのいつもの——」

「そつちじゃないわ」

霊夢はナルトを睨んでいる。

「この男と一緒にいて、何も感じなかったの？」

「——え？」

「なんだ？ オレってなんかおかしいのか？」

そう言ったナルトを霊夢は鼻で笑う。

「おかしい？ あつきれた！ あんた、自分が何をしているか分かってないの!？」

「……は？」

「あなたの身体から流れ流してる変な力を止めろって言うてるのよ!」

霊夢にそう怒鳴られ、ナルトはハツとしながら周囲に意識を凝らす。

「——これって九尾のチャクラ？ 漏れてるのか……？」

「なんでだ!?! まさか、封印が——!」

ナルトは服を捲り上げる。

魔理沙から制止の声があがったが、ナルトの耳には入ってこなかった。

ナルトは自分の腹部にされている八卦封印を見る。

見た瞬間に、ナルトの顔から血の気が引いた。

「八卦封印が……少し霞かすんでる」

八卦封印の形はしっかりと残ってる。

だが八卦封印の術式は、墨で書かれたように真っ黒でなければおかしいのだ。

今の八卦封印は、僅かに白みがかっていた。

『九喇嘛！』

《ああ！ ワシも今気付いたぜ！ それくらい僅かな綻びだ！ だが、ワシがその気に

なりやぶつ壊せるくれえに弱くなってるぞ！》

いつだ？ いつ、八卦封印がおかしくなった？

《……もしかすると、金髪のガキの黒い螺旋丸が原因じゃねえか？》

ナルトは黒い螺旋丸に当たった影分身の記憶を持っている。

その記憶を思い返す。

『あの黒い螺旋丸はオレの腹、ちょうど八卦封印があるところに当たってる！ 間違

ねエ！』

金髪の少女——フランドール・スカーレットと魔理沙が言っていた。

彼女は封印も壊せる力を持っているのか。

『九喇嘛！ このチャクラどうにかできねエのか!?』

《無理だ！ 八卦封印をし直すしか、このチャクラは止められねえ》

「そういえば、まだ名乗ってなかったわね」

霊夢の声が響き、ナルトは九喇嘛との会話から現実へと意識を引き戻された。

「私の名前は、博麗霊夢。」

博麗神社の巫女で——あんたみたいな幻想郷をおかしくする奴を懲らしめる異変解決を生業にしているわ」

霊夢の手にはスペルカードが握られている。

「おい霊夢！ いきなりそれはないぜ！」

「魔理沙、私の邪魔をしないで！ これは——異変よ！」

こうして、九尾のチャクラが幻想郷を覆った異変。

後に『九尾異変』と呼ばれる異変が始まった。

第1章 九尾異変～G o b e r s e r k m o n s t

e r s

決裂～M i n d p a s s i n g e a c h o t h e
r s

博麗神社の境内で、霊夢はスペルカードを握りながらナルトに敵意を向けている。

「待て霊夢！ ナルトから漏れてる力のことを聞いてからでも遅くないぜ！」

「……答えてくれる？」

「もちろん！ オレに答えられることなら何でも答えるぜ！」

ナルトは笑みを浮かべた。

しかし表面上は笑顔でも、その内は焦燥に駆られている。

「なら質問。あんたから漏れてる力は何？」

「うーん……分かりやすく言うと、オレの身体の中には九尾っていうものすげエ力を持つた奴が封印されてる。その封印が少し壊れたせいで、そいつの力が外に漏れちまつ

てるんだ。

ほら、オレの腹んとこになんか書いてあるだろ？　これが封印になって、今はちよつと白くなってる。この封印は真つ黒じゃねエとおかしいんだ」

信憑性を高めるため、ナルトは自分の服を捲り上げ、霊夢たちに封印を見せた。

「ふーん。——で、その封印とやらを元に戻すあてはあるの？」

「ちよつと待つてくれ。今聞いてみるから」

霊夢が胡乱うろんげな視線をナルトに送る。

ナルトはそれに構わず、自分の内側に意識を集中させた。

『九喇嘛、話は聞いてたな。この八卦封印を元に戻すあては何かあるか』

《あてならあるぜ。八卦封印のやり方なら、ワシがよく知つとる。だから、ワシの言う通りやりやあ封印し直すことができる》

『なくんだ、意外と簡単にできそうじゃん！』

ナルトが笑つて、両手を頭の後ろに持つていく。

《だが、問題がいくつがある》

そう九喇嘛が口にした瞬間、ナルトから笑みが消え、真剣な表情になる。

《ナルト、ペインと闘つた時を覚えとるか？　あの時、八卦封印は解けそうになったが、

チャクラ体のミナトが八卦封印をし直した》

『しつかり覚えてるさ。あの時父ちゃんが来てくれたから、オレは最後の最後で踏み留まることができたんだ』

ナルトは目を細めた。

本当に四代目は抜け目なかった。

助けてほしい時、いつも助けてくれた。

あんな風になりたいと、今も思ってる。

《あれは使えん》

『なんでだ？』

《あの時は時間が経つにつれて弱くなった八卦封印を、チャクラを流すことで元の強さに戻した。今回のケースは違う。ワシを封じ込めてる檻をよく見てみる》

ナルトは檻を注意深く見る。

檻にはうつすらと亀裂が入っていた。

《分かったか。八卦封印が弱ってんじやねえ。八卦封印が壊れかかってんだよ。ミナトのあれでなんとかできるレベルじゃねえ》

『マジかよ………つてことはまさか——』

《八卦封印は封印する対象がいねえとできねえ。つまり、ワシを一旦外に出して封印することになる》

ナルトは身体を震わした。

人柱力から尾獣を抜くことが何を意味するのか、ナルトにはよく分かっている。

尾獣が抜かれた人柱力の末路は死。

《お前の母のクシナは、弱っていても少しもつた。尾獣が解放されても、お前なら間違いなく少しの間はもつ》

『けどよお！ オレに封印するなら誰が八卦封印するんだよ！』

八卦封印の場合には、術者と封印の対象者を一緒にはできないのだ。

《そこは影分身に封印してもらえりゃあ解決だ。お前が八卦封印を使えるようにならねえといけねえがな》

ナルトはぐつと下唇を噛んだ。

封印術に関しては、今まで一切手をつけていない。

当然八卦封印も使えない。

《不安がる必要はねえ。今のお前はミナトよりチャクラコントロールが上手くなって
る。

ワシの言う通りやりやあ、一発でできるぜ》

『九喇嘛……まさかオレを元氣付けようとしてんのか!?!』

九喇嘛はナルトが驚きで目を見開いているのを一瞥いちべつすると、不愉快そうにそっぽを向

いた。

《……ワシがそんなことするわきやねえだろ。くだらねえこと言うじゃねえ。つたく、話を進めるぞ。》

第二の問題点として、この幻想郷とかいう場所だ。何故かは分からんが、ワシの力がよく馴染む。ワシらが言われるまで気付けなかつた原因はそれだ。

そんな空間でワシを解放すりゃ、一気にワシの力は幻想郷に広がるぞ。今までとは比べもんにならん濃度でな》

もしそうなれば幻想郷にどういいう影響がでるのか、ナルトにも分からない。

だが、悪いことにしかならないのは確かだ。

《第三に——》

『まだあんのかよ!?!』

《次の問題が一番重要だぜ、ナルト。八卦封印は繊細な作業だ。そこをさつきみてえに妖怪どもに襲われたら、正直封印が成功する可能性は低い。ちなみに、影分身で守らせるって選択はねえ』

影分身は力を均等に分けて分身する。

つまり分身の数が多ければ多いほど、一体あたりの質が低くなる。

八卦封印を確実に成功させたいなら、影分身を最小限に抑えて質の高い分身で封印す

るべきだと、九喇嘛は言外に言っているのだ。

《……とまあ、今のところワシが思いつく問題点はこんだけだ。だが、この三つの問題点全てを解決する方法が一つある》

『八雲紫つて奴に木の葉の里に帰してもらおう——だろう？』

九喇嘛はにやりと口の端を吊り上げた。

《その通りだ》

これらの問題点は、幻想郷だから起きることだ。

木の葉の里に帰れば、八卦封印できる忍がいるだろうし、九尾のチャクラが空気中に混じることもないし、結界も創れるし、封印中の護衛に困ることもない。

これが一番確実に楽な解決方法だという結論を、ナルトと九喇嘛はだした。

『じゃあ、魔理沙たちに話してみる』

《しつかり全てを伝えろよ》

この会話を最後に、ナルトは精神世界から現実へと戻った。

「待たせた——へぶっ！」

ナルトの右頬を霊夢がひっぱたいた。

ナルトの身体は弧を描いて吹っ飛ぶ。

「あ、ようやく反応したわ。まったく、急に黙らないでよ。どれだけ私が話しかけても上の

空なんだから」

「いや、確かに反応しなかったオレも悪いけどよお、身体が飛ぶくれエ強くすることねエだろ」

ナルトはぶたれた頬をさする。

「はいはい、悪かったわ。で、その封印とやらの解決方法は何？」

霊夢は悪いと思っっているような素振りは一切見せず、話を進めた。

「オレ自身が再封印することだけど、いくつか問題がある」

ナルトは九喇嘛の言った三つの問題点を、霊夢と魔理沙に話した。

「——じょうつつだんじやないわ!! あんたの中の奴を幻想郷に出すなんて!」

霊夢が額に青筋を立てている。

「他に何か方法はないのか……?」

魔理沙は不安気に染まった瞳でナルトを見る。

ナルトが安心させるように笑った。

「心配すんな! 今言った問題はここだから起きるんだ。だから、オレが自分の世界に

帰れば大丈夫! 幻想郷に迷惑をかけない」

「あっ」

霊夢と魔理沙は同時に声を出した。

二人とも、幻想郷で解決しなければならぬと思いきんでいたのだ。
霊夢は何度も頷いた。

「うんうん、それが一番確実だわ。私も楽だし。そうと決まれば……出てきなさい、紫！」

霊夢は何もない空間を睨む。

霊夢が声を出してから数秒後、霊夢の睨んでいる辺りが割れ、無数の目がある空間が現れる。

そして、アフロの少女が顔を出した。

「……紫、一つ聞かせて。なんでアフロなの？」

「えくと……これには海よりもふかくい理由があるのよ」

紫の視線が魔理沙の方を捉えた。

魔理沙は腹を抱えて笑っている。

「あつはつはつはつ!! なんだよ紫! ミュージシャンを目指すなら言ってくれよ、寂しいじゃないか!」

「さあ魔理沙——あなたの罪を数えなさい。今謝るなら、四分の三殺しで許してあげるわ」

「いやいや、先に喧嘩を売ったのはそっちだ。いわば、自業自得だぜ。それにしても不思議

議だな、私は腕に『起爆札』を付けたのに」

「この私があなたに遅れをとるわけないじゃない」

紫は、魔理沙が何の策もなく腕を掴みに来る筈ないと考え、腕に貼られた『起爆札』に気付いた。

紫は急いで札を剥がし、スキマを使って外に捨てようとしたが、捨てようと手から離れた瞬間に爆発し、頭がその時近くにあったため、爆発の影響でアフロになつてしまつたと、そういうことらしい。

「いや～その頭で言われても……な」

魔理沙が笑うのを必死に堪えていた。

紫の額に血管が浮かびあがる。

「魔理沙、一つ教えてあげるわ。何が正しいかというのは、勝者が決めるの。つまり、これからあなたの方が悪になるのよ」

「へっ、やれるもんならやってみな。そのアフロ、もつとオシャレにしてやるぜ」

二人の視線がぶつかり合い、火花が散る。

その二人の頭を霊夢が同時に拳骨した。

二人とも頭を両手で押さえるようにして、その場にしゃがみこむ。

「止めなさい。私はそんな事させるために呼んだんじゃないわ。紫、あなた気付いてる

でしょ？ 外来人の影響で、幻想郷に変な力が流れていること」

「ええ、私だって妖怪だから」

紫はゆつくり立ち上がり、口元に薄く微笑を滲ませた。

「じゃあ、この外来人を今すぐ元の世界に帰しなさい。そうすれば異変は解決。幻想郷も元通りよ」

「ホントにそうかしら？」

霊夢を嘲るように、紫の声が響いた。

霊夢の目に刀剣に似た鋭さが宿る。

「私の言ってること、なんかおかしい？」

「いえ、霊夢の言う通り、彼を帰せばこれ以上彼の力が流れることは無くなるわね。

でも、これまで流された力で幻想郷の妖怪たちは強くなっている。彼を帰しても、その力が消えるわけじゃないわ」

「じゃあどうするのよ？ 幻想郷の妖怪全てを退治すれば解決？ それをした後の幻想郷は、幻想郷と言えるの？」

幻想郷は、妖怪たちもいるからこそ幻想郷なのだ。

妖怪たちを退治すれば異変を解決できるが、それでは意味がない。

「言えないわね。ただ、妖怪たちを排除せずにこの異変を解決しようと思ったら、その力

の元である彼が絶対に必要になると私は考えてる。

……ナルトくんだったわね。あなたのその封印は幻想郷でもできるのでしょう?」

「できなくはねエけど、幻想郷に迷惑をかけることになっちゃう」

ナルトが顔を俯ける。

紫は目を細めて仄かな笑みを浮かべた。

「幻想郷は全てを受け入れる。あなたはここに住む者たちの助けを遠慮なく借りていいのよ」

「ふざけないで!!」

そんな二人を射ぬくように、霊夢から氷の冷たさを感じさせる気配が放たれる。

「紫、あんたはいつもそう。そうやって、私をイラつかせる。今まであんたのせいで何回異変が起こったの?」

外来人を次から次に幻想郷に入れて、それで終わり。その後の事は全部幻想郷のみんなに任せっぱなし。そのうえ、飽きたらとっとと外来人を元の世界に帰す。

誰があんたの尻拭いをしてやってると思ってるの!?

好き放題して幻想郷を荒らすあんたには、私も限界なのよ!」

「幻想郷に住む者以外は排除すべきだって言ってるの?」

紫は静かに霊夢に問いかける。

「幻想郷は全てを受け入れる——この事に関して、私から異論はないわ。

ただ、それを盾にやり過ぎだつて言ってるの！ 何事にも限度があるのよ！」

「でも、そうしないと何も変わらないわ」

「変わることに正しいことなの!? 私は今の幻想郷を気に入ってる。それを壊そうとするなら、全力で叩き潰す」

霊夢の視線がナルトに移る。

「紫はあんたを帰す気はないみたい。だから私が外に出してあげる。あんたの世界じゃないかもしれないけど、そうなつてもきつと紫があんたの世界に帰してくれるわ」

「霊夢、いくらなんでもそれは酷いだろ!? ナルトの言った問題をクリアできれば、別に幻想郷でも大丈夫の筈だぜ！」

それに紫が言つてた、妖怪たちが取り込んだナルトの力はどうするんだ!？」

霊夢は水面の静けさに似た双眸そうぼうで、魔理沙を見た。

「私が全て奪う」

霊夢の周囲に、赤色のオーラがまとわりつく。

「霊夢、お前まさか……ナルトの力を使えるのか!？」

魔理沙の驚愕の瞳を、霊夢は静かに見据える。

「要は力を同調させればいいのよ。妖力に近いから、妖怪たちが力を同調させやすいだ

け。さてと……じゃあ、あんたを外に出してあげる」
霊夢の周囲の赤いオーラが、更に勢いを増した。

うずまきナルトVS博麗霊夢〜Unilateral deployment〜

ナルトは冷や汗を流しながら、目の前の霊夢を見ていた。

霊夢の周りを覆う九尾のチャクラ。

九尾の衣にはなっておらず、オーラのような感じだが、身体能力を飛躍的に上昇させていることは、九尾の力をよく知るナルトだからこそ気付いていた。

「あんたは外に出たいのよね？」

「ちげエ！ オレはオレの世界に帰りにエンだ！ 外ならどこでもいいつつうわけじゃねエ！」

霊夢の冷めた目を真つ正面から受け止め、ナルトは霊夢からの敵意を振り払うように力強く言った。

幻想郷から出たとしても、そこがもし幻想郷のような世界だったら、被害が拡大していくだけだ。

今も九尾のチャクラが漏れ続けている以上、自分のいた世界以外の世界に行くのを、ナルトは許容できなかつた。

「——そう、よく分かったわ。なら異変らしく、『弾幕ごっこ』でどうするか決めるのはどう？」

私が勝ったら幻想郷の外に行ってもらおう。あり得ないけど、もしあんたが勝ったら、幻想郷で封印するのを許可してあげてもいいわ」

「断るって選択肢はねえんだろ？」

霊夢は眉一つ動かさず頷いた。

「ええ、ないわね。もし断るなら、『弾幕ごっこ』じゃない戦闘になるだけよ。今の私なら肉弾戦もできそうだし。」

勘違いしないで。問答無用で外に出すことだって私はできるの。なのにわざわざあんたにチャンスを与えてる。この提案は、あんたしか得しない提案なのよ」

魔理沙は怪訝そうに霊夢を見た。

魔理沙は、霊夢が『弾幕ごっこ』で一度も負けてないのを知ってる。

ナルトしか得しないといいながら、霊夢が自分の独壇場に引きずり込もうとしているのが、魔理沙にはよく分かった。

しかしナルトにそれを伝えようとは思わなかった。

結局のところ、霊夢とナルトは闘うしかない。二人の意見の妥協点がないのだから。

それを解決できるのは紫ただ一人だが、紫は静観を決め込んでいる。

どうせ闘うなら、『弾幕ごっこ』の方がまし。魔理沙はそう結論した。それに魔理沙は、霊夢とナルトを信じている。

きつと『弾幕ごっこ』で仲良くなつて、霊夢がナルトの力になつてくれると。

「分かった」

ナルトは霊夢の提案を呑んだ。

「……つと、忘れてた。あんた外来人でしょ。『弾幕ごっこ』のルールは知ってる？」

「紅魔館のフランツで女の子に教えてもらった」

霊夢の口元がにやりと緩められる。

「そう。ちよつと不安だけど、まあいいわ。それじゃあ……始めましょうか」

ナルトと霊夢は同時にバックステップして、お互いに距離をとる。

霊夢の手に握られていたスペルカードが光を放ち始めた。

「霊符『夢想封印』」

霊夢から色とりどりの光弾がナルト目掛けて飛んでいく。

ナルトは横に跳んで回避。だが、光弾はまるでナルトに引き寄せられるように軌道を変え、ナルトに襲いかかってくる。

「迫尾してくんのか!?! なら——!」

背後から迫ってくる光弾たちを睨み、印を結ぶ。

「火遁・豪火球の術！」

ナルトが口から火を吹く。

巨大な火球となった火は光弾にぶつかり、互いに相殺し合って爆発した。

ナルトはほっと息をつく。だがそれも一瞬の安堵でしかなく、その爆煙を切り裂くように霊夢が現れ、瞬く間にナルトの眼前へと近づく。

「はい、残念」

霊夢は至近距離から光弾を一つ、ナルトに撃ち込む。

ナルトは地面を蹴り、空中に逃れる。

逃げた先は、多数の光弾に囲まれていた。

「その逃げ方はハズレ」

ナルトはクナイを一本、霊夢のいる方とは逆の方向に投げる。

その一瞬後、多数の光弾がナルトを押し潰すように迫り、大爆発を起こした。

博麗神社が爆発の衝撃と爆風で震動する。

ナルトはクナイのマーキングに『飛雷神の術』で飛び、光弾から逃れた。

そのすぐ背後には霊夢が既におり、今度は零距离から光弾を一つ、横腹にぶつける。

ナルトはその光弾を避けられずに被弾し、殴られたような衝撃とともに真横に吹っ飛んだ。

霊夢は吹っ飛んだナルトを得意気な表情で見据えた。

「あんたがああ刃物のところに現れるのは分かった。勘だけだね。」

時間を止めて移動、瞬間移動、高速移動、空間移動……その中のどれかは分からないけど、その刃物のとこしか行けないんでしょ？

じゃないと、あの時刃物を投げたあんたの行動に説明がつかないわ。

今更だけど、ああ刃物は私の方にも投げた方が良かったわね。そうすれば、少しは攪乱できたのに」

ナルトは上手く受け身をとって、中腰の姿勢で霊夢に向き直る。

(……つええ)

霊夢は常にナルトの先を読み、ナルトの動きを分析しながら闘っている。

フランとは全く違う闘い方。

『弾幕ごっこ』の勝ち方を知っている者の動きだ。

「それからさっきの火の技……弾幕を防ぐだけならいいかもしれないけど、その後が発生する爆煙は自分の首を絞めるだけね。『弾幕ごっこ』では使わないことをオススメするわ」

「……アドバイスどーも」

ナルトはジト目になって霊夢に言った。

(ものすげエ余裕かまされてる)

わざわざ忠告してくれるのはありがたいが、少しイラツとくるのも事実だった。

自分の内に感じる熱を必死に抑え込みながら、ナルトは地面に軽く手をつけて、地面を蹴り横に高速で移動。移動する姿は猫を思わせる姿をしていた。

更に博麗神社の周りに生えている木を蹴り加速。再び地面、灯籠、鳥居、木——それらを次々に蹴り、ナルトは加速していく。

そして博麗神社にはただ何かを蹴る音だけが響き、ナルトの姿は見えなくなった。

(本来なら、もつと障害物の多いところで使う技だけだな)

もしくは狭い場所、森林や建物の中などで真価を発揮する技だ。

しかし、使えないことはない。行動パターンは限定されるが、姿すら映らぬ速さでの接近戦は霊夢に対して有利だろうと判断した。

何故なら、霊夢は先程から光弾でしか攻撃していないからだ。

近距離でも手足を使わず光弾で攻撃してきたことを考えると、近距離での戦闘が不向きなんじゃないかとナルトは感じた。

だからこそその超高速戦闘。ヒットアンドアウェイで霊夢に反撃させず、一方的に攻撃する。

「罰当たりな……鳥居や灯籠を蹴るなんて」

霊夢は肩を震わしていた。

霊夢の周囲には蹴る音と僅かな土煙があがっているだけで、それ以外は何もなかった。ナルトの姿は景色に溶けたように見えない。

(ハハ！)

ナルトは霊夢の後ろにあつた灯籠を蹴り、一気に霊夢に近付き腕を掴もうとする。

それを霊夢は少しだけ身体をずらして回避。置き土産に『夢想封印』の光弾を三つ、回避する前の自分がいたところに置いた。

「いいっ!？」

ナルトは自分から光弾に突っ込んでいく形になり、光弾の爆発で後ろに吹っ飛び、灯籠にぶつかった。

「がっ!」

ナルトから呻き声が漏れる。ナルトはそのまま前のめりに倒れた。

「目にも止まらぬ速さってやつね。でも最後は私に接近してくるって分かってた。

なら、私を狙った瞬間の気配を感じとればいい。そんなの目を閉じてても避けられるわ」

霊夢はうつ伏せから両手で起き上がりとしているナルトを見下ろした。

「それと今あんたがやった技、私もできそう」

靈夢はナルト同様地面を蹴り加速を始める。

しかし三度目の加速の時にタイミングを外し、加速に失敗した。

首を傾げぶつぶつと呟きながら、靈夢は再び挑戦する。ナルトのことはほったらかしだ。

次は四度目で失敗、その次は六度目、その次は七度目。

ナルトはその間に起き上がり、靈夢の動きを注視。

靈夢はだんだんと加速していく時間が長くなり、今はナルトと同じように姿が見えなくなる程の速さになっていた。地面、木、灯籠、鳥居を蹴りながら、ナルトの周囲を動きまわっている。

「つておい靈夢！ お前さつき言ったことを思い出せ！ お前も鳥居と灯籠を蹴ってる

じゃないか！」

「私はいいの」

魔理沙からの指摘を加速し続けながら靈夢はそう返す。

加速しながら話したせいも、様々な場所から声が聞こえた。

ナルトは靈夢に内心で舌を巻いた。

ナルトはさつきの技を覚えるのに丸一日かかった。最初はそんなに難しくないが、姿が見えなくなる程加速してからは難易度が跳ね上がる。

霊夢はほんの数分でコツを掴み、今はもう蹴るタイミングを完璧にマスターしている。

(それに九尾のチャクラ、さつきまでは身体能力をそんなに強化できてなかったのに、今は最大限ついでついでいくれエ強化されてる)

九尾のチャクラを霊夢は使いこなせるようになったのだ。

おそらく天才なんだろう。物事の本質を感覚的に掴み、それを己のものにする能力。生まれながらの実力者。

再び自分の内に宿る熱に鬱陶しさを感じながら、ナルトは霊夢からの攻撃に身構える。

「そろそろ行くわよ」

そこから中から霊夢の声が響き、あらゆる方向から色とりどりの光弾がナルトに向かっていく。

ナルトはクナイを四本それぞれ別方向に投げた。それにまわりつくように複数の光弾がそれぞれのクナイに追従する。

「無駄よ。タネが分かっている技なんか使っても意味ないわ」

ナルトは迫ってくる光弾を『飛雷神の術』で避ける。

ナルトの姿が消えた刹那、霊夢は周囲に飛んだクナイを見た。

(爆発しない……?)

四本のクナイの内どれかに移動すれば必ず『夢想封印』の光弾に当たり爆発する筈だが、それが無い。

何か嫌な予感がして、霊夢は動きを止める。

動きを止めたのとほぼ同時に、霊夢の眼前にナルトが上から現れ高速で着地した。もし霊夢が動きを止めなかったら、組みつかれていただろう。

(あの刃物にしか移動できない筈……。闘う前にあらかじめ刃物を博麗神社のどこかに置いた? でもそれならあの時刃物を投げた説明がつかない。

あれは陽動するための下準備? なら今投げた刃物は何?

一つ確実なのは、刃物のある所に瞬間で移動できること)

霊夢の頭がフル回転で働き、今起こった予想外の事態を分析していく。

ナルトは霊夢を見て勝ち気な笑みをした。

「わりいな霊夢! もうこの場所はオレの領域モだけ!」

「意味の分からないことを……!」

ナルトは再び消えた。

霊夢は咄嗟かに屈む。

そのすぐ頭上をナルトの腕が掠めていった。

霊夢はすかさず光弾を撃つが、ナルトはもういない。

霊夢には分からないことだが、ナルトはさっきの超高速移動の時に、手で『飛雷神の術』のマーキングをしながらそこから中を蹴っていたのだ。

つまり博麗神社内は、ナルトのマーキングだらけの空間になっている。

霊夢は次々に様々な方向から接近してくるナルトを避け続けていた。

(右、上、後ろ、正面、左、右斜め後ろ、左上、後ろ……)

霊夢は不思議な感覚に陥っていた。

例えるなら、ピントの合っていないメガネからピントの合ったメガネに替えたような、寸分のズレのない世界。

ボヤけていた世界がはつきりとした輪郭で見える。自分の周りが手に取るように分かる。

(何これ……スゴい)

霊夢はだんだんと避ける動きがコンパクトになっていき、今はナルトを最小限の動きで舞うように避けている。

脳内でイメージした身体の動きを、反射に近い反応で実際の身体もイメージ通りになるぞる。

頭と身体が一体になっている感覚。本当に電気信号を介して身体に指示しているの

かと疑いたくなるくらい脳と身体のタイムラグを感じない。

靈夢の顔に笑みが生まれ、ナルトの予測不可能な攻撃を心から靈夢は楽しんでいた。そんな靈夢とは対照的に、ナルトは焦っていた。

接近戦ならどうにかできると踏んだのに、未だに靈夢を捉えられないからだ。

(くそっ、当たらねエ)

まるで写輪眼を相手にしているような感じだった。

自分の動きの一手先を常に選り続けている。そんな錯覚を覚えた。

「私に一発も当てられなくて、イライラしてるでしょ？ 仕方ないから一発当てさせてあげてもいいわよ」

靈夢は一枚のスペルカードを手に持ちながら、両手をあげた。

ナルトは絶句し、靈夢の正面に現れる。

「何を考えてる？」

「別に何も……ただ、こんなに一方的じゃあんたがつまらないかなって思っただけよ。

やっぱ『弹幕ごっこ』はお互いに楽しまなくちゃね」

靈夢は両手をあげたまま、にこりと笑った。無垢な少女のような綺麗な笑顔だ。

(どうする？ けど靈夢はあのまま動きそうにねエし、こつちから攻めるしか選択肢はねエ)

ナルトは正面から霊夢の右腕を掴もうと急接近——すると見せかけて、『飛雷神の術』で霊夢の後ろに飛んで左腕に左手を伸ばす。

ナルトの左手が霊夢の左腕に触れた瞬間、左手がすり抜けた。

「えエー!?! 何だコレ!?!」

まるでうちはオビトのようなすり抜け。

『『夢想天生』』

霊夢は両目を閉じ、静かにスペルカードを宣言した。

動揺するナルトの左手首を、霊夢は右手で掴む。

「騙して悪いけど、勝負だからね。勝たせてもらう」

霊夢はそのまま左手から光弾を撃ち、ナルトは避けれずに被弾。ナルトが被弾したのと同時に手を離し、ナルトは爆発の影響で吹っ飛んだ。

そしてナルトの吹っ飛んだ先は、多数の光弾で埋め尽くされていた。

ナルトの身体がそれらの光弾に触れる。

多数の光弾はうねりをあげて大爆発を起こし、ナルトの身体はそこに消えていった。

こうして、ナルトと霊夢の『弾幕ごっこ』は霊夢の勝利で幕を下ろした。

博麗靈夢～Emotional scars～

『夢想封印』の光弾の弾幕で生まれた爆煙の中にナルトは倒れていた。

「……いつてエ」

ナルトは顔をしかめる。

だが、思っていた程度の痛みはない。すぐに起き上がれるくらい軽い痛みでもないが。ナルトの衣服はボロボロになり、右手に巻かれている包帯も腕のところが少し破れていた。

『夢想封印』の爆煙が晴れ、その周囲を倒れながら見たナルトは苦笑いを浮かべる。

「これは……降参するしかねエな」

ナルトを囲むように『夢想封印』の光弾が置いてあった。

《降参するってこたあ、あのガキの要求を呑むことになる。本当にいいのか?》

『勝負に負けちまったんだ、仕方ねエさ。次行く世界は、幻想郷みてエな世界じゃねエといいな』

そういう世界なら、九尾のチャクラが漏れていても懸念は少ない。

《ナルト、ワシがこう言うのもなんだが、今回の負けは当たり前前の結果だぜ。はつきり

言つて手え抜きすぎだ》

ナルトは下唇を噛んだ。

四代目に憧れ、修業を続けて強くなった代償というべきか、ナルトはどれくらいの強さで闘えばいいか分からなくなっていた。

ただもし四代目だったら、女の子を怪我させるのを是と思うだろうか。

《今の闘いは腕比べだ。無傷で終わらそうなんて虫のいい話はねえ。きつと霊夢つてガキもその事を感じて、あんな挑発的に闘ったんだぜ》

『分からねエんだ。今の闘いの時、自分の中にもう一人の自分がいた。霊夢と真つ向から思いつきりぶつかりてエって思う自分。オレはそれを否定し続けた。怪我させたら、四代目らしくねエと思つて』

《ナルト、テメエはミナトみてえに頭で考えて動くタイプじゃねえ。頭で考えるより早く身体が動く、そういう感覚的なタイプだ》

ナルトは精神世界で俯く。

『……そうやって動いたから、オレがオビトの神経を逆撫でするようなこと言つたから、ネジは死んじまつた。もつと言ひ方を考えてたら、そうはならなかつたかもしれねエ』

《ナルト、お前——》

『シカクのおつちゃんやいのの父ちゃんだつて、あの時『飛雷神の術』をオレが使えてい

たら、本部に飛雷神のマーキングをして、十尾の尾獣玉を別のところに移動させることができたかもしれねエ』

ナルトは力強く両拳を握りしめる。

九喇嘛はナルトに気付かれないように嘆息した。

——重傷だな。

身体の方ではない。心の方だ。

第四次忍界大戦終了から数ヶ月後、世界に平和が戻り始めていた。

ナルトにとっては随分と久しぶりに得ることができた穏やかな時間。

今までのナルトは過去を見つめ直す余裕はなかった。やっと落ち着いていた時間がとれ、

ナルトは過去を見つめ直す余裕ができた。

そして、過去を見つめ直すうちに後悔が押し寄せてきたのだろう。

防げたかもしれない死。

もつと自分が冷静だったら、もつと自分に様々な術が使えていたら、もつと強かった

ら——。

そうやって自分を追い詰め、ナルトは波風ミナトを目指しだした。

ナルトにとって、助けてほしい時にいつも助けてくれたヒーロー。

ナルトはきつところ思っただろう。

四代目のようになれば、もう二度と大切な仲間を死なせることがなくなるんじゃないか。

九喇嘛はそれを止めようと思わなかった。

ナルトにとつて、いいきっかけになると考えたからだ。

それからナルトは、四代目に追いつこうと今まで敬遠してきた術やチャクラコントロールの修業を必死で行い、今の実力を手に入れた。

別に悪いことではない。

あの人のようになりたいと、自分が苦手なものに手をつけるのはとても良いことである。

要するに大事なのはバランスなのだ。

ナルトは死んでしまった人たちから目を背けて、過去の背中に逃げた。

そうやって自分を高めている間は、何も考えずにいられる。

またナルトはこれでもかというくらい、任務をこなした。これも任務をしている間は任務のことだけ考えればいいからだろう。

(気付いてるか、ナルト)

テメエの心はズタズタなんだよ。

第四次忍界大戦の時、うちはイタチに言われただろう。

もつと周りを頼れ、一人で背負い込むなど。

しかし、今のナルトに下手なことは言えない。

その言葉が更にナルトを追い詰める可能性があるからだ。

ナルトと親しい者はみなそれに気付いている。

ナルトの心が壊れてしまわないように、平静を装いなるべく明るく振る舞った。

幻想郷に来る直前に会ったイルカもそうだ。

イルカはそれとなく四代目を目指す理由を聞いて、ナルトに自分を見つめ直す機会を

つくった。結果としてみれば、効果なしだったが。

——皮肉なことだが、別の世界に来てよかったかもしれないねえ。

この世界に、ナルトを知る者はいない。

ナルトに対して変な気遣いをせず、自然体で接するだろう。

もしかしたら、ナルトの心の傷を癒せるかもしれない。

九喇嘛の脳内に、ナルトが六代目火影候補に選ばれた時の記憶がフラッシュバックし

た。



「綱手のばあちゃん、今なんて!？」

ナルトは驚きで目を見開いていた。

「だ〜か〜ら、お前が六代目の候補にあがったって言ってんだよ! もう四度目だぞ!」
綱手は呆れたように息を吐く。しかし、すぐに笑みに変わった。

「いよいよお前も火影候補だぞ、嬉しいだろ! ずっとなりたいと願っているものに、手を伸ばせば届く距離にいけるのだからな」

「ああ、すげえ嬉しい。けど……辞退させてくれねエか」

「ああそうだろう! お前なら二つ返事で受けると思つて——は?」

綱手はナルトをじつと見る。

その視線を振り払うように、ナルトは軽く頭を搔いた。

「だつてオレつてばまだ下忍だし。なんつーか、下忍からいきなり火影になるとかズリーだろ。オレ以外にも火影を目指してる奴は大勢いるんだからさ、やっぱしっかり上忍になつてから火影になるのがスジだとオレは思う」

綱手は残念そうな顔でそうかと言つてナルトの部屋から出ていった。

今にして思えば、綱手もナルトの危うさに気付いていたのだろう。

だから火影の候補にあげて、以前のようなナルトに戻そうとした。

(だがワシは気付いてたぞ、ナルト。下忍だ上忍だなんて本当はどうでもよかつたんだ

ろ。お前は火影になるのが、ただ怖かった)

火影になれば、自分の意思が木の葉の里全員の意思になる。

今までのように自分の心のままに突っ走れば、木の葉の里全員の命を危険にさらす可能性がある。

お前は不安だった。

自分の選ぶ選択が本当に正しいかどうか。

間違った選択肢を選んできました時、それを正しい選択にひっくり返す力があるかどうか。

そんなモン、考えるだけ無駄だということに気付かずに。



《おい、ナルト!》

九喇嘛は俯いているナルトに声をかけた。

ナルトは顔をあげ、九喇嘛を見る。

《ネジやシカクのことを今更言ってもしやあねえだろ。

それより、テメエは真剣勝負に手を抜かれたらどう思う?》

『どうって……そりや腹立つけどさあ』

九喇嘛の目付きが鋭くなる。

《そうだ、腹立つよなア！ テメエが女だから、ガキだからつって手え抜いた。いくら女やガキでも、お前と同じ気持ちになるんだよ！》

『——ツ！ けど、それで大ケガさせたらどうすんだ!?!』

《信じろ》

ナルトは九喇嘛の言葉に目を丸くした。

『しん……じる？ 何を?』

《自分と勝負する相手を信じろ。

こいつならこの技を避ける。

こいつならこの技を防ぐ。

こいつならこの技が当たっても最小限のダメージで抑える。

そうやって闘う相手を信頼してやれ》

『けど、もし殺しちまつたら——!』

九喇嘛は口の端を吊り上げた。

《お前自身を信じろ。一流の忍だろ、お前は。対峙した時にだいたいの相手の実力を感じとれる筈だ。

勘違いすんなよ。ワシは全力で勝負しろって言ってるじゃねえ。本気で勝負しろってつってんだよ。

手を抜くんじゃねえ、力を抑えて本気で闘え》

ナルトはハツとした表情で九喇嘛を見た。

《テメエは女、子供を傷付けねえことが優しさだと勘違いしてる。そんなモン、相手の気持ちなんか考えてねえ自己満足だ。

テメエは相手のことを考えてるようで、その実自分のことしか考えてねえ。

本当の優しさってのは、相手の気持ちを考えてやることだ。

たとえ相手が女、子供でも、本気で闘うのを願ってるなら本気で闘ってやんのが優しさなんだよ》

九喇嘛は歯ざしりする。

《……分かってんだよナルト、テメエもわりい。分かってただけどよ……どうしようもねえんだ》

九喇嘛から殺気が迸る。

《お前のことをなんも知らねえガキが、お前をコケにしやがった。挙げ句の果てに外に放り出すと——！　ワシの許可なくワシのチャクラ使ってるのも気に入らねえ！

ナルトオ、ちよつとワシに身体貸せ！　あの澄ましたツラ、恐怖で歪めてやらア！》

『九喇嘛落ち着け!! 今そうやって暴れたら、もっと印象が悪くなるだろ!』
《たわけが! この世界から追い出されんのに、印象なんざどうでもいいだろう!

この世界の奴ら、ムカつくぜ! こっちに協力しようとする奴がいねえ! どうせ出ていくな、全部ぶつ壊しちまおう!》

九喇嘛は怒鳴りながら、床を爪で引つ掻いていた。

しかし現実の世界を見て、その爪の動きが止まった。

九喇嘛の口元が笑う。

(そーいやあ一人だけ、ナルトに協力した奴がいたなア)

霊夢は『夢想封印』を解き、ナルトの周りの光弾を消した。

「さてと、それじゃあ博麗大結界のどこまで来て——ツ!」

霊夢の背中に悪寒が走った。

ナルトの身体から、尋常ではない殺気が放たれている。

霊夢は冷や汗を浮かべた。

霊夢は己の勘がよく当たったことを知っている。

そして、その勘が告げていた。逃げなければヤバいと。

しかし一人の人影が二人の間に入ると、ナルトから放たれていた殺気が収まった。

靈夢は我知らず息をつく。そうやって自分を落ち着かせた後、割って入ってきた人影を睨む。

「邪魔しないでくれる？ 私が勝ったら、外に行ってもらおう約束をしてるんだから」

「靈夢、私は幻滅した」

魔理沙は金色の瞳を怒りで輝かせている。

「は？ 何をいきなり言い出すの？」

「靈夢、お前に一つ聞く。」

お前は幻想郷に住んでる奴が異変を起こしてたから、異変を幻想郷で解決していたのか？

もし今までの異変も別の世界の奴だったら、外に放り出して解決したか？」

「そ、それは……」

「もういい。『弾幕ごっこ』しようぜ、博麗靈夢。私が勝ったら、ナルトとした約束はチャラだ」

「私に得がないじゃない」

「損得勘定で『弾幕ごっこ』はやるものか？ それにあの博麗靈夢が、私に負けると思ってるんだな」

魔理沙の挑発的な言葉に、靈夢は顔をしかめた。

「普段の私に勝てないくせに、今の私に勝とうなんか百年早いだよ。

いいわよ。その勝負、受けて立つ」

霊夢は軽く後ろに跳んで、魔理沙から距離をとる。

「魔理沙、なんで……」

ナルトが地面に倒れながらも頭を上げ、前に立つ魔理沙を見上げた。

自分にその気はなかったとしても、幻想郷を混乱させてしまっているのは事実だ。

だとすれば、自分は幻想郷の敵。

なのに、どうして自分の味方をする？

魔理沙は肩越しにナルトを見る。

「私を見くびるなよ、ナルト。少しの時間だったとはいえ、お前と一緒に行動したんだ。

お前が望んでコレをやったなんて思っただけ」

魔理沙がナルトに笑いかけた。

「それに、ナルトは友達だ」

ナルトは目を大きく見開いた。

「友達が困ってるなら、力を貸す。友達が助けを求めているのに、それを見て見ぬ振りができる程、私は器用じゃないんだ。

心配しなくていいぜ。私が霊夢の約束をなかったことにしてやる」

魔理沙はそう言うと、靈夢の方に顔をもどした。

(ナルトオ、お前の目には何が見える?)

精神世界の九喇嘛がにやりと口を歪めた。

ナルトは魔理沙の後ろ姿を、身体を震わして凝視している。

ナルトの視界の中で、魔理沙の後ろ姿に昔の自分が重なった。

魔理沙は背負っていた箒を取り、それに跨がり宙に浮かんだ。

「ひさしぶりだぜ……こんなに腹が立ったのは」

魔理沙が靈夢を睨み付ける。

「靈夢、私が思い出させてやるよ！ 博麗靈夢がどういう奴だったかをな！」

「御託はいいから、さっさと来なさいよ」

靈夢は苛立ちながら、スペルカードを手に持つ。

魔理沙も同様に、スペルカードを指に挟んだ。

「靈符『夢想封印』」

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

靈夢から放たれた多数の光弾が、魔理沙目掛けて突き進む。

それらを魔理沙は星形の光弾で迎撃。近付いて来た光弾を次々に相殺していく。

光弾と光弾がぶつかり合って空中で多数の爆発の花が咲き、二人の視界を塗り潰し

た。

「霊夢！ さっきの『弾幕ごっこ』の闘い方はなんだ!? 闘う相手をおちよくるような真似をして……そんな闘い方がお前の創った『弾幕ごっこ』の闘い方か!？」

お互いに爆発で相手が見えない中、魔理沙の声が響く。

霊夢は顔を一瞬だけ歪めたが、すぐにその表情は消え、憎々しげに舌打ちした。

「あの外来人が悪いのよ！ さっきの『弾幕ごっこ』……あの外来人は私の腕を掴む事しか考えてなかった。

その意味が分かる？ この私をケガさせないように勝とうとしたのよ！ まるで私のことなんか相手じゃないって言ってるみたいだ！ そんなの許せるわけないじゃないー！」

霊夢は更に『夢想封印』の光弾を増やした。

魔理沙は箒で地面に急降下して、一枚のスペルカードを取り出す。

「儀符『オーレリーズサン』！」

魔理沙の周囲に四つの球体が現れ、魔理沙を中心に周回する。

それらが霊夢の光弾を阻む壁となり、霊夢の光弾は魔理沙には届かない。

——時間はかけない。一気にいくぜ！

ミニ八卦炉をスカートの中から取り、手から離す。魔力でミニ八卦炉は魔理沙のすぐ

隣に浮かび、魔理沙からの意思を受信しているかのように、靈夢の弾幕を避けながら靈夢の頭上に移動した。

靈夢はそれに気をとられ刹那の間、魔理沙のことが意識の外へと弾き出される。

魔理沙は筈の速度を上げ、スペルカードを取り出しながら靈夢に肉薄した。

「星符『エスケープペロシテイ』！」

魔理沙は靈夢の眼前で筈を縦にしながら急停止。代わりに大量の星形の光弾がショットガンのように靈夢に撃ち出され、魔理沙はそのまま一気に急上昇。その際靈夢の頭上にあつたミニ八卦炉を回収。

その光景は、魔理沙が発射されたロケットを思わせ、下で起こっている弾幕の爆発が、ロケットから噴射された熱のように見えた。

「やったか!？」

魔理沙は爆発から遠ざかりながら、爆発を注視する。

「——そのセリフは言ったらダメなのよ、魔理沙」

靈夢は魔理沙より更に上に浮かび、魔理沙を見下ろしている。

「なッ——上!？」

魔理沙は上を見る。しかし靈夢の姿はなかった。

やられたと思った瞬間、魔理沙の真横に移動していた靈夢が一つ光弾を撃ち込み、魔

理沙は被弾。そのまま横に吹っ飛ばされた。

「あんたもバカね。余計なことしなきゃ、そんな目に遭わなかったのに」

「余計なこと？」

空中で回転しながら吹っ飛んだ魔理沙は体勢を立て直し、箒を握りしめる。

「そうか。友達を見捨てるのが賢いのか。なら、私は一生バカでいいぜ！ そんな生き

方、私は御免だ！」

「……フンッ！」

霊夢は鼻を鳴らし、『夢想封印』を再び使用した。

魔理沙を獲物に定めた猛獣のごとく、魔理沙に一直線で光弾の群れが飛んでいく。

魔理沙はその群れを箒に乗って移動しながら回避。縦横無尽に動き回りながら、どこ

までも追ってくる群れを避け続ける。

「くそっ！ 魔符『スターダストレヴェアリエ』！」

魔理沙は地面すれすれまで急降下して箒から飛び降り、いつまでも追ってくる弾幕に

痺れを切らした。

再び星形の光弾で霊夢の弾幕を相殺。爆風が魔理沙の帽子と髪を襲い、魔理沙は帽子

を右手で押さえた。

「やっぱこうしないとダメか」

未だ空中で静止している靈夢を、魔理沙は箒を背中に背負い直して睨む。

「私の知ってる靈夢はなあ！」

家で1日中ぐうたらして！ なんでもめんどくさいって愚痴をこぼして！ 修行とか一切せずに自分の才能にあぐらをかいて！ 金がないつつて香霖堂の代金をツケにしたり！ 鬱陶しいからつてその辺にいる妖怪を退治したり！ 異変解決を生業とか言ってるくせに、自分に不都合がなければ、周りに言われるまで放つておいたり——！」

靈夢の顔は羞恥と怒りで真っ赤になった。

「うるさ——」

「——けどッ！ どんな相手とも平等に接して、誰かを敵にしたりしない！」

異変解決に実際に乗り出すまで遅い時もあるけれど、一度乗り出したら積極的に異変解決に動いて、解決するまで絶対に投げ出さない！

めんどくさいって口では言いながらも、救いを求める手を払いのけたりはしない！

『弾幕ごっこ』で相手を蔑むようなことはしない！」

魔理沙はミニ八卦炉とスペルカードを構える。

「私の知る博麗靈夢はッ！ 力に溺れるような、弱い人間じゃないんだ!!」

恋符『マスタースパーク』!!」

靈夢は迫つて来た極太のレーザーへの対応が一瞬遅れ、右腕をレーザーがかする。

右腕の袖の一部分が、レーザーに吞まれて消えた。

魔理沙は霊夢のその一連の動きの間に、スカートの中からある丸薬を取りだし、口に含んで噛んだ。

「そらっ！ もういつちよー！」

今度は今より更に太いレーザーが霊夢に迫る。

——身体から魔力が沸き上がってくるぜ。

魔理沙が今噛んだ丸薬は『兵糧丸』。非常食にできる程高カロリーで、そのうえナルトが使う力、チャクラというものを一時的に増幅させる効果がある。

ナルトから話を聞いた時は不安だったが、チャクラだけでなく魔力も一時的に増幅できるとだ。

(霊夢なら、きっと『マスタースパーク』を鬱陶しがって、発射台を潰そうとしてくる筈。ナルトが封印している奴の力を手に入れた霊夢なら尚更だ)

魔理沙は右手でミニ八卦炉を持って『マスタースパーク』を撃ち続けながら、再びスカートの中に左手を入れて周囲に意識を凝らす。

霊夢は魔理沙の『マスタースパーク』を縫うようにかわしつつ、魔理沙の左に躍り出た。

魔理沙はニカッと勝利を確信した笑みをした。

魔理沙の左手が握っていた光玉が、スカートの中で離される。

その光玉が地面に落ちた瞬間割れて、強烈な光が靈夢を襲った。

「しまっ——」

靈夢はその光をモロに見てしまい、視界が真っ白に染まる。

「悪いな靈夢。こういう勝ち方しか思いつかなくてさ！」

『マスタースパーク！』

魔理沙から放たれたレーザーが靈夢を直撃し、靈夢はレーザーに吞まれながら後方へと吹き飛ぶ。

靈夢は地面に三回身体を回転させてぶつかりながら、最後は仰向けで倒れた。

魔理沙は靈夢が倒れているところに走って近付き、靈夢に向けてミニ八卦炉を構える。

「まだやるか？ 言っとくが『夢想天生』を使おうとしたら、このまま『マスタースパーク』を撃ちこむからな」

「……降参するわ……私の……負けよ」

魔理沙は勝ち気な笑みになり、ミニ八卦炉をスカートの中にしまった。

「そうか。なら、ナルトは連れてくぜ」

魔理沙はナルトのところへと歩く。

「どうだ、立てるか？」

「ああ、なんとか……その、ありがとう」

ナルトは息を整えながらゆっくりと起き上がり、魔理沙に頭を下げた。

魔理沙は笑顔のまま、軽く手を振る。

「いいって、礼なんて。これから私が行こうと考えている場所があるんだ」

「どこだ？」

「紅魔館。ナルトの封印がおかしくなったのは、フランのせいでもあるんだろ？」

お前はフランを庇って、フランが原因でおかしくなったって言わなかったが、私には分かるぜ。だから紅魔館の連中にも責任をとらせてやるんだ」

ナルトと魔理沙は博麗神社から歩いて去っていき、残されたのは霊夢と紫の二人になった。

霊夢は未だに地面に横たわり、動こうとしない。

そんな霊夢に紫が近付く。

「初めて『弾幕ごっこ』で負けた感想はどう？」

「そうね、意外と悪くない気分だわ。頭の中がスッキリしてる」

紫からの問いを、霊夢は空を見ながら返す。

「これで、ナルトくんは幻想郷に留まることになったわけだけど、あなたはどうする？
また幻想郷の外に追い出そうとする？ それとも、ナルトくんの封印に手を貸してあげるのかしら？」

霊夢は目を閉じた。

——誰かを敵にしたりしない！

——救いを求める手を払いのけたりしない！

霊夢の脳内で、魔理沙の力強い言葉が駆け抜ける。

「私は博麗靈夢よ。どっちを選ぶかなんて、分かりきつてるわ」

霊夢は憑き物が落ちたような清々しい表情をしていた。

霊夢は紫に視線を送る。

「……ねえ紫。あんた、私があの外來人を外に出そうとする直前に、止めに来るつもり

だったでしょ」

「さあて、どうかしら〜」

紫は悪戯っぽい笑みになった。

霊夢は苦笑しながらため息をつく。

「ほんと……イヤな奴」

私に迷惑をかけるくせに、私のことを気にかける。

一方的に迷惑だけをかけてくるなら、こんな複雑な気持ちにはならない。私を困らせ、私を助ける。

それが本当に迷惑だけど、嫌いじゃない自分がいる。

霊夢は身体を起こそうとする。その時、身体中に痛みがはしった。

「……っ！ 何よこの痛み、マスタースパークでもこうは——」

紫は扇子を取り出し、口元を隠した。

「あなたが使った力は、いわばドーピング。妖怪なら耐えられる負担かもしれないけど、普段修行を全くしなくて運動不足のあなたがそんな力を使えば、身体にガタがくるのは必然。多分明日辺り、全身筋肉痛になるわ」

霊夢の顔が青ざめていく。

「調子に乗るから、そういう反発が来るのよ。それと霊夢、言いくいことがもう一つあるわ」

「何よ」

「博麗神社の境内、ぐちゃぐちゃ」

「私の今日一日の成果が!?!」

霊夢は度重なるショックで、意識を失った。

紅魔館の庭で、咲夜が興味津々といった様子で美鈴を見ていた。

「見てください咲夜さん！ 尻尾が二本も生えてきましたよ〜！」

美鈴の身体を、赤色のついた半透明の衣のようなものがまとわりついている。

そして、尻尾のような形になった力が二本生えてきた。ついさっきまでは一本しか生えていなかったところを考えると、力を取り込む量に応じて変動するようだ。

「すごい力ですよコレ！ 今なら咲夜さんに勝てるかも！」

そう美鈴が口にした時、美鈴の周囲がナイフに囲まれた。

「誰に勝てるって？」

「スイマセン、調子に乗りました」

彼女達は、もうすぐここにその力の大元が来ることを知らない。

接触 World freezes

ナルトは傷付いた身体に鞭打ち、齒を食い縛りながら魔理沙とともに走っていた。現在ナルトたちは、博麗神社と人間の里のちょうど中間辺りにいる。その周りは木々が生い茂っていた。

ナルトはチラリと後ろを見る。

その目に映るは、様々な姿をした妖怪たち。

それらが大口を開けて、ナルトには理解出来ない叫び声をあげていた。

「つたく！ この展開にはもうウンザリだぜ！」

魔理沙は苛立ちながら吐き捨てる。

ナルトも心の底から同意し、何度も頷いた。

ナルトは今までと違い、今は何故妖怪たちに襲われるのか、なんとなく理解している。

——多分オレがこええんだろうな。

妖怪たちは九尾の力を取り込めるからこそ、その力の持つ強大さや危険性が分かるのだらう。

そして、こう結論する。その力を身に宿す存在が自分たちの敵になったらマズいと。

だから妖怪同士団結して、敵になる前に排除してしまおうと考え、こうして襲いかかってくる。

「このまま人間の里に行くのはマズい！ どうにかして、あいつらを追い払わないと！」

魔理沙がスペルカードを手に持ち、妖怪たちに鋭い視線を送った。

「魔符『スターダス——』」

魔理沙がスペルカードを宣言しようとしたその瞬間、妖怪たちが横に吹き飛んだ。

妖怪たちは互いの体軀に押し潰され、周りの木々を突き破りながら、奇声を発して倒れこむ。

辺りに妖怪たちが倒れた轟音が響き、倒れた衝撃でナルトたちの周辺が震動する。

「……………はい？」

ナルトと魔理沙は啞然としながらその光景を見た。

魔理沙は妖怪たちを横から吹き飛ばした相手を見て、身体を震わした。

癖のある緑色の髪をショートボブにした髪型。血の色を思わせる真紅の瞳。白いカッターシャツの上からチェック柄のベストを羽織り、同じくチェック柄のロングスカート。左手には日傘。

「風見……………幽香」

「お前が助けてくれたんだな。ありがとう——」

魔理沙は箒に飛び乗ってナルトの腕を掴み、そのまま脱兎のごとくその場から逃げ出した。

「つておい魔理沙！ まだちゃんと礼を言えてな——イテテテテ！」

「ナルト……あいつだけは……あいつだけはヤバいんだぜ。」

とにかく今は少しでも距離を——」

「距離が——何？」

魔理沙の横を涼しい顔で幽香が並走していた。

魔理沙は驚きその場で急停止。ナルトは慣性の法則によりつんのめった。

幽香は魔理沙の正面に立つ。

「私の顔見た途端逃げ出すなんて、いくらなんでもヒドいじゃない？」

「妖怪たちとお楽しみ中だったように見えたから、邪魔しちや悪いと思つて離れたんだ

ぜ。別に逃げたわけじゃない」

魔理沙の箒を握りしめる手は震えていた。

それだけで、目の前にいる女の子が普通ではないとナルトは理解出来た。

「……へえ」

幽香の目に圧力が加わり、ナルトと魔理沙は言い知れぬ圧迫感と息苦しさを感じた。

ナルトは意識して呼吸をすることで、自分を落ち着かせる。

「さつきは最後まで言えなかったけど、助けてくれてサンキューな」

「あら？ そっちはちゃんど礼儀つてものを心得ているのね。良かったわね、白黒の魔法使い。彼がいなかったら、少し教育してたわ。次つまらない軽口を叩いたら……その箒を叩き折る」

幽香は嘘じゃないと言わんばかりに近場の木を腕の力だけで殴り、根っこごと倒した。

魔理沙の顔は青ざめ、ナルトは絶句する。

幽香は倒した木に近付き、木を再び起こして元に戻そうとする。

引っこ抜いた根っこを土でしっかり埋めて、木が死なないようにした。

「分かった、よく分かったよ。私はお前が恐かったから逃げた。助けてもらったのは感謝してるぜ」

別に助けてもらわなくても私のスペルカードでなんとかなってただけだな、と警告される前は口にしただろうが、警告された今はそんな事を言う余裕がなかった。

幽香は満足そうに笑みを深くする。

「それでよろしい」

魔理沙はほっと息をついた。

「幽香、お前が何の理由もなくこんな事をする筈がない。ナルトに用があつて来たんだ

ろ？」

「ナルト……そう、あなたはナルトっていうのね。私は風見幽香、そこら辺にいる普通の妖怪よ。」

あなたに会いに来た理由は、あなたのその力のせいで雑魚が調子に乗っちゃって、平気でお花畑に入ってくるからなの。なんとかしてもらえない？」

「今、なんとかするために紅魔館に向かつてる。そこで解決策が見つかるまで、わりいけど待っててくんねえか」

幽香から表情と呼べるものがすうっと消えた。

代わりに全身から発せられる強烈な殺気。

ナルトたちの周囲の木々がざわめき、鳥たちが安全を確保しようと天を目指して一斉に飛び立った。

魔理沙は咄嗟にスペルカードを取り出す。

そのスペルカード名は彗星『ブレイジングスター』。

幽香が何かしようとしたら、全速力で逃げ出す腹積もりなのだろう。

ナルトは腹の辺りが冷たくなっていくのを感じた。

できることならこの場から逃げ出したい。

生物であれば必ず備わっている生存本能が必死に警鐘を鳴らす。

だが、逃げる事が許されるのか？

幽香は怒っている。幽香にとってお花畑はとても大切なものなんだろう。

大切なものを傷付ける原因に敵意を抱くのは当然だ。

さらに、その原因に解決策が見つかるまで待てと言われれば、余計に腹が立つのも必然といえる。

(殺気に吞まれんじゃねエ。意志を強くもて)

ナルトは掌を握りしめ、幽香の殺気を正面から受け止める。そして、幽香に向かって深く頭を下げた。

幽香の顔に微かに驚きの色が入る。

「調子の良い事言ってるのは分かってる。けど頼む、オレを信じてくれねエか」
数秒の静寂。幽香はじっとナルトを見ていた。

「うん、合格」

幽香は一つ頷くと、放たれていた殺気を消した。

「私はただ確認したかったのよ。これを悪意があってやってるかどうかをね。それに、今の殺気は私の本気の殺気。大抵の奴は私から逃げようとするか、身体を強張らせてその場から動けなくなるかのどっちか。

殺気に打ち克つ事ができるのは強者の証。口先だけの弱者ではなく、意志を貫ける強

者であることも分かった」

幽香はナルトに向かって微笑む。

「あなたを信じてあげるわ、ナルト」

「おう！　ありがとな！」

ナルトは頭を上げて、ニカツと笑った。

「ところであなた、ケガしてるじゃない。良かったら、私が人間の里まで送っていくわ」

「へ？」

ナルトの腕を幽香の右手が掴んだ。

そして遠投でもするように力強く踏み込み、人間の里の方向にナルトを投げた。

「ええええええええええ！」

ナルトは絶叫しながら、遠くに離れていく。

「ナルトオオオオ!!」

魔理沙は幽香を睨む。

「おい、ナルトはケガ人なんだ。もつと優しく扱えよ」

「あれで死ぬなら、その程度だったってだけよ。それに私の目に狂いがなければ、しっかりと着地するわ。あなたも早くナルトのところに行きなさい」

魔理沙は舌打ちしながら、箒に乗ってナルトが飛んでいった方向に飛び去っていく

た。

幽香は日傘を差しながら、魔理沙が去っていった方向を見ている。

「まだよ……まだダメ……私にケガ人を苛める趣味はないわ。やるなら、ちゃんとケガが完治してから……それまでは我慢、我慢」

幽香は身体中を震わして、今すぐにナルトと闘いたい衝動を必死に抑えている。

幽香の近くで、さっき倒れた妖怪たちが身じろぎした。幽香に気付かれないことを願って息を殺し、ゆっくりと離れようとする。

しかし木々が生い茂っている中、無音で逃げれるわけがない。ある妖怪の足が小枝を踏み、パキッと微かに音がでた。

妖怪たちはそくと幽香の方を窺う。

妖怪たちと幽香の目がバツチり合った。

「——あなたたちがいたわ。あなたたちをグチャグチャにすれば、少しはこの疼きも収まるかもね」

幽香の瞳に狂喜の光が宿り、口の端を吊り上げた。



投げ飛ばされたナルトは空中で一回転し、体勢を立て直して両手と両足同時に着地した。

地面に着いた衝撃で、身体にある傷に痛みが響いた。

「いつてえ……けど、人間の里の入口前まで楽に来れたな。風見幽香か。いい奴なのかわりい奴なのか、よく分からねえな」

「おーい、ナルトー！ 無事かー!？」

ナルトは声のする方を向くと、魔理沙が箒で空を飛んでこっちに近付いて来るのが見えた。

ナルトは大丈夫と伝わるように、魔理沙に向けて手を振る。

（それにしても、魔理沙は平気な顔して空飛んでんな。そういやあ、霊夢も空飛んでたっけ。幻想郷って場所は空飛ぶのが普通なんか？

けど、魔理沙はいつも箒に乗ってる。道具が浮かぶ力を持ってて、魔理沙と霊夢はそれを利用しているだけか？

（霊夢はあの服が浮かぶ力を持ってんのかな）

魔理沙が到着するまでの数十秒間、ナルトは暇潰しにそんな事を考える。

魔理沙が眼前に降り立ったので、ナルトは思考を中断した。

「さて、ナルト。紅魔館に行く前にお前の衣服を買いたいと思ってるんだが、どうだ？

そんなボロボロの服じゃ、誰かとすれ違うたびに大騒ぎになっちゃうぜ」

「そうしてエのはやまやまだけど、オレ金持ってねエぞ」

ナルトは儉約家であり、任務でがっぽり報酬を貰っていても、出かける時は最低限の金しか持たない。

これはきつと以前師匠である自来也に、大切に貯めていたお金を一気に使われたトラウマからだろう。

それともうすぐ木の葉の里だからと、道中の茶屋で残っていたお金を全て注ぎ込んだのが原因で、今のナルトは一文なしなのだ。

魔理沙は顎に細い指をもっていく。

「それは誤算だったぜ。たいてい外来人は自分の世界の金を持参しているからな。その金が幻想郷じゃ結構な値がつくんだけ。それとナルト、最初に言っとく。私は手は貸すけど、金は貸さないからな。というより、貸せるだけのお金を持っていないだけだけ」

「それは仕方ねエな。アレで乗り切るしかねエか」

ナルトは印を結ぶ。

「変化の術！」

ナルトの身体が煙に包まれた。

そして煙が晴れた後には、ボロボロだった服が新品のような綺麗さになっている。

魔理沙はあまりの衝撃に言葉が出てこないようで、何度も口をパクパクと動かした。「な、な、な——！ え……だって……えっ?! いやいやいや、おかしいおかしい、あり得ないぜ。そんなのはあり得ない。一瞬で服が新品になるなんて、そんな魔法でもないぞ」

ナルトは魔理沙のリアクションを新鮮に感じ、得意気な表情になる。

「今オレがしたのは変化の術つつつて、色んなものに自分を変化させれるんだ。人だけじゃねエ、さっきオレが使ってたクナイとかにもなれる。」

オレは新品の服を着た自分に变化した。強い衝撃を受けたりしたら、さっきのポロポロの服に戻っちゃうけど、普通にしてれば一日くらいならこの状態を保てる」

魔理沙はナルトの説明に目を輝かせた。

「ナルト、本当にちよつとだけでいいから解剖させてくれないか!? 物に変化している時の硬度はどうなってるかとか、色々実験したいこともある」

「目がギラギラしててこえエよ。解剖はさすがに許可できねエ。実験は……まあ、死ぬ危険を感じなかったら付き合ってもいいぜ」

「それで十分だ。なんにしても、服を買う手間は省けたな。」

「お前も知ってるだろうが、紅魔館は魔法の森を抜けた先にある。さっさと抜けて、紅魔館に行こう」

ナルトたちは人間の里に入らずに、魔法の森がある方に足を進めた。

魔法の森をしばらく進むと、大きな湖のある場所にでた。

「ここを抜ければ紅魔館まですぐだぞ」

魔理沙はナルトの横をふよふよと箒でゆっくり飛んでいる。

「知ってる。前紅魔館に行く時通った」

ナルトは周囲に気を配りながら、歩いている。

ついさつき妖怪たちをまとめて退治して警戒されているのか、今のところ妖怪には襲

われていなかった。

だが、またいつ襲われるか分からない。

ナルトはふと肌寒さを感じ、両腕を擦る。

「魔理沙、なんか肌寒くねエか？」

「別に気にしなくていいぜ。この湖を越えたら暖かくなる、というか早く越えよう。面

倒なのが来る前に」

「やいー」

ナルトと魔理沙の上から声がした。

ナルトは身体を擦りながら、魔理沙は心底嫌そうな顔をして声がした方を見る。

声の主は湖の上空に浮かんでいた。

髪は水色でセミショートヘア。水面のような透き通った青い瞳。頭には大きな緑色のリボンをつけている。

服は白のシャツの上から青いワンピースを着用し、首元には赤いリボン。

ナルトは一目で人間じゃないと確信した。

理由は、背中に氷で作られたような羽が六枚あったからだ。

「ところで、ケガの具合はどうだ？」

「えっ、ああ、大分良くなった」

魔理沙は何事もなかったようにナルトに話しかけ、そのまま湖を抜けようとした。

「やいやいやい！ このあたいを無視して、ここを通れると思ってるの!? この場所は

あたいがリーダーなんだから！」

「……本当に面倒くさい奴だな、チルノ」

二人の前に降りてきた羽のある少女を見て、魔理沙はため息をつく。

「違うわね、あたいはチルノじゃない」

チルノは右手の親指で自分を差す。

「あたいは超^{スパー}チルノよ！」

「いや、だからチルノだろ……」

ナルトはチルノを注意深く見た。

本当に僅かだが、九尾のチャクラを取り込んでいる。

魔理沙はスペルカードを取り出した。

「悪いが急いでるんだ。邪魔するってんなら、いつもみたいにコテンパンにしてやるぜ」

魔理沙の言葉に、チルノが不敵な笑みを浮かべる。

「ほーん……つまり、キミがあたいのウォーミングアップを手伝ってくれるのかな？」

魔理沙とチルノは上昇して、湖の上空で対峙した。

「魔理沙ー！ そのチルノって子、九尾のチャクラを取り込んでるぞー！ いつもと同じだと思っちゃダメだ！」

ナルトは魔理沙に聞こえるよう両手で筒をつくって口にもっていった。

「何!? スーパーってそういう意味かよ。てつきりスーパーマーケットをチルノが始めたかと思ってたぜ」

「あたいがそんなつまんなそうな事するわけないでしょ！ ちゃんと頭使って話しなさいよー！」

「……多分お前以外ならここまでイラツとしないんだろうが、お前に言われると物凄くイラツとする。」

いいぜ、見せてもらおうか。超^{スーパー}チルノの実力とやらをー！」

魔理沙はスペルカードを握りしめ、チルノの出方を待ち受けた。

「言われなくても！ 氷符『アイシクルフォース』」

チルノの正面に多数の氷の弾丸が創られ、魔理沙目掛けて真っ直ぐ飛んでいく。

「なッ——！ 正面に弾幕がある……だど？」

魔理沙は弾幕を避け、驚愕の表情になる。

いつも正面だけは弾幕がなかったのに、今は正面に多数の弾幕がはられていた。

「あははっ、言っただでしょ！ もう⑨なんて言わせない！」

「——んっ？」

魔理沙は弾幕を回避しながら首を傾げた。

確かに正面は凄い氷弾の数だ。だが、その周りには一切氷弾がなかった。

魔理沙は筈の速度を加速。チルノの正面から離脱し、半円を描くようにチルノの方に

向かう。

「あッ、周りに弾幕はるの忘れてた！ ふぎッ」

チルノは頭上に魔理沙から拳骨をくらい、頭を両手で抱えるようにして下に落ちて

いった。

「確かにお前は超スーパになってたぜ、頭の方がな。今のお前にはスペルカードも必要なかった」

た」

ナルトはチルノが湖に落ちないようにチルノの落下点に跳び両腕で受け止めて、あまり

の冷たさに身体を震わした。

「なんだこの子、めっちゃめっちゃ冷てエ」

急いで地面に着地し、ゆっくりと地面に寝かせる。

すると、地面に生えていた草木が一気に凍りついていった。

「なツ!?! くそツ、どうすりやいいんだよ!?!」

「ナルト、放つとけ。そいつには保護者みたいなのがいるから、そいつが何とかする。

それより、早く離れよう。離れないと凍傷になるぞ」

「ホントに大丈夫なんだな、このままにして!?!」

「ああ、いつものことさ。すぐに元通りになる」

周囲が一気に凍っていく。

これが幻想郷の日常なのかと、ナルトは改めて幻想郷の異常さを認識した。

二人はその場から走って湖を抜け、魔法の森を抜けた。

そしてそれから少し走った今、ナルトと魔理沙の正面には紅魔館の門があった。

陽遁 Master of Library

「つかしくなく、いつもは門の横で昼寝してる門番がいるんだが」

魔理沙は門の周りを見渡しながら呟いた。

それ、門番の意味あんのかよと言いたい気持ちちをグツと抑え、ナルトは門に右手を置く。

「門開けてすぐんとここにいんだろ多分。門の向こうに九尾のチャクラを感じんだ」

今まで注意深く探らなければ分らなかった九尾のチャクラが、ハッキリと感じとれる。

それはつまり、門の向こうにいる相手が今までの相手と違い、九尾のチャクラをかなり使いこなしている証拠。

軽口を言つて気を緩めていい場面ではない。

「おーっす！ 霧雨魔理沙様が来たぞーッ！」

ナルトは紅魔館の門を開け、魔理沙が門をくぐった。

二人の目に入ったのは、九尾の衣に覆われた美鈴と、その尻尾らしきものを引っ張っている咲夜の姿。

「はああああああ!!」

ナルトの絶叫が紅魔館中に響いた。

「いや、それってば九尾の衣……なんで使えんだ!？」

以前ナルトは九尾のチャクラを多数の忍に与え、与えた忍全員を九尾の衣で強化した事がある。

あの時はナルトの意思で九尾のチャクラをコントロールしていたため、そういう芸当ができた。

しかし、漏れている九尾のチャクラに関しては自分の意思を伝えることができず、九尾の衣にできない。

つまり、美鈴は自力で九尾の衣を手に入れたことになり、ナルトが驚くのも仕方ないだろう。

「へく、九尾の衣っていうんですか。なんでと言われても、気付いたらなつてたんですけど」

美鈴の目がすつと鋭くなる。

「成る程、あなたがこの力を幻想郷に流していたのですか。

それで、何の用です? 返答次第では侵入者とみなし、即排除します。そろそろ門番らしいことしないとクビにされちゃうかもしれないので」

「自覚はあったのね。私は嬉しいわ、これからサボってたら手加減しなくていいことが分かって」

咲夜が表面上は笑顔になる。しかし、その内に今までの美鈴のサボりっぷりに対して怒りを感じているのは明らかだった。

美鈴の顔に冷や汗が浮かぶ。

「や、やだなく咲夜さん、これからは心を入れ替えて仕事に精進しますよ〜」

「そうであることを願うわ」

氷のように冷たい視線を送ってくる咲夜から逃れるため、美鈴はナルトたちに視線を戻し、人指し指を突き付ける。

「ぞ、それで！ ここに来た理由はなんですか!? まだ聞いてませんよ〜」

ナルトと魔理沙は顔を見合わせた。

魔理沙はふうつと息をつく。

「さっきお前が言ったように、ナルトの中に封印してある力が幻想郷に漏れている。どうやら封印がおかしくなったのは、フランとの『弾幕ごっこ』が原因らしい。

だから、この異変を解決するために協力してもらおうと思っただけ。別にいいだろ、お前らにも落ち度があるんだから」

咲夜と美鈴はナルトとフランの『弾幕ごっこ』を思い出す。

確かにあの時のナルトの身体からは、力が漏れていなかった。

「もしかしてその封印ってお腹にありますか？」

「ああ、そうだ」

咲夜と美鈴は互いに視線を交わし頷く。

「ご用件は承りました。主のレミリアに伝えてきましょう」

咲夜はナルトたちの目の前から刹那の間に消え、美鈴だけが残された。

「消えた!？」

ナルトは咲夜がいた辺りを凝視している。

「あいつは時間を操る程度の能力をもってるからな。今のは時間を止めて移動したんだろう。だから、一瞬で消えたように見えただ」

魔理沙が咲夜について説明し、ナルトはめんくらった。

「時間を止める!？」 ものすぐエ事ができんだな。勝てる気が全くしねエ」

時間を止められるうえに、それをしている間自由に動けるとしたら、これ程脅威的なものはない。

単純に刃物で止まっている人物の首を斬れば、それだけで殺すことができるのだから。

そんなナルトの思考を読んだのか、魔理沙はナルトの背中を軽く叩く。

「心配しなくていいぜ。時間が動いてなきや斬れないから、時間を止めている間は人に直接攻撃する意味がないんだ」

「へえ、無敵の力つてわけじゃねえんだな」

ナルトは納得したように一つ頷いた。

魔理沙が美鈴に視線を移す。

「ところで美鈴、私は気になっていることがある。

なんでフランがナルトと『弾幕ごっこ』したんだ？

お前らもフランの不安定さは知ってる筈だ。普通に考えれば、お前か咲夜のどっちかが止めに入らなきやおかしい」

魔理沙の指摘に、美鈴は右頬を指で軽く搔いた。

「いや、お恥ずかしい限りで……ホントはケガする前に止めるつもりだったんですが、妹様の動きが速すぎて止める間がありませんでした」

それを聞いて、魔理沙の顔が不機嫌そうな顔になった。

「それは『弾幕ごっこ』をしてる時の話だろ？ 私はそんな事聞いてないぜ。

私はなんで『弾幕ごっこ』する前に止めなかつたかを聞いてるんだ」

「あ、とりあえず中へどうぞ。今日はお客さんのようなので、いつまでも外で待たせるわけにはいきません」

美鈴の強引な話の逸らし方に、魔理沙は更に眉間にシワを寄せた。

しかし外より中の方が良いのは事実のため、渋々と美鈴に従い、ナルトとともに紅魔館に入る。

ナルトは紅魔館に入った瞬間に術式のような陣を視界に捉えた。

その陣自体が光り輝き、くるくると床で回っている。

ナルトがそれに気を取られている間に、魔理沙は再び美鈴を見た。

「で、なんでだ？」

魔理沙が再度問いたとしても、美鈴は困ったような笑みを浮かべるだけだ。

美鈴の内では話すべきか黙っているべきか決めかねているのだろう。

魔理沙は帽子を被り直す仕草で自分を落ち着かせ、紅魔館の地下の方に歩きだす。

「美鈴、もういい。その反応でほしい誰のせいでもうなつたか予想はついた。

私とナルトは暇だから地下の図書館に行つてるぜ。レミリアから返答があつたら図書館まで来てくれ。」

ナルト、私に付いてこい。凄いモノを見せてやるぜ」

迷いなくまっすぐ進む魔理沙と違い、ナルトは物珍しそうに周りを見ながら魔理沙の後ろを付いていく。

まさか外だけではなく、中まで赤色に統一されているとは思わなかった。

それになんとなく外観と内部の大きさが一致していない気がする。あくまで自分の感覚のため、断言はできないが。

それからもう一つ、館にある窓が異様に少ない。本当に最低限の窓の数しかないのだ。

まるで日光を嫌っているようにナルトは感じた。

紅魔館の地下に行く階段を下り、かび臭い廊下にナルトは微かに眉根を寄せる。

魔理沙はこの臭いも慣れっこのようで、気にする素振りすら一切なく進んでいく。

そうして暫く進むと、大きな扉がある部屋に着いた。

「ここが大図書館だ。きつと中に入ったら驚くぜ」

魔理沙は扉を開け、中に入る。ナルトも続いて中に入り、中の光景に口を大きく開けた。

見渡す限り、膨大な書物の数。どこに視線を向けてもあるのは無数の本。図書館というより、本をただ保管している倉庫のようだ。

「霧雨魔理沙！ ここであつたが百年目！」

赤髪で頭に小さく、背中に大きな黒い羽根の生えた少女が魔理沙に向けて光弾を放つ。

魔理沙にとってはこれも日常らしく、涼しい顔で避けた。

「何したんだ？ あの子、もの凄エ怒ってるぞ」

「あく多分、本を何十冊か借りてるからかな。いつか返すって言うてるのにコレだ」

魔理沙はやれやれと言わんばかりに肩をすくめる。

その仕草が更に赤髪の少女を怒らせた。

「あんたって人はあーッ！」

少女の気持ちを表すように光弾が更に勢いを増す。それは僅かにナルトの方にも飛び火し、ナルトはその場から後方に跳躍。扉の上にある壁に足だけで張り付いた。

「魔符『スターダストレヴアリエ』！」

魔理沙の周囲にちりばめられた星形の光弾が、少女の光弾とぶつかり相殺していく。

少女の光弾を全て相殺した後、魔理沙は少女の方を見た。

「来る度に手厚く歓迎しやがって……ホントいい加減にしるよ、こあ」

こあと呼ばれた少女はまなじり 眦を決する。

「お前がッ！ おーまーえーがッ！」

おそらくこあはお前が言うなど言いたいのだろうが、あまりの怒りに上手く話せない。

「——騒々しいわね、大体予想付くけど」

「パチユリー様！」

こあは目を輝かす。

奥にある本棚の影から、一人の少女が現れた。

紫色の長髪の先をリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまのゆったりとした服を着用。さらにその上から薄紫の服を着ている。頭には三日月の飾りが付いたドアキャップのよな帽子。

この大図書館の主、パチュリー・ノーレッジである。

ナルトは壁から離れて床に着地した。

見たことない人物に、パチュリーは少し興味深そうに目を細める。

「ケホ、外来人もいるのね。私はパチュリー・ノーレッジ、パチュリーでいいわ」

「オレはうずまきナルト、ナルトでいいってばよ。」

パチュリーはどっかわりいのか？　なんか苦しそうだけど」

「パチュリー様は喘息なんです！　そのせいで激しい運動とかできないんですよ！」

ナルトの疑問に、こあが勢いよく答えた。

「喘息ってエと気管がわりいのか。パチュリー、ちよつと背中向けてくれるか？」

「えっ、ええ、いいけど……」

パチュリーは戸惑いながらもナルトに背を向ける。

ナルトはその背の首の下辺りをトンと左手で軽く叩いた。

そのまま数秒間、辺りは静寂に包まれた。

「どうだ？」

ナルトの問いに、パチュリーの紫色の瞳が驚きの色に染まった。

「苦しく……なくなつた？ え、何、どういうこと？ 全然分からないわ、ナルト」

「オレも……今、なんで……首絞めら……れてん……のか分か……らねエ」

ナルトにそう言われて、パチュリーはハツとした様子でナルトの首から手を離れた。

「ごめんなさい……ちよつと気が動転してつい——」

「ゲホツ……気が動転してなんで首絞めんだよ!? どういう流れ!？」

ナルトが咳き込みながら、パチュリーに困惑した視線を向けた。

「書物に情報を吐かせる時はこうした方が良いつて書いてあつたから、反射的に——」

「パチュリー様、喘息が治つたのですか!？」

「ええ……どうやらナルトのおかげでね。身体に付いてたオモリが無くなつたみたい。

身体が凄く軽いわ」

「っ！……ナルトさくん!」

こあがナルトの身体に抱きついた。

「パチュリー様を治してくれて、ありがとうございました！ 霧雨魔理沙は別ですが、ナ

ルトさんならいつでも大図書館に来てください！ 面白い本を色々紹介しますよ!」

「ははッ、サンキューな！　じゃあまた今度時間がある時に見せてもらおうぜ！」

ナルトは抱きついたこの頭を左手で撫で、こあは気持ち良さそうに目を細めた。

そんな明るいやり取りをしている一方で、魔理沙の顔は青くなっていた。

「パチュリーを治してくれたのは良い。けど、私にとっては複雑だぜ。」

ナルト、パチュリーに何をしたんだ!?!　これから本を借りづらくなっちゃったぞ」

「何って言われてもなあ……簡単に言えば、オレが陽にしたチャクラをパチュリーに流して、パチュリーの身体を自然な流れに戻したって感じかあ？

うーん、この陽遁って説明し辛いぜ」

ナルトは難しそうな顔をひねった。

ナルトは通常の状態でも簡単な陽遁は使える。

陽遁は生命を司る身体エネルギーをもとに、生命を吹き込んだりといった生命に関わることに長けている力である。

ただ身体の歪みを矯正する程度であれば、今のナルトにかかれば朝飯前だ。

「お待たせしました」

大図書館の扉の前に、咲夜が現れる。

全員が咲夜の方に注目した。

「紅魔館の主、レミリア・スカーレットがお二人に会うと言いました。これより十六夜咲

夜が主の部屋まで案内させて頂きます」

咲夜が一礼してレミリアの部屋に向けて歩き始め、ナルトたちがその後ろを付いていく。

「私も行くわ。何の用かは知らないけど、ナルトには恩がある。レミイに口添えくらいは私もできるから」

「別にいいけど身体は大丈夫なの?」

咲夜が心配そうな目でパチュリーを見る。

「喘息ならナルトに治してもらった」

素っ気なく答えたパチュリーを、咲夜は信じられないといった表情で凝視した。

「あ、忘れるところだった。魔理沙くちよつと〜」

パチュリーが爽やかな顔で魔理沙がいる方に視線をやる。

ナルトの身体に上手く隠れていた魔理沙がビクリと反応した。

「パチュリー、何かな。初めに言っとくが私は借りただけで盗っては——」

「大図書館は貸し出しを一切やってない」

「ち、違った! 借りたんじゃなくて汚れてたから綺麗にしようと思って持ち帰ったんだぜ! 私の行動は善意だ!」

「大図書館の全ての本にはありとあらゆる防壁魔法が施されていて、埃が被る程度しか

汚れない」

「……」

ちーんという音が聞こえそうな程、魔理沙の身体が力なくうなだれた。助けを求めるように魔理沙はナルトの方を見る。

ナルトは軽く右頬を指で搔いた。

「……やっぱし、ルールは守んねエとな。けど、今回は魔理沙のこと勘弁してくれ。オレからも魔理沙に本を返すよう言っとくから」

「ナルトが言うなら……まあこの場は許してあげる」

パチュリーはいつの間にか手に持っていたスペルカードをしまった。

魔理沙の目に光が宿り、満面の笑みを浮かべる。

「だから私はナルトが好きだぜ！」

「パチュリー、次からは容赦しねエでいいからな」

「ナルトオ!?!」

魔理沙はナルトの言葉に衝撃を受け、声が裏返った。

そんな魔理沙を見て、魔理沙以外の全員が吹き出して笑った。

最後は魔理沙も声を出して笑い、紅魔館の廊下は明るい声に埋めつくされた。

分岐~Another future~

ナルトたちは咲夜の案内で、レミリア・スカーレットの部屋の前に来ていた。

ナルトはごくりと唾を飲み込む。

いよいよナルトは紅魔館の主と顔を合わせるのだ。

一体どういう見た目で人柄はどうかなど、今のナルトの頭の中はこれから会う相手の事でいっぱいだった。

ナルトがこうも頭を悩ませているのは、ここに来るまでの会話のせいかもしれない。魔理沙が言うには、偉そうな話口調をするが、子供そのものの奴らしい。

咲夜が言うには、目を離せないが一緒にいて楽しい仕えがいのある主らしい。

パチュリーが言うには、何も考えていないようで実は色々考えている掴めない友人らしい。

紅魔館の主に対する三人の意見は三者三様で、ナルトはこれだ！ というイメージがピンとこなかったのである。

そんなモヤモヤとした気分の中、何かを叩く音が耳に入った。

咲夜がレミリアの部屋の扉をノックした音であった。

「入りなさい」

凜とした声が扉越しから響く。

ナルトはより一層緊張して身体を固くした。

声を聞いただけだが、人を従える者ならではの力をその声は持っていた。ただ威圧するだけではない、水のように言葉が自分の身体に入ってくる浸透性。

扉が開けられナルト、魔理沙、咲夜、パチュリーの四人がレミリアの部屋に入った。

ちなみにこの場にはいないこあは大図書館の仕事に戻り、美鈴は庭の手入れをしている。

「私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ。

話は咲夜から聞いたわ。結論からいうとその封印とやらに紅魔館は協力する」

ナルトはレミリアの姿を見て度肝を抜かれていた。

ナルトのイメージは定まっていなかったが、主というからは大人かそれに近い容姿の人物だと当たり前のようには決めつけていた。

だが、実際はどうか？

ハッキリ言って子供である。公園の遊具で遊んでいても違和感は何無だろう。

前に『弾幕ごっこ』をしたフランと容姿的な年齢は変わらない。

「ありがてエ、恩に着るぜレミリア。オレの名前はうずまきナルトだ」

「いいのよ、礼なんて。気紛れだったとはいえ、ナルトの封印を壊しかけた原因は私にもあるし」

眉一つ動かさず平然と爆弾発言したレミリアを、ナルトと魔理沙が啞然として見た。

そんな二人の反応を見て、レミリアは何かに気付いたように手を叩く。

「フランに気紛れで言ったのよね、フランの好きに遊んでいいって。」

まさかこんな事態になるとは夢にも思わなかったけど」

「フランは強い！ それに手加減も苦手だ！ 大抵の奴なら一方的に痛めつけられることぐらい分かるだろ！ なんでそんな事言った!?!」

魔理沙がレミリアに詰め寄って、金色の瞳を怒りで輝かして問いただす。

しかし、魔理沙の怒気を真つ向から受けてもレミリアは表情を変えず、少し首を傾けてナルトの方に視線を向けた。

「私には分かった、ナルトがここに来るのが。それとナルトが強いのも」

「……運命を操る程度の能力」

「なんだよ、それ？」

魔理沙が小さく呟き、ナルトが固い面持ちで問いかけた。

「ハッキリした事は分かってない。確かなのは未来予知ができる能力ってことぐらいさ」

つまりレミリアは未来予知で自分の来訪を事前に知っていて、フランの相手になりそうだと判断し『弾幕ごっこ』をさせたということか。

だが、ナルトには納得できない点があった。

何故自分が強いと分かったのか。

「未来予知……私、その言葉嫌いなよね。それに正確な表現じゃない。それなら私は『未来を知る程度の能力』って言われるわ。

運命は未来だけじゃない、過去からも形作られる。私はあなたがどういう人間なのかを知る力もあるの。

例えば、あなたに封印されているモノ——本当の名前は九喇嘛っていうんでしょ」

レミリアはナルトを見据えて、ナルトの心を読んだようにそう口にした。

ナルトの目が大きく見開かれる。

幻想郷に来て以来、自分以外の誰かがいる時に九喇嘛という名前を出したことは一度もない。

読心術が使えるか、ナルトの過去を知る力が無ければ、九喇嘛という名前は知りようがないのだ。

ナルトの身体の奥から、ドクンと強い鼓動に似た衝撃が起きる。身体中が熱くなっていき、まるで血液が沸騰しているような錯覚。

ナルトは息を荒くし、苦しそうに胸を左手で掴む。

「——その名前を……口に出すな」

ナルトの今までに見たことのない眼光の鋭さに、その場にいたレミリア以外の面々は畏縮した。

「へえ、意外ね。てつきりあなたは九尾じゃなくて九喇嘛って呼んでほしいと思っ——」

レミリアの首を、ナルトの左手が締め上げた。

周りにいる者たちは刹那の出来事に誰も反応できず、ナルトがレミリアの首を締め上げた時によくやく何が起きたか理解した。

ナルトの身体は九尾の衣で覆われ、チャクラの尻尾が二本生えていた。

「言つたろオが、その名を口に出すなって」

咲夜とパチュリーはレミリアを救おうとスペルカードを取り出そうとするが、レミリアを見てその動きを止めた。レミリアが二人の方に右手を向けていたからだ。まるで手を出すなど言つてるように。

動きが止まった二人の横で、魔理沙はナルトの後ろ姿を呆然と見つめる。

知らない、私はこんなナルトを知らない。

ナルトはいつも明るくて、どうしようもないくらい優しくくて、その優しさで自分の首

を絞めることになっても他人のせいにはしない、そんな奴だ。

有無を言わず首を絞め上げるような、短慮で乱暴なことをする奴じゃない。

「お前——ナルトじゃないな!? その手を離せ!」

ナルトはレミリアを締め上げたまま、魔理沙の方をチラリと肩越しに一瞥する。

その目を見て、魔理沙は驚愕の表情を浮かべた。

「瞳が……赤い!?!」

ナルトの目は、澄んだ青空のような綺麗な碧眼だ。だが、今のナルトの瞳は血のように赤くなっている。

ナルトの左手がレミリアの首を離し、レミリアは苦しそうに咳き込んだ。

「ゴホツ……ゴホツ! 初めまして——というべきかしら、九尾さん」

「最初からそっちの名で呼べ。ワシはなあ、きれエなんだよ九喇嘛と呼ばれるのが」

「そうだったの……知らなかったとはいえ、その名前で呼んでごめんなさい。」

でも、あなたが表に出てきていいの? 漏れてる力が増してるわよ。それは、ナルトの心に反するんじゃない?」

レミリアは九尾のもつ圧力を真つ向から受け止め、ナルトの目をじつと見た。

ナルトの身体を借りた九尾はレミリアに感心したらしく、目の鋭さが少し和らいだ。

「けっ、なかなか言うじゃねエか。その度胸に免じて、今回はここまでにしてやる

……が、次はねエからな。よく覚えとけ」

ナルトを覆っていた九尾の衣が消え、ナルトの身体から放たれていた息が詰まりそうになる程の威圧感も霧散した。

ナルトはレミリアの前にあるテーブルに両手をつき、息を荒げる。もうナルトの瞳の色は元に戻っていた。

「すまねエレミリア。九尾を抑えきれなかった」

封印が完全だった時は九喇嘛がどれだけ表に出てこようとしても、それを突っぱねることができていた。

封印が壊れかけているから、九喇嘛に対しての制御が弱くなり、九喇嘛が激情のまま身体を借りるのを許した。

漏れている力が九喇嘛の感情に左右され、九喇嘛が表に出てくることで増えるなら、一刻も早く八卦封印をして、この異常な状態を脱しなければならぬ。

「気にしなくていいわ。私にも非があるし。それで、具体的に私達は何をすればいいの？」

レミリアはテーブルに頬杖をつき、ナルトの顔を真剣な表情で見た。

「八卦封印するために準備しねえといけねえモンがある。八本のろうそくと、オレが横になれるくれエの大きさの台座。まずはこれを準備してほしい。

で、次は封印を解いた時なんだけど、それをやると九尾が外に出てくる。この時に漏れる力を幻想郷に出さないために結界が必要になる。この紅魔館全てを包み込むくれエの結界が。

最後にオレが八卦封印してる時の護衛だな。ここに来るまでに何度も妖怪に襲われた。封印の最中に襲われたら、封印が失敗しちゃう」

レミリアに会う前に、ナルトは九喇嘛に八卦封印には何が必要か聞いていた。

「分かった。咲夜、ろうそくを八本と二メートルくらいの大サイズの台座を準備してちょうだい。美鈴に準備させてもいいわ」

「分かりました」

咲夜は一礼し、その場から消えた。

「レミイ、私は紅魔館を包む結界の下準備をしてくるから。多分三、四時間くらいかかると思う。」

あ、あと喘息はナルトに治してもらったから、体力の心配はしなくていいわよ」
「喘息が……治った!?!」

レミリアの顔に初めてとっていい、明確な動揺がみられた。レミリアの瞳が揺れる。

何かを堪えるような悲哀とも、嬉し涙が出そうなのを我慢している歓喜とも感じ取れ

る不明瞭な表情。

パチュリーはそのレミリアの表情を歓喜ととらえたらしく、悪戯っぽい笑みでレミリアにピースした後、レミリアの部屋から去っていった。

「……そうね、あなたは奇跡を起こし世界を救った。あなたならもしかしたら——」

レミリアの瞳に微かに光が灯った。だが、その灯った光を掻き消すように首を横に振り、その先の言葉を飲み込んだ。

「もしかしたら……何だ？ それと一応言っとくけど、オレ一人の力じゃなくて、みんなの力があつたからだからな」

ナルトが訝しげな表情でレミリアを見ている。

レミリアはぼつがわるそうにナルトから視線を外した。

「そうよね、今言ったことは忘れて。」

そんな事より、あなた達に部屋を用意させたわ。この部屋を出てすぐのところよ。扉の前に貼る紙がしてある筈だから、それを目印にして」

「ああ、それなら心配ねえ。来る途中に咲夜から教えてもらったからな」

ナルトはこの部屋に辿り着くまでに、紅魔館の様々な部屋を咲夜とパチュリーから教えてもらっていた。

周囲の把握は忍として当然のスキル。今のナルトなら、館内を全力疾走しても迷うこ

とはない。

「なら安心ね。パチエの結界準備が終わらないと始められないから、それまで部屋で休んでいなさい」

有無を言わささない響きだが、そこにあつた。これ以上は話したくないと言外に言われているような明らかな拒絶。

ナルトと魔理沙は部屋から去るといふ選択肢しかなかった。

「レミリア、邪魔したな」

魔理沙は少し険のある顔でそう言い、レミリアの部屋から出た。

「部屋、ありがとな。ありがたく使わせてもらう」

ナルトもそれに続き、レミリアに背を向け部屋から出ていく。

ナルトはこの時気付かなかつた。

レミリアが何かを訴えるような、期待と不安がごちゃ混ぜになった瞳で、去つてゆくナルトの背中を見ていたことを。

もし、ここでナルトがレミリアの視線に気付き、レミリアの方に振り返っていたならば、あるいは別の未来が頭をもたげ、彼らの前に姿を現していたかもしれない。

だが、その可能性はドアが閉じられる音とともに消えた。

ナルトは与えられた部屋に入って変化の術を解き、ボロボロの服を脱いで、部屋に備えつけられていたシャワー室に入る。

シャワーを浴びながら、ナルトは思考の海へと潜っていた。

(レミリア……あいつにオレの過去を知る力があるなら、あの事を知ってる筈だ。あの事を知ってるうえで九喇嘛と呼んだのか?)

それとも、過去を知るといっても大まかにしか分からなくて、細かいところまでは知れないのか?)

第四次忍界大戦が終結して数カ月経った頃、オレが九尾を九喇嘛と呼んでいるのが、木の葉の里に住む人々に知れわたっていた。

ある日、オレが任務を終え木の葉の里に帰って来た時、木の葉の里に住む一人の中忍がオレに言った。

「ナルト、お前あんま無理すんなよ！ 九喇嘛もナルトのこと頼むな！」

世界が凍った。

九喇嘛からの激情が、世界が凍ったと錯覚させた。

オレの身体から九喇嘛の殺気が迸り、九尾のチャクラが溢れて衣の形になろうとした時に、中忍は情けない悲鳴をあげて逃げていった。

中忍が逃げた後は、九尾のチャクラが収まった。

『何でだ?』

己の精神世界で、九喇嘛に問いかける。

九喇嘛からの返事はなかった。不機嫌そうにそっぽを向いている。

『九喇嘛はお前の名前だろ? そつちで呼ばれた方がお前も喜ぶと思つて——』

オレは第四次忍界大戦が終わつてから、九尾ではなく九喇嘛と呼び続けていた。

《……テメエの言う通り、九喇嘛はワシの名だ。ワシ自身の名なんだよ。

何故、ワシのことを力としかみてねえ輩に、ワシ自身の名を呼ばれねえといけねえんだ! 気分が悪くなんだよ、力としかみてねえくせに、表面上はいい顔して擦り寄つてきてよ!

ワシ自身のことを分かつてる奴にしか、ワシはその名を呼ばれたくねえんだ》

その後、木の葉の里にはある決まりができた。

九尾を九喇嘛と呼ぶことを禁ず。なお、うずまきナルトだけは例外とする。

それ以来、九尾を九喇嘛と呼んでくる人はいなくなつた。

けど、とオレは思う。

ずつとオレ以外から、力として、兵器としての名前で呼ばれ続ける。それはあまりにも寂しくないか。

決めたことがある。九喇嘛がどういう奴か周りに伝えて、九喇嘛自身を見てもらおうと。

力としてではなく、お前自身を見てもらおう。

そうすればきつと、九喇嘛も名前で呼ばれることを許すから――。

ナルトは濡れて両目に張りついた髪をかきあげた。

「……髪、うぜエ」

《なら、切りやいいじゃねエか》

愉快そうにクツクツと笑う九喇嘛。

もうさつき気には気にしていないようだ。

それが分かって、ナルトは安心したように静かに息をついた。

《何考えてたんだ？》

「九喇嘛、お前は言ったな。自分を見てねエ奴に、自分の名を呼ばれたくねエって」

《……ああ》

「なら、お前自身を見てる奴なら、たとえオレ以外でも九喇嘛と呼んでいいよな？」

《……ああ、いいぜ。ワシもそこまで心狭くねえよ》

やっぱりそうだとナルトは確信する。

九喇嘛もホントは、自分の名でみんなから呼んでほしいのだと。

ナルトはシャワーを浴び終え、再びボロボロの服に身を通し、右腕に包帯を巻く。

シャワーで一息つけた影響か、ナルトは上機嫌になっていた。

ベッドと呼ばれる寝床を興味津々といった表情でナルトが眺めていると、扉をノックする音が聞こえた。

「お兄さんがこの部屋にいるって聞いて来たんだけど——入っても大丈夫？」

ナルトの部屋をノックした来訪者——その相手はナルトが初めて『弾幕ごっこ』をしたフランドール・スカーレットだった。



ナルトたちが去って一人になったレミリアの部屋。

レミリアは息をつき、緊張が解けると同時に抑えていた恐怖が顔を出した。

レミリアの顔に大量の汗が浮かぶ。レミリアはハンカチで顔の汗を拭いた。

レミリアは知っているのだ。九尾がその気になれば、自分など塵も残さずに消せることを。

レミリアは身体の奥底に一瞬熱が灯ったような感覚を覚えた。それを気のせいと結

論づけ、レミリアはさっきの事を思い浮かべた。

「あれが九尾……間違いなくうずまきナルトではない。

九尾の名前を呼べば、九尾が激昂するのは分かっていたけど、リスクを冒した価値はあった」

レミリアはテーブルに両肘をつき、顔をうつむける。

「霧雨魔理沙の存在……パチエの快復。どっちも私の選んだ運命には入っていない。少しずつ運命がズレてきているの？」

でも、それ以外は私の望んだ通り。それにパチエの快復は、私にとって好都合」

レミリアは下唇を噛み締める。

レミリアの頭にナルトの姿が浮かんだ。

「何を迷ってるのよ、レミリア・スカーレット。もう——やるしかないのに」

頭を振ってナルトの姿を脳内から消し、レミリアは悲しげな瞳で自分に言い聞かせるように呟いた。

開始　↳　M a l i c i o u s　w a k e　u p　↳

フランは今、ナルトに与えられた薄暗い部屋にあったテーブルの椅子に、少し暗い表情で座っている。ナルトの部屋は窓が一つだけで明かりがなく、部屋の明るさは完全に日の光頼りになっているのだ。

ナルトは部屋にあったコップに水差しの水を入れて、コップをフランの正面に置いた。

フランが目をぱちくりさせて最初にコップを見、次にナルトの顔を覗き込むように見た。ナルトはフランの一連の動きに苦笑する。

「そんな驚かなくてもいいだろ。お前はオレからすりゃ客なんだから」

フランはナルトから視線を外し、僅かに顔をうつむけた。

「どうして？　私のせいで大変なことになっちゃったんでしょ？」

美鈴に聞いたよ、能力を使った最後の攻撃でお兄さんの封印を壊しそうになったって。なのに、どうして優しくしてくれるの？」

フランの声は震えていた。

ナルトはフランに対しての怒りなど微塵もない。わざとじゃないことくらい、攻撃を

くらったナルト自身が一番分かっている。

その感覚は、フランの声を聞いて確信に変わった。

フランは悔いている、あの日の最後の攻撃を。だからこうしてナルトの部屋に訪れ、謝るタイミングを窺っている。

「お前を見りや分かる。あの攻撃が狙ってやったことじゃねえくれエ。それに、優しくすんのに理由なんていらねエだろ」

「優しくするのに、理由はいらぬい」

フランはナルトの言葉を小さな声で反復すると、微笑した。

「お兄さんって不思議な人ね。さっきまでの憂鬱な気持ちがどつかいっちゃった。

あ、まだ自己紹介してなかったね。私の名前はフランドル・スカーレット。この紅魔館の主、レミアア・スカーレットの妹で吸血鬼だよ。

フランって呼んでくれればいいから」

「オレはうずまきナルトだ。」

暗い気分が消えたんなら、良かった。ほら、お菓子もあるから食べてけよ。元々お前ん家のモンだけだな、ははっ！」

ナルトが笑いながら、テーブルの上にお菓子が沢山のつた皿を置いた。

フランは目を丸くして、山盛りにされたお菓子を眺める。数秒間じつとそのまま動か

ずにお菓子を凝視。

その後、盛大に吹き出した。

「……………ぷっ……………くくっ……………あははははッ！ あー、おかしー！ 私を子供扱いするなんて、やっぱりお兄さんは変わってるよ！」

フランドール・スカーレットは吸血鬼である。

人間を襲い、人間の血液を啜る、人間にとって忌避するのが当然の化け物。

吸血鬼のもつ力は岩をも砕き、速さは人間の里を瞬く間に駆け抜ける。身体も指折りの頑丈さであり、仮に身体を損傷させることができたとしても、蝙蝠一匹分さえ残れば、即再生させられる。魔法力も桁外れで、一声掛ければ大量の悪魔たちを召喚し、思うままに操る事ができる。

そんな存在を優しくする人間なんて、変わっていると言う以外、どう表現すればいい。悪魔の妹と呼ばれ、幻想郷中から恐れられている彼女からすれば、ナルトの接し方は新鮮であり、同時に幸福だった。また一人、自分の力を知りながらも、自分と接してくれる相手を見つけたのだから。

これまでも多くの外来人がフランに出会ってきた。そして、『弾幕ごっこ』をする前の彼らはフランを見た目通りに扱い、『弾幕ごっこ』をした後は怯えた表情でよそよそしく、身体を恐怖で震わせながら接するようになった。

まだ接してくれるなら良い方だ。大抵はすぐに紅魔館から去ってゆく。

去ってゆく背中に一抹の寂しさを感じながらも、フランは仕方ないとその度に自分に言い聞かせてきた。

自分を恐れるのは人間の本能であり、どうしようもないこと。もつといえ、吸血鬼にとつて人間は食糧であり、対等ではない。友達のような関係になること自体が異常であり、それが実現したなら奇跡と呼んでいい程の出来事だろう。

フランは山盛りのお菓子の一番上にあつた、包み紙の左右を捻って包まれた棒状の飴を左手で1つ取り、椅子から立ち上がった。

「お兄さんのジャマしちゃってごめんね。私、もう行くから」

「そうか……またいつでも来いよー」

扉に向かったフランの背に、ナルトから明るい声が掛けられた。

フランは扉に手をかけ、肩越しにナルトの方を緩ませた顔で見て、飴を持った左手を見せつけるように顔の近くまで上げる。

「飴、ありがとう。また来るね」

——酷い目にあわせたのに、友好的に私と接してくれてありがとう。おかげで、重かった身体が軽くなったよ。

心の中で、フランは二つ目のお札を言う。口に出して言うのは少し照れくさかった

し、封印を壊しかけたことをなるべく触れないようにしてくれてるナルトの気持ちをお台無しにするみたいで嫌だったから、言えなかった。

フランは扉の外に出て、レミアアの部屋へと足を向けた。

「お兄さんの力に、私もなるよ」

紅魔館の廊下を歩くフランの顔は、決意に満ちた表情をしていた。

《ええい、遅いわッ！ もっと早く描けんのか!?!》

「無茶言うなよ！ まだやり始めたばっかなんだからさあー！」

フランが部屋を去った後、ナルトは部屋にあった紙と筆ペンを使い、八卦封印の術式をせっせと描いていた。

封印を解いた後は、再び腹部に八卦封印の術式を描かねばならず、ナルトはよりスピーディーかつ正確に術式を描く練習をしているのだ。

最初にお手本として、ナルトの身体を借りた九喇嘛が八卦封印の術式を描き、ナルトはそれを見てひたすら模写していく。

しかし、当然のことながらやり始めてすぐに成果が上げられるわけもなく、一枚描く度に九喇嘛からお叱りの言葉を頂戴している。

ナルトの周りには既に十数枚の術式が描かれた紙が放置されており、部屋にある白紙も少なくなっている。

レミリアのところに行つて白紙を貰つてこなくちやなあと考えながら描いていたら、崩れまくつた術式になつてしまった。

九喇嘛は額に青筋を浮かばせて、ふつと笑う。対するナルトは身体中から冷や汗。

「あのー……九喇嘛さん、ゴメンナサイ」

《やる気が感じられねえなア、ナルトオ。そんなザマで封印しようなんざワシをナメてんだろ!? いつとくが、そんなじよそこの術式じや封印される気になんねエからな!》

「いや、そこは封印されてくれよ! 封印の最中にダメ出しとか勘弁だからな!」

《だからそうならねえように、こうして練習してんだらうがっ!》

一枚一枚魂入れて描けや、このたわけ!》

「くっそく、見てろよ九喇嘛! 思わず動きが止まるような、渾身の術式をぜつてエ描いてやつからな!」

ナルトのバツクで炎がゴオゴオと燃えながら、猛スピードで次々と術式を描いていく。

こういう時、ナルトの負けず嫌いな性格は良い方向へと向かう。無論九喇嘛はそれを分かつてるからこそ、ナルトに厳しくあたるのだ。

(扱いやすい奴)

九喇嘛は微かに笑った。先ほどのような怒りを滲ませた笑みではなく、少しだけ優しく。

封印に向けての準備は着実に進んでいた。



妖怪の山の内部には大きな空洞があり、天狗たちはそこを住み処にしていた。

山の内部ということで薄暗いイメージを抱くのが普通だが、どこからか日の光が届いているらしく、外と変わらない明るさになっている。

そこは、天狗たちが住んでいると思われる木製の家がずらりと並んでいるだけでなく、工場のような建物も存在しており、幻想郷に住む人間がここに来たら、まるで未来にいるかのような錯覚を起こすだろう。

それらの建物の中で、一際大きな家。その家は妖怪の山を治めている天魔の家であり、今現在多数の天狗たちがその家に集まっていた。

「この力——この力があれば、このような山の長で終わらず、この幻想郷全てを手中にすることができよう」

己の両手を見つめ、周りの天狗たちが注目している中、天魔は静かに呟いた。周りからゴクリと唾を飲み込む音が聞こえる。

天魔の容姿は短い銀髪をオールバックにして、爛々とした銀の瞳。背中に大きな黒い翼があり、黒い着物を着ている。

隆々とした肉体は歴戦の戦士を思わせ、力の弱い者は対峙するだけで逃げ出すだろう。

「最近やって来た外来人の力だと射命丸は言っていたが、人の身でこの力は身に余るものだ」

力を取り込み、改めて凄まじい力だと感じる。これ程の力を脆弱な人間ごときが手にして許される筈がない。

我々天狗のような優れた妖怪にこそ、この力は相応しい！

天魔の周りにいた内の一人がおずおずと天魔の前に出る。

「今話に出た射命丸ですが、天魔様に報告した後、慌てた様子で再び外に出ていきました。」

椛もみじの報告では、人間の里の方に飛び去ったと」

椛は哨戒天狗であり、千里先まで見通す程度の能力を有している。周囲の動向を知るのにこれ程適した存在はいない。

「私が思うに、天魔様が外来人を生け捕りにすると言われてから、目の色が変わったように見えます。」

もしかしたら我々を裏切るやもしれません。今の内に始末するべきでは——」

その先の言葉は出てこなかった。天魔が周りを圧倒する威圧感を醸し出し、話していた天狗がそれに呑まれたからだ。

「射命丸は少々異端ではあるが、それでも我々と同胞よ。軽々しく始末などという言葉を出すな。そういう事は表立って裏切った時に考えればいい」

射命丸は他の天狗たちと違い、様々な種族との交流を積極的に行っている。

仲間意識が高く、同族以外に対して排他的な天狗からすれば、射命丸は異端の存在と言っても不思議ではない。

「何はともあれ、まずすべきはこの力を持つ外来人の生け捕りだ。せつかく我々が力を得ても、他の妖怪も同様に力を手にいれては意味がない。

この力は我ら天狗のものだ！ 我らだけが、この力を享受するに足る妖怪である！」
力強い天魔の声に、周りから雄叫びに似た叫びが上がる。

幻想郷の覇権争い。幻想郷を支配することが可能になるかもしれない力。

幻想郷を支配し、いずれは我らを下に見る憎き鬼どもの悉くを蹂躪してやろう。そして思う存分堪能した後は、我らが鬼を従える存在になるのだ。

「行け大天狗！ 柵から外来人の現在地を聞き出し、多数の天狗を連れて生け捕りにしてくるのだ！」

「……承知つかまつりましたッ！」

大天狗は天魔に仰々しく頭を下げ、周りにいた天狗たちを引き連れて外へと出ていった。

「我が覇道、これが最初にして重要な一手となろうな」

天魔は目に確かな野望の光を抱き、あぐらの上で頬杖をついた。



ナルトがレミリアと会ってから四時間が経過した。すでに空は赤くなっており、あと一時間もすれば完全に日は暮れて、漆黒の闇が幻想郷を覆うことになる。

紅魔館の庭には、八本の蠟燭と石材でできた台座が置かれている。美鈴が台座を準備したらしく、その辺の岩を素手で加工したと言っていた。

パチュリーの結界準備も完了しており、紅魔館の庭にはナルト、レミリア、フラン、パチュリー、咲夜、美鈴、魔理沙の七人が集合していた。

後はナルトの一言で、いつでも再封印を行える状態だ。

「じゃあ、最後にもう一度確認するわね」

レミリアが周りの顔を順々に見ながら言う。周りは静かに頷いた。

「まず門の外に出て、門と結界を守る役目を担うのが、私と咲夜と魔理沙の三人。パチュリーは此処で結界の維持に努めて。」

美鈴はもし門が破られた時のパチュリーの護衛。

フランは——」

レミリアはそこで言葉を切り、フランを見る。

「大丈夫、元はといえば私のせいなんだから。私がしっかりお兄さんを護るよ」

護る。壊すのではなく、護る。

「本当に大丈夫？ まだ日はある。光がある中のあなたの世界は——」

レミリアの過保護ともいえるべき反応に、フランは苦笑してしまう。

確かに私の世界は地獄だ。しかし、その地獄に身を置いても構わないと思える熱が、今自分を満たしている。

「平気だよ。外に出るようになって少しは慣れたから。それより今は、何もしない方がツライの」

自分で負うべき責任を他人に押し付けて、のうのうと館で待っていることなど、今のフランには許せないことだった。

レミリアは諦めたように一つため息をついて、力のない笑みを浮かべた。

「分かった。フランはナルトの護衛。ナルトは封印に集中して」

「了解！」

ナルトはビシツと敬礼した。そして、影分身の印を結ぶ。

「影分身の術！」

ナルトの隣に、煙とともに同じ姿形をしたナルトが現れた。

そして本体は上半身の服を脱ぎ、台座の上に横になる。

ナルトはゆっくりと目を閉じた。

ナルトの内の精神世界。

ナルトは空中に浮かび上がり、九喇嘛を封じている檻に貼つてある封印札に手をかける。

(こ)えエ……)

これを剥がせば、人柱力でなくなると同時に、自分の命の時間制限がつくことになる。

失敗＝死。やり直すことは二度とできない一発限りの大勝負。

震える身体を必死に抑えつけ、ナルトの脳裏に周りにいた人たちがよぎった。

(けど、こんだけの奴らがオレに力を貸してくれてる。オレはそれに応えねえとならねエんだ！)

この異変を終わらせ、元通りにする。

それこそが今考えるべきことである。自分の命の心配で躊躇している場合ではない。不意に九喇嘛と目が合う。

九喇嘛は静かな眼差しで、しかしその内には強い闘志をみなぎらせている。

《心配すんな、テメエならできる。そうだろう?》

『……ああ!』

不思議なことに、九喇嘛からそう言われた瞬間、震えが止まった。

何故震えが止まったかなんて、今のナルトにはどうでもよかった。

——やれる! オレならぜってエできる! オレは四代目火影の息子だ! でき

ねエでどうする!

自分を奮い立たせる言葉を頭の中で叫びながら、封印札を一気に剥がした。

「再封印——開始!!」

ナルトの言葉を合図に、パチュリーの結界が紅魔館を包み込む。

これより、八卦封印の再封印が始まる。

防衛～Dance in the red of the world～

紅魔館の庭に、九つの尾をもつ狐が姿を現した。その体躯は山のように大きく、紅魔館の広い庭をもつてしてギリギリおさまった程である。

九喇嘛は体勢を低くして蹲うずくまる。そうしてなるべく身体を縮こめ、ナルトやパチュリーの邪魔にならないようにした。

初めて直に九尾を目にした幻想郷の面々は、あまりの常識はずれの大きさに目を見開いて絶句していた。

「これが——ナルトに封印されてたモノ」

地面に両手をついて魔力で結界を維持しているパチュリーがそう呟く。

「すごい……大きいです」

冷や汗を浮かべながら、そう口にする美鈴。

「なんかすっごいピリピリする」

フランは肌に直接刺さってくるような九尾のチャクラの奔流に、不快感を顕にする。肌を突き破って身体の内に無造作に入ってくる錯覚さえ、フランは覚えた。

紅魔館の結界内を九尾のチャクラが暴れまわり、結界内部は紅い霧が出ているように真つ赤に染まっている。外の夕暮れと合わせて、まるで紅霧異変の再来だった。世界の全てが紅く染まっているような錯覚をしてしまう。

「早く封印を始めろ！ お前にはもう時間がねえんだ！」

「わかっ……てんよ、九喇嘛あ！」

ナルトはそう叫ぶも、苦しそうに息を切らし、顔には疲労感が充満していた。

（何だよ、これ？ 身体が重い……身体中に鉛を付けられたみてえだ）

本体だけではない。影分身も本体と同様に苦しそうだった。都合よく本体だけが弱るわけではなく、影分身にも尾獣を抜かれた影響が表れている。その証拠に、影分身の八卦封印もいつの間にか消えていた。

九喇嘛は舌打ちをする。

（クソツたれが……これは想定外だぜ）

影分身のナルトはクナイで指を切って、血で本体の腹部にゆつくりとした速度で、八卦封印の術式を描いていく。

始まった八卦封印の再封印。想定外の事態が結界内部で起こっているのを、外にいる魔理沙たちは知らない。

「おく、あれが九尾か。おっかないぜ」

魔理沙は箒で空を飛び、紅魔館の上から結界越しに九尾を見た。

確かにあんな巨大な存在の力ならば、弱小妖怪が恐れるのも無理はない。

あの力を取り込んだ妖怪たちが強くなるのも分かる。

「魔理沙、後ろではなく、前を見据えなさい。このまま終わるなんてあり得ないから」

レミリアも魔理沙同様に空に浮かび、緊張した面持ちで魔理沙の横に並ぶ。

「実を言うと、私はお前を疑ってたんだぜ。お前がわざとナルトの封印を壊して、幻想郷を混乱させようとしてるんじゃないかって」

レミリアは未来を知る力を持っている。だから、最初からこうなることが分かっていたうえで、フランをけしかけたんじゃないかと、魔理沙はずっと思っていた。

「けど、お前はこうしてナルトの力になってくれてる。

これがお前の狙ったことなら、手伝ってくれるわけないもんな。だから疑って悪かった。それと、頑張ろうな」

レミリアは驚いた様子で、魔理沙の顔を凝視した。

「魔理沙、あなたは無理しない方がいい」

レミリアは顔を正面に戻し、その手にスペルカードが握られる。

魔理沙がそのレミリアの動きに目を見開き、魔理沙もレミリアを做って、スペルカー

ドを取り出す。

「あなたはどうなるか分からないから」

「え？ レミリア、今なんか言ったか？」

レミリアが小さく呟いた声に、魔理沙が反応した。

「いいえ、なんでもない」

レミリアはそう言うのと、超スピードで前進。一気に魔理沙を置き去りにした。

レミリアは正面を見据える。米粒ほどの大きさのものが空を埋めつくし、近づくにつれ大きくなっていく。

それは天狗の軍勢であった。

「紅魔館にようこそ！ これは挨拶代わりよ！

神罰『幼きデーモンロード』！」

レミリアから球体型の光弾が大量に打ち出され、更に大量の光弾のいくつかが途中でレーザーに変化し、光弾と合わせて不規則な弾幕となり、天狗たちの前に展開される。

天狗たちは全員散開し、周囲を埋め尽くす光弾やレーザーをそれぞれ高速でかわして、レミリアの弾幕を抜けた。

「さすがに天狗か、速い！」

レミリアの元に、多数の天狗が殺到する。

「どけエ吸血鬼！ お前に用はねエ！」

「紅符『スカーレットマイスタ』！」

レミリアに天狗たちの爪が触れる直前、レミリアから全方向に大小入り交じった球体の光弾が、大量にばらまかれた。

至近距離にいた天狗たちは、流石に避けられず被弾。地面へと次々に墜ちていく。

「甘いよ、誘い込まれたことにも気付かないなんて」

それでも墜とせたのは数羽。距離があつた天狗たちは回避に成功した。

レミリアは不意に身体を捻らせる。レミリアの身体があつた一瞬間の場所を槍が突いた。

レミリアは身体を捻った力を殺さず、そのまま回転して槍を突いてきた大天狗の横腹を蹴り飛ばす。

大天狗は空中を滑るように数メートル後退した。

「紅魔館に何の用？ 天狗から嫌われるようなことをした覚えはないわよ」

「貴様に用などないッ！ 用があるのは——アレよ！」

大天狗は首を紅魔館の方に向けた。正確には、その中にいる九つの尾をした獣の方に。

「あれは外来人のものよ。私たちが手を出すべきではない」

「ハッ、何を勘違いしている。我々は外来人を保護しにきたのだ。他の妖怪たちから襲われないようにするために！」

レミリアは怪訝そうに大天狗を見る。

同族以外は排他的な天狗が、よそ者でかつ人間を保護など不自然極まりない。

明らかに嘘をついている。

「残念だわ。私は天狗あなたたちに少なからず敬意を払っていたのよ……同じ妖怪として。

それが今や、楽に力を手に入れられる道に逃げ、人さらいなんて下らないことをしようとしている。本当に残念よ」

レミリアは哀れみにも近い表情で、本当に悲しそうに言った。

天狗は本来このようなことをする妖怪ではない。自尊心は高いがそれ故に、ある一定の矜持を持っている誇り高い種族だ。

その誇りを捨てても構わないと思ってしまう魅力的な九尾のチャクラが、彼らを狂わせている。

「クッククック……オレもずっとお前たちに言いたいことがあった。

なんでスベルカードそんなものを使っている？ 己の力を制限して、わざわざ弱い力に変えて。

人間の口車にのせられた愚か者め！ 牙を抜かれた吸血鬼が、天狗我らに勝てる筈がなからう！」

妖怪の本質は力！ 力こそ妖怪の価値そのもの！ その価値を下げるスペルカードなど、妖怪には不要！

レミリアの周囲を、数羽の天狗たちが少し距離をとって囲む。

「フンツ、暫くそいつらと『弾幕ごっこ』とやらで遊んでいろ。オレはその間にアレを頂^く」

大天狗はそう言い残し、多数の天狗たちと紅魔館の方へと向かった。

吸血鬼といえど、日光のある中であの数を同時に相手どるのは骨が折れるだろう。これでかなりの時間が稼げる。

そう考えた瞬間、大天狗の後方で大きな爆発音と、赤い光が明滅する。

そして、大天狗の前に小さな影が躍り出た。

「……バカな……我ら天狗が一瞬で——」

驚愕の表情を浮かべる大天狗を、涼しい顔でレミリアが見据える。

「スペルカードは妖怪の力を制限するだけではない。私にとって、スペルカードは私の牙そのもの。

貴様らは天狗としての矜持だけでなく、妖怪としての矜持も無くしたようね。誇りのない今の貴様らなど、束になっても私には遠く及ばない！

私はレミリア・スカーレット！ 人呼んで『スカーレット^紅デビル^{悪魔}』！

こんなに世界も紅いから、本気で殺すわよ」

「……これだけの天狗を相手に、本当にどうにかできると思っているのか？」

自惚れるな！ 日の光もある中で、大言壮語も甚だしい！」

吸血鬼にとつて日光は弱点であり、日光を浴びると弱体化してしまうのだ。

レミアも例外ではなく、今の彼女の實力は普段の實力から程遠い。

「大言壮語かどうか、試してみたら？」

天狗たちが紅い空を駆け、レミアがまた新たにスペルカードを取り出す。

空では爆発の光輪が次々に生まれ、爆風が幻想郷を揺るがした。



紅魔館を襲撃してきたのは、天狗だけではなかった。

魔法の森の方角から、多数の下等妖怪が群れをなして紅魔館に迫ってきていたのだ。

「魔符『スターダストレヴアリエ』！」

大量の星形の光弾が、下等妖怪の群れに撃ちだされる。それらは全て下等妖怪たちに当たり、大爆発を起こした。爆音で地が震え、爆煙が立ち昇って妖怪たちの姿を隠す。

「やったか!」

魔理沙が爆風で帽子が飛びそうになるのを左手で押さえて、期待した瞳で爆煙を注視する。しかし残念ながら、その期待は裏切られた。

爆煙の幕を突き破り、先ほどと変わらない姿をした下等妖怪たちが、魔理沙の方に襲いかかってきた。

魔理沙はすかさずミニ八卦炉を手に持つ。

「恋符『マスタースパーク』！」

極太の青い光が正面の妖怪たちを呑み込み、遙か後方へと吹き飛ばす。

だが正面以外のところにいた妖怪たちに、『マスタースパーク』は意味がなく、魔理沙の正面を除いた全ての方向から、妖怪たちの爪と牙が殺到する。

魔理沙は箒を持ち上げ、真上に高速で急上昇。妖怪たちの包囲を抜けた。空を飛べる妖怪がいないようで、妖怪たちは地上から魔理沙を見上げて歯ぎしりしている。

「奇術『エターナルミーク』！」

魔理沙に気を取られていた妖怪たちに、大量の青色の丸い光弾が高速かつ連続で撃ち込まれ、妖怪たちは後ろに下がりに続き続ける。その弾幕はまるでマシンガン。

「私もいるってことをお忘れなく」

この弾幕は、十六夜咲夜のスペルカードによるものだった。

咲夜は本来ならば、レミリアの援護に向かいたい。しかし、レミリアが相手にしてい

るのは多数の天狗。天狗相手に人の身である咲夜の攻撃では火力不足であることを自覚していた。下手すれば、援護にいったつもりが逆に足を引っ張る事態に……なんてことにもなりかねない。

故に彼女はレミリアを信じ、自分は魔理沙とともに門の守りに専念することを決めた。

「サンキュー、咲夜！」

魔理沙は咲夜に礼を言い、後ろに下がった妖怪たちを見る。

妖怪たちには、所々に弾幕でできた傷があった。しかし奴らは、気にせず再び前進。九尾の力を手に入れる前はこうじゃなかった。

咲夜のスペルカード、『エターナルミーク』の前に放った魔理沙の『スターダストレヴアリエ』で、奴らは確実に戦闘不能になっていた。それくらい、奴らは弱い存在だった。

だが今は？

『スターダストレヴアリエ』で戦闘不能になるどころか、咲夜の『エターナルミーク』をくらってなお、前に進む力があるではないか！

九尾の力が奴らに力を与えているのは、間違いない事実。

人間の彼女たちは、既にパワーランクで下位の位置づけになってしまっており、生半

可な攻撃では妖怪たちを戦闘不能に追いやれない。

つまり一向に妖怪を減らせず、ひたすら後方に吹き飛ばす長期戦になるのは必然。封印が完了するまでの我慢比べを、魔理沙と咲夜は強要される。

(ナルトから貰った兵糧丸はあと六つ……)

どうする？ 今ここで一つ使うか？

魔理沙は遠くにいる妖怪から視線を外さず、逡巡する。

仮に今魔理沙が兵糧丸を使えば、一時的とはいえ、一撃で妖怪たちを戦闘不能にする力が手に入る。

だが何が起こるか分からない状況で所詮、奴らは雑魚妖怪。考えられる状況の中で、一番楽な相手。

そんな相手をパワーアップアイテムに頼って倒すようなザマでは、その更に上の存在に易々と門まで突破されてしまう。

長い目で見れば、この場合は兵糧丸を使わずに乗り切るのが理想。兵糧丸は、本当にヤバイ相手の切り札にとっておくべきだ。

「——って考える時間はないか！」

妖怪たちは魔理沙のすぐ下まで来ていて、今咲夜が再び『エターナルミーク』で後方に押さえ込もうとしている。

しかし奴らも学習したのか、まとまって進むのではなく、バラバラになって進み始めた。これでは一部は押さえられても、全てを押さええることはできない。

魔理沙は箒を加速させて急降下。咲夜の隣に移動し、箒から降りた。

魔理沙の両手に、ミニ八卦炉が一つずつ握られる。

「恋心『ダブルスパーク』!」

二つの極太の青いレーザーが妖怪たちを呑み込み、咲夜が押さえられていなかった妖怪たちを吹き飛ばした。それでも全ての妖怪は押さええられず、咲夜と魔理沙に襲いかかってくる。

「クソツ、これじゃじり貧だぜ!」

魔理沙と咲夜は周囲の妖怪の攻撃を掻い潜りながら、攻撃してきた妖怪をカウンターでそれぞれ蹴散らしていく。

だが、妖怪たちの攻撃は止まらない。彼女らが今の妖怪に対応している間に、吹き飛ばした妖怪が彼女らに追い付いてくるからだ。

魔理沙は必死に周囲の妖怪と闘っている最中、視界の端で紅白の巫女服を着た少女が、空を飛んでこつちに向かって来ているのを捉えた。

「このタイミングで霊夢か!? くそツ、最悪だぜ!」

霊夢はナルトを幻想郷の外に出したがってる。

雑魚妖怪がまだまだ多数いる中では、霊夢の方に戦力を割けず、霊夢がノーマークになっってしまう。

結界内には美鈴とフランがいるが、霊夢ならどうにかできてしまえそうだ。

「どうする咲夜!？」

「どうするって言われても、正直どうにもできないんですけど……」

時間を止めて、霊夢の前に立ち塞がるのならできるだろう。だがそれだけだ。どれだけスペルカードを使おうが、以前見切られている技が今通じるかと聞かれれば、答えはノー。むしろ前より早く攻略されるだろう。

それに、その場合は雑魚妖怪の群れの方が疎かになり、雑魚妖怪の群れも門まで到達できてしまう可能性がある。

今彼女たちにてできるのは、美鈴とフランが霊夢を止めてくれるのを信じて、雑魚妖怪の群れを食い止める。それしかない。

「霊符『夢想封印』!」

魔理沙と咲夜の頭上から、色とりどりの光弾が大量に降り注ぐ。

その光景はとも幻想的だった。夕日と紅い空という最高の背景に、神の光を地上に与えている女神のような姿。のほほんどずっと鑑賞していたくなる、そんな魅力的な光景だ。

しかし魔理沙と咲夜の視点でこの光景を見た場合は、印象が異なる。彼女たちからすれば、悪魔が彼女たちを地獄に突き落とそうとする光景に見える。

どんと自分たちに近付いてくる多数の光。それらに呑み込まれる未来を想像して、彼女たちは身体を硬直させた。

そしてそれらの光は魔理沙と咲夜の脇を通りすぎ、雑魚妖怪たちを正確に捉えて爆発する。

魔理沙と咲夜の周囲にいた妖怪たちは全て戦闘不能になり、地面に転がった。

魔理沙と咲夜があんぐりと口を開け絶句。そんな二人のすぐ前に霊夢は着地。

「手こずってるようね、手を貸すわ」

この瞬間、ナルトたちは強力な味方を手に入れた。



霊夢の加入により、一気に戦況が好転した魔理沙たち。

その遙か後方から、紅魔館を眺めている者がいた。

「上が随分騒がしいと思って来てみたら、なかなか面白いことをしてるじゃないかい」

その人物は、左手に持っている盃に注がれていた酒を一口飲んだ。

「私も参加させてもらおうかな」

その人物は楽しいげな微笑を浮かべて、悠然と紅魔館に向けて歩を進め始める。まるでパーティーにでも行くように。

救援くGold of the winds

霊夢が魔理沙たちに出会った同時刻、射命丸は身体を強張らせて、人間の里の入り口前にいた。

射命丸が身体を強張らせている理由——それは二つあった。

一つ目の理由は、人間の里の入り口周囲に妖怪らしき残骸が多数散らばっているから。

ただ殺しただけなら、こんな惨状にはならない。相手をなぶり、じわじわと殺さなければ、こんなに細かく引き千切られている死体にはならない。

「……フフツ……フフツ……アハハハッ！ ハハハハッ！」

そして二つ目の理由は、それらの死体の中心で狂笑をあげながら、妖怪の身体の一部を手にかけている幽香の姿。

今も幽香の手による妖怪の解体ショーは続いている。

蹂躪を楽しみ、苦痛で歪む顔に興奮し、耳に伝わる断末魔の叫びをさらなる起爆剤にして、妖怪を素手で千切る、千切る、千切る。

簡単に殺さないように弱点ではない手足を優先的にもぎ取り、内蔵を踏み潰し、顔面

が陥没するまで拳を振るう。

その慈悲の欠片もない残酷な姿は、千年生きてきた射命丸すら戦慄させた。

射命丸は人間の里の方に視線を向ける。

人間の里の方では、身を隠して顔を青ざめながら幽香を覗き見ている者が大勢いた。これは誰もがとる行動だろう。

家で例えるなら、この場所は玄関先だ。玄関先で絶叫が継続的にあげられていたら、何事かと誰もが確認する。

射命丸は笑い続ける幽香に近付く。

「あなたは本当に自分のことしか考えませんね。少しは自分以外のことも考えてみては？」

射命丸は言外に好き勝手し過ぎるなど言っているわけだが、幽香は大して気にしていないようで、挑発的な射命丸に凄絶な笑みを返した。

「クスツ……ちようどいいわ。ゲテモノ料理は食べ飽きたから、そろそろ高級料理を食べたいって思ってたところなのよ」

幽香は手に持っていたモノを捨て、スペルカードを取り出す。

「まつ、待って下さい！ 幽香さんはここで人間の里に手を出そうとする妖怪を退治してくれていたのでしょうか!？」

幽香の瞳に、微かに不快の色が混じった。

「私がそんなことするわけないでしょう。殺すわよ?」

幽香から放たれた殺気が辺りに充満する。

だが、実際は射命丸の言う通りであった。

人間の里を襲おうと考える妖怪は通常ならば小数で、大多数は襲った時のリスクを考え襲うのを躊躇う。

妖怪の蹂躪を楽しむたいなら、魔法の森や博麗神社周辺の森でやるほうが、効率的でかつ邪魔が入りにくい。

なのに、わざわざ人間の里の入り口前に留まり続けているということは、蹂躪を楽しむ以外にも幽香には目的があったと考えるのが普通。

(この私に明確な敵意をもって殺すと言える……風見幽香、やはりあなたは危険)

射命丸は幽香の殺気で肌を粟^{あわた}立たせながらも、幽香の目と鼻の先まで接近し、耳打ちする。

「私が代わりますよ。今、紅魔館が面白いことになってるようです。あなたはそちらで思う存分楽しんできては?」

確かに少し前から紅魔館の方向にある空が明滅し、爆発音がここまで響いている。

幽香は微かに眉を寄せた。

「……不快だわ、あなたのその何もかも見透かしてますって感じが」

「でも、魅力的な提案でしょう?」

射命丸は不敵な笑みを幽香に向けた。

「それに、ここで人間を守れば私の好感度はうなぎ登り。私の新聞購読者を増やすチャンスなのです。お互いに利のある申し出だと思えますが」

幽香は暴れたいの、人間の里を守るという目的からこの場を離れられなかった。

そのフラストレーションが襲ってきた雑魚妖怪たちにぶつけられ、あの惨状になってしまった。

射命丸の話にのれば、幽香は自分に付けた枷を外せる。

幽香は人間が嫌いではないし、たまに人間の里へ買い物に行くため、狂暴化した妖怪に人間の里を潰されるのが我慢ならなかったのだ。だから、人間の里を守っていた。

だが、別に自分が絶対守らなければならぬ理由はないし、代わりがいるならそっちに任せたいくらい退屈していたのも事実。

「あなたの思い通りに動くのは癪しゃくだけど……いいわ、今回は許してあげる」

幽香は力強く地面を踏み込み、一瞬で射命丸の眼前から姿を消した。

地面には足形というべきものが刻まれており、僅かな土煙がたっている。

地面を蹴り超加速して紅魔館に向かったと理解した射命丸は、ふうと息をつく。

「これで、状況はできた」

博麗霊夢と風見幽香、そのどちらも強大な力を持ち、自分に正直に生きる。

天狗が暴れているのに、何もしないのは考えづらい。少なくとも天狗の味方はしないだろう。

「私にできる抵抗は、ここまでの限度」

射命丸は天魔のナルト生け捕りに納得していなかった。

確かに力が手に入るなら、射命丸は躊躇わずにむしろ喜んで力を手に入れる。

しかし、その力は他者を支配するために手に入れているわけではない。妖怪の本能というべき力への渴望がそうさせたただけだ。

だが、天魔は違う。支配するために力を求めている。

（それに、今の天魔を私は天魔と認めていない）

今からおよそ三十年前までは、別の天魔が妖怪の山を治めていた。

その天魔の容姿は、真っ直ぐな黒髪を腰の辺りまで伸ばし、瞳は黒曜石のような漆黒の瞳をもつ女性。

着ている服は白い羽織で、背中にはそれで覆った大きな漆黒の翼がある。

彼女の性格は、自由奔放で我が儘でイタズラ好き。彼女の気紛れで何度も天狗たちが大騒ぎしたことがある。

だが、比較的天狗以外の種族と友好的に接し、時に甘いとさえいえる行動を取り、何より天狗と幻想郷を愛していた。

天魔の起こす気紛れに苦勞しながらも、彼女なら自分は従つてもいいと思える魅力があつたと射命丸は思い返す。

だが、三十年前に射命丸はその天魔と別れることとなつた。

天魔の家から、天魔が姿を消したのだ。一枚の紙切れを遺して。

その紙切れには、「外の世界に興味が湧いた。外の世界でわらわは暮らすことにする。なお、天魔は大天狗に任せる」と、間違いなく本人の筆跡で書かれていた。

当然天狗たちは焦り、そこら中を探し回るが見つからず、仕方なく書かれた通り、当時の大天狗を天魔の後任として任命し、その天魔の指示で今の犬天狗が選ばれた。

しかし、前の天魔と違つて今の天魔は排他的過ぎて、射命丸は面白くない。

それに、強い支配欲を彼はもつていて、何事も力で解決しようとする。その狭量な器に射命丸は嫌気がさしていた。

(でも、正面切つて反抗したところで私の立場が悪化するだけで何の得もないし、何より次の天魔候補がない)

結局のところ、前の天魔が戻つてくることが今の好戦的な天狗を止める一番の手だろ。おそらく戻つてこないだろうが。

射命丸は人間の里の入り口前で、紅魔館の方向の空を見据えた。



「それにしても、よく紅魔館が襲われていることが分かったな」

魔理沙はほっと一息ついて、霊夢に尋ねた。

「射命丸が教えてくれたのよ」

霊夢の脳裏に、その時の情景が映し出された。

ナルトと魔理沙、二人と『弾幕ごっこ』をした霊夢。彼女は九尾の力をよく考えずに身体強化に使い、更に魔理沙の『マスターズパーク』をもろにくらって、肉体的な疲労と、身体中に軽度の傷を負っていた。

ナルトと魔理沙が博麗神社を去った後、紫は霊夢を博麗神社の本殿の縁側に運んで寝かせ、霊夢の看病をしていた。

紫が霊夢の看病をして数時間が経過した頃、彼女たちの前に一陣の風が生じ、射命丸が姿を現した。

既にその時には霊夢は目覚めていたため、派手な登場をして更に境内を滅茶苦茶にした張本人に、霊夢は怒りのこもった瞳を向ける。

「あちゃ〜、これはやってしまった感じですかね〜」

射命丸は自身の周囲を軽く見渡しながら、苦笑した。

彼女とて、この惨状は狙ってやったものではない。ただ速く、それだけを考え博麗神社に來た結果がコレなのだ。

射命丸は紫を見、その変わり果てた頭に思わず二度見した。

「紫さん……ですか？」

「……そうよ。もしこの事を記事にしたら、次元の隙間で一生暮らしてもらおうことになるわ」

その言葉が嘘じゃないのは、紫から滲み出る殺気が物語っていた。

「しません！ しませんから、殺気を消して下さい！

私は話をしにきただけです！」

「そう、ならいいわ」

射命丸は霊夢の方に視線を向ける。

「この博麗神社の様子からすると、随分派手にナルトさんとやり合ったみたいですね。ナルトさんはどこに行かれました？」

「紫、知ってる？」

「うーん……確か紅魔館とか言ってたような——」

「ですって。何でそんな事聞くの？」

「……天魔様がナルトさんの力を狙っているようなんですよ。生け捕りにするって天狗たちに言っていましたし」

射命丸のその一言で、霊夢と紫の目の色が変わる。

「何ですって!?! ……ツつう」

霊夢は勢いよく起き上がった。傷付いた身体に鋭い痛みが走る。

それに構わず、霊夢は空を飛ばうとするが、霊夢の手を紫が掴み、ひき止めた。

「さつき言ったでしょ。あなたの身体は限界まで酷使された後なのよ。そんな状態で行って何ができるの？」

「でも、動ける。明日は無理かもしれない。でも、今この瞬間は身体を動かせる。」

だから、その手を離しなさい紫。誰であろうと、私の邪魔をする者は許さない」

霊夢の覚悟を決めた瞳が紫を射抜く。

紫ははあーっとため息をついた。

「強がっちゃって……本当は立ってるのもキツいくせに」

「私の本領は、遠距離戦で空中戦よ。空から弾幕を使って闘うなら、身体の痛みなんて関係ない。霊力が尽きるまで闘えるわ」

紫の手を振り払い、霊夢は空を飛んで紅魔館の方に向かった。

霊夢は一瞬だけ身体の痛みで顔をしかめたが、すぐに何でもないような表情に戻した。

本当は空を飛ばないと歩くのも辛い程身体にガタがきていることを、咲夜や魔理沙に知られれば、土気が下がる可能性があるからだ。

「で、その射命丸はどうしたんだ？」

魔理沙が周囲を見渡す。

射命丸が自分たちに力を貸してくれるなら、更に紅魔館防衛が楽になる。

しかし、残念ながら霊夢は射命丸と一緒にこの場に来てはいなかった。

「さあ？ 今頃何してるのかしら？」

射命丸のことだ。ネタを集めるため、少し離れた場所から観察しているかもしれない。だが、霊夢からすればどうでもいいことだった。

霊夢はそもそもあまり射命丸に期待していない。

射命丸は、新聞記者である自分が異変解決に直接関わるのは好ましくないという独自の美学をもっている。

客観的に記事を書くためらしいが、そもそもその「客観的」という言葉を免罪符に、好き勝手に解釈して記事を書くのだから質^{たち}が悪い。射命丸の記事であらぬ誤解を受けた相手はごまんといる。

その時、突如として紅魔館の門が開け放たれ、金色の風が咲夜の傍を抜けていった。

咲夜は後方で門が開いた音に驚いて後方を振り返し、目の前を一瞬で通り過ぎた金色の軌跡を目で追った。その軌跡の向かう先には、主であるレミリア・スカーレットの戦場があった。



レミリアと天狗たちはそこそこ善戦していた。

通常ならレミリアが天狗たちに一方的にやられるのだが、レミリアは攻撃を捨て防御に専念することで天狗たちに隙を見せず、かといって紅魔館の方に天狗が向かおうとすれば、スペルカードで彼らの行く手を遮るといふ天狗からしたらとてもいやらしい闘い方で、天狗たちを翻弄していたからだ。

「クソツ、どうした!? でかい口を叩いたわりには逃げ回ってばかりではないか!」

大天狗の負け惜しみに近い叫びを、レミリアは愉快そうな表情で受け流す。

「速さが自慢の天狗が、私程度の速さを捉えられないのね」

「バカにしおって! その鼻っ柱、叩き折ってくれるわ……!」

「頭を冷やさんか、バカ者どもがッ!」

妖怪の山がある方角から、怒号が轟いた。

大天狗はハツとした表情で声が聞こえた方を見る。周囲の多数の天狗たちも身体を畏縮させて、大天狗と同様の方向を見た。

「やはり来たか……天魔!」

遙か遠くにいた天魔が、一瞬にしてレミリアの正面に立つ。

レミリアの正面に立って数瞬後に、大気を切った反動で天魔の周囲に強風が吹いた。

「お前ら、動きが単調になってるぞ。それではどんなに速さがあろうが意味はない。簡単に動きを予測できるからな」

「天魔様……何故この場に?」

「失敗するわけにはいかん」

天魔は正面のレミリアを無視して、紅魔館に向かう。

「神罰『幼きデーモンロード』!」

天魔が動いた瞬間、レミリアはスペルカードを発動し、多数の光弾とレーザーが天魔の行く手に殺到する。

天魔の動きを読み、天魔を狙うのではなく、天魔が来ると思われる場所に弾幕を集中させる。

これには天魔も一瞬足を止めざるを得ない。そして、その一瞬があればレミリアは天魔に追い付いて前に出れる。

「成る程、確かに厄介だな。これを何度もされれば、先にこつちを潰そうと考えても仕方ないか」

天魔は納得するように頷く。

再び天魔の正面に立ったレミリアは続けざまにスペルカードを使用。

「紅符『スカーレットマイスタ』！」

大、中、小と大きさの異なる光弾を大量に周囲にばらまき、天魔の眼前を埋め尽くした。

天魔はひとまず後方に下がり、距離をとってレミリアの弾幕に対応。

「私を倒そうとする意思を感じん——時間稼ぎか!？」

「あなたは行かせない」

そう言ったレミリアの声は少し震えていた。

天魔は何かに気付いたらしく、一度手を叩く。

「思い出したぞ。貴様、未来を知ることができなのだったな。なら、この後の未来も知っているのだろう。私に蹂躪される未来を……。貴様は私より強くない」

レミリアは唇を噛みしめる。

そう、私はこれから天魔にボコボコにされる。私が殴られようが蹴られようが諦めずにはなれないだろう。結果としてボコボコにされるわけで、別に天魔を追わなければそう

だが、ボコボコにされると分かっている、譲れないものがある。

天魔の後ろで天狗たちがじりじりと機を窺っているのをレミリアは感じる。本当に刹那の時間、レミリアの注意は天狗たちいき、天魔から意識が逸れた。

そして、再び天魔に意識を戻した時には、天魔は消えていた。同時に腹部に強い衝撃。「がはっ……い！」

天魔の拳がレミリアに深々とめり込み、レミリアは後方へと殴り飛ばされた。

更に天魔の追撃。天魔はレミリアの飛ばされた場所に先回りして右足を頭上まで上げ、レミリアが来るのを待ち構える。

それを唯一動かせる目で見えたレミリアは、天魔がどんな攻撃をするつもりか予想がついた。

(かかと落とし……!)

天魔はレミリアを地面に勢いよくぶつけるつもりなのだ。

しかし、狙いが分かかっていても殴られた影響で硬直した身体は言うことを聞いてくれない。

天魔の右足が振り下ろされる。その鋭さは、空を舞う紙を真つ二つにできる程の鋭さだろう。

レミリアは目を瞑り、痛みこそなえた。だが、レミリアが感じたのは痛みではなく、温もりだった。

レミリアが恐る恐る目を開けると、見知った顔に似た顔がそこにあった。

「……美……鈴?」

「はい、お嬢さま!」

美鈴はレミリアをお姫様抱っこで抱えている。

「美鈴、その姿はツ——!?!」

あり得ない。

美鈴が助けに来る未来など見ていない。

それにこの美鈴の姿は、ナルトの封印が終わった後になる筈。

美鈴の身体は金色に包まれ、首の下辺りには黒い勾玉模様。顔の両頬には、黒い筆で

書かれたような三本線。

「……九喇嘛モード」

ナルトの過去を唯一知っているレミリアは目を大きく見開き、呆然と呟いた。

「おのれツ！ この天魔を足蹴にしよったな！」

斜め下から猛然と天魔が迫って来ていた。

どうやら美鈴は天魔を斜め下に蹴り飛ばして、自分を助けたらしい。

「お嬢さまを足蹴にしようとしていたのですから、当然の報いです。お嬢さま、少し失礼します」

美鈴はレミリアを自分の後ろに移動させ、襲いかかってきた天魔を両腕で捌いて、天魔の腹部を前蹴りする。

天魔は腹を抱えながら後ろに吹き飛んだ。

美鈴は眼前にいる天魔や大天狗、多数の天狗たちを見据え、両腕をゆっくり胸の前に上げて構える。

「これより紅魔館の門番、紅美鈴が相手になります！」

門を通りたくば、この私を倒してみせろ！」

美鈴の闘気が大気を震わせ、見えない波となって天狗たちに襲いかかった。

閃光 Master spark

天狗たちが紅魔館にナルトを生け捕りにいったが、妖怪の山にいた天狗全てが行ったわけではない。

最小限の数ではあるが、天狗の住む場所を守る天狗たちもいた。

「むく、私も紅魔館組がよかつたな。いいネタを文より先に手に入れたかつたのに」
長い茶髪を紫のリボンで結んでツインテールにしている女の子、姫海棠はたてが天狗の家がある空洞の入り口付近でふてくされて頬を軽く膨らました。

「今更言っても仕方ないだろう。諦めて大天狗様に言われたことをきちんとやれ」

短い白髪に山伏風の帽子を被り、その手に身の丈に近い大きさの剣と紅葉が描かれた盾を持っている少女、犬走椋が隣にいるはたてを戒める。

「ていうかさ、今時力による支配って古くない？ 天魔つちも大天狗つちも考え方が時代遅れなんだよ。今の幻想郷はもうそういう世界じゃないのにさ」

「……我々天狗にとつて、天魔様と大天狗様の命令は絶対だ。不平不満があるのも分かるが、仕事はしっかりしてもらおう」

「うへへ、ここにも時代遅れの天狗がいた」

はたてがうんざりした様子でため息をついた。

「新聞記者なら言葉を選ぶべきだと思うがな」

「取り繕わず真実を伝えるのが私の新聞のモットーだから。正しい事しか書いてない『花果子念報』をどうぞよろしく！」

椛は自分の周囲を見渡す。

「私以外誰もいないが、誰に言ってるんだ？」

「へ？ 別に。暇だったから私の新聞のキャッチコピー考えてただけ」

はたてのあまりのフリーダムさに、椛は頭を抱えた。

「はたてにはついていけないよ」

「そんなことよりさ、紅魔館はどうなってるの？」

天狗の半数くらいが一斉に攻めに行っただから、いくら吸血鬼でも一方的な展開になつてんじゃない？」

椛の眼前には木々が生い茂っているが、彼女には関係ない。

千里先まで見通す程度の能力で、紅魔館の闘いをその場にいるような精度で見ることが出来る。

椛は紅魔館がある方向をじつと見つめ、頷いた。

「確かに一方的な展開だ。我々天狗が圧倒されている」

信じられないモノを見ているかのように、椛の目は大きく見開かれ、その顔からは血の気が引いていた。

はたては目を輝かせ、ゴクリと生唾を飲み込む。

「えっ!?! なんでなんで!?! 天魔つちも援護に行つたじゃん! なのに、なんで天狗が圧倒されてるの!?!」

まだ夜になってないけど、吸血鬼に隠された力みたいなのがあつたの!?!」

「お前は何故同胞がやられているのに嬉しそうなんだ!?!」

いいネタを手に入れたと言わんばかりにぐいぐい近付くはたてを手で必死に押さえながら、椛は呆れたように声をあげた。

「それに、天狗や天魔様を圧倒しているのは吸血鬼ではない……いつも紅魔館の門の前で寝てる妖怪だ」



天狗たちが美鈴目掛けて超高速で突進する。目にも止まらぬ速さで縦横無尽に動き回り、全ての方向から天狗たちの腕が伸ばされてくるのは恐怖だろう。それが普通の妖怪なら。

しかし、九喇嘛モードになった今の美鈴は普通の妖怪に当てはまらない。

全方向からの攻撃一つ一つを丁寧払い、お返しとばかりに綺麗に一発ずつカウンターで拳を入れる。

僅か数秒の間に、美鈴が捌いた天狗の攻撃の数は五十を軽く越え、その数は同時に天狗を撃破した数でもあった。

美鈴の攻撃をくらった天狗たちが、それぞれ攻撃されたところを押さえて、地面に落下していく。

天魔がそれを見て舌打ちし、他の天狗と比べ物にならない速さで美鈴との距離を詰め、右足で上段蹴り。

美鈴がそれをかがんでかわし、そのまま天魔の顎目掛けて右のアッパーカット。天魔は上体を反らして回避。美鈴は流れるように体勢を変え、がら空きになった天魔の胴を左の掌底で打つ。

打たれた部分を中心とした見えない衝撃の波紋が生まれ、天魔は血を吐き出しながら吹っ飛んだ。美鈴の掌底は外傷より内臓のダメージに重きを置いた攻撃だったため、天魔の内臓のどこかが損傷したようだ。

そのダメージを気合いで抑えこみ、天魔は血の筋を口の端に残して、歯を食い縛る。

「……………」

凄まじい妖力の奔流が天魔の周囲に渦巻き、やがてそれが天魔の指先に集中していく。

天魔がその指を美鈴に向けた。

「縛ッー」

指先から放たれた妖力の縄が美鈴に巻き付き、ぎちぎちと締め上げる。この妖力の縄は天魔の得意技である捕縛技であり、天魔が一番自信を持っている技でもある。

しかし、美鈴は苦しむ素振りをみせず、無表情で自分の身体を締め付ける妖力の縄を見る。

美鈴はぐつと両腕に力を入れ、軽々とその縄を広げてそのまま断ち切った。

「バツ、バカナッ！ たかが一妖怪がいともたやすく我が技をッ！」

これが、この強さこそが外来人の持つ力の本質か！

幻想郷のパワーバランスの一角を担っている天狗の長を、名も分からぬ妖怪が圧倒する。

この妖怪のように力を使えるようになれば、本当に幻想郷の全てを支配できるかもしれない。

美鈴が顔の前に右手を上げ、その指の間にスペルカードが挟まるように現れた。

「分かってますよ、狐さん。極光『華厳明星』」

美鈴の両掌に氣と九尾のチャクラが集まっていき、それはやがて光輝く大きな球体となつて、掌の前で静止。

その眩さは、紅い空の中にもう一つ太陽が生まれたような輝きだった。その球体に内包されている強大な妖力と九尾のチャクラの影響で、美鈴の髪は少し浮き上がっている。

「はっ！」

美鈴の声を合図に、とてつもない速さで球体が放たれた。

天魔は回避を諦め、咄嗟に両腕を胸の前で交差しガード。自身の妖力を最大限まで高め、防御する。

球体が天魔に当たった瞬間、紅い空に爆発の光輪が咲いた。爆風が大気を震動させ、美鈴とレミリアの肌をビリビリと震わせた。

レミリアは右手を翳して、強烈な閃光を防ぐ。

「分かってたけど、実際に見てみると、やっぱり圧倒的な強さね」

爆煙が晴れ、天魔が姿を現した。天魔は息も絶え絶えで、辛うじて空を飛んでいる状態。全身に傷を負い、防御に使った両腕は内出血で黒く滲んでいる。

美鈴は瞬きの間に天魔の眼前に移動し、右足の廻し蹴りで天魔を天狗たちの群れている方に蹴り飛ばした。

「ふうー……」

美鈴は丹田呼吸法——丹田へそ下を膨らましながらか、息をはいて、腹の力を抜き大きく息を吸う呼吸法——をして、自身の気を高めながら、戦闘で乱れた気を整える。

「ところで美鈴、あなたはパチエの護衛だった筈よ。そのあなたがなんで私の援護に来たの？」

「パチユリーさんが言ったんです。私が結界を維持する必要が無くなったから、外の戦力を増やした方がいいって。それで私が外の援護に行くことができました」

パチユリーの快復により、パチユリーは自身の力を最大限まで発揮できるようになった。

そのおかげでレミアアを見た、自身が天魔にボコボコにされる未来が変わった。

レミアアは少し誇らしげな表情で、紅魔館の方を振り返る。

「さすが、私の友人ね！」



紅魔館の庭、パチユリーは空を見上げるように頭上を見た。

今、結界の維持をしているのはパチユリーではなく、紅魔館内を荒れ狂う九尾のチャ

クラ。

パチュリーは結界を維持しながら、九尾のチャクラの性質を把握し、結界に九尾のチャクラが取り込まれるよう術式を組み直して、九尾のチャクラによる結界の維持を実現させたのだ。

(もし喘息が治ってなかったら、結界を維持しつつ術式の組み直しなんて高度な事、できなかったわね)

当然ナルトの封印が終了し九尾のチャクラが消えれば、自動的に結界も消える。しかし、元々九尾のチャクラを幻想郷に漏らさないための結界。別にそれで何の問題もない。

九喇嘛が門の方を見ている。

(あの女のあの姿……間違いねエ。ありや九喇嘛モードだ。

何でだ？ 何で人柱力じゃねエ奴が、九喇嘛モードになれる?)

ただ九尾のチャクラを使いこなしているだけでは、九喇嘛モードにならない。九喇嘛自身が力を貸し、九喇嘛と協力関係になって初めて九喇嘛モードになれる。

九尾のチャクラを使いこなせても、人柱力でなければ九尾モードまでしかなれない。

(だいたい、ワシがあの人に力を貸してエなんて思うわけがねエ。

いや、確かに今のナルトの状態を見りゃあ、誰にも邪魔させねエために、あの女に力を貸してやってもらって——)

そこまで思考して、九喇嘛は納得できない様子で眉間にしわを寄せた。

(ちよつと待て！ ワシはいつあの女に力を貸してやっていいなんて思った!? こっから少し本気でやるぜ。女ア、テメエも気合い入れる！

何だ!? ワシの思考に別の思考が混ざって——!)

そこで、九喇嘛がハツとした表情で顔を上げる。

あり得ねエ。そんなことが本当にできるのか。

だが、この仮説以外に、あの女が九喇嘛モードになれる理由。それと、ワシに別の思考が混ざる理由が思いつかねエ。

「なあ、この結界を創った女。さつき門を出てった女は何者だ?」

突然九喇嘛に話しかけられ、面食らったパチュリーだったが、落ち着きを取り戻すと不愉快そうに顔をしかめた。

「私にはパチュリーって名前があるのよ。女じゃなく、パチュリーって呼んで」

(面倒くせエ)

「……そりゃ、済まねエな。で、パチュリー、さつきの質問だが——」

「あの子は妖怪よ。気を使う程度の能力を持っていて、主に体内のエネルギーやオーラ

を目に見える形にできるわ」

目に見える形——九喇嘛は自分の仮説に確信をもった。

（信じられねエ……信じられねエが……。あの女、取り込んだワシのチャクラで、体内にワシの分身を創りやがったツ！）

つまり、影分身のようなものだ。本体のチャクラが分けられ、その分けたチャクラに本体と同じ見た目や知識といった情報を入れて、分身を形作る。

だが、影分身と違う部分の一つあつた。それは、分身体と思考がリンクしていること。通常の影分身は、影分身が消えて初めて影分身の経験したことが分かる。

九喇嘛の場合は、リアルタイムで分身の経験や思考を知ることができる。これは、九喇嘛自身が莫大なチャクラの塊であることが関係している。つまり、九尾のチャクラ全てが九喇嘛の本体であり、肉体なのだ。

なら、九尾のチャクラを取り込んだ全ての妖怪の思考を知ることができると思うかもしれないが、残念ながらそれはできない。

何故か？ そのチャクラには美鈴が創った分身のような意思が備わっていないからだ。意思のない力で何かを知ることにはできない。

美鈴は紅魔館内という、幻想郷の他の場所とは桁違いに九尾のチャクラ濃度が濃い場所にあった。美鈴は他の妖怪とは比べ物にならない程の九尾のチャクラをそこで取り込

んだのだろう。そして、美鈴の能力が自身の内に取り込んだ膨大な九尾のチャクラに形を持たせたのだ。

（気付くべきだった。紅魔館に来たとき、あの女だけが九尾の衣を使っていることを知った時に）

誰もが九尾のチャクラをオーラのように纏わせるしか出来ない中で、美鈴だけは唯一九尾の衣を纏えた。これも美鈴の能力があったからこそ纏えたのだろう。あの時は取り込んでいた九尾のチャクラが少なかった。だから、意思をもたせることは叶わず、衣で留まった。

ふと九喇嘛がフランの方を見る。

（確かこいつもワシのチャクラを取り込める妖怪だったな。こいつはワシのチャクラを取り込んでいるのか？ もし、このチャクラ濃度の中でワシのチャクラを取り込んだとしたら、こいつはどうなる？）

フランはナルトの傍で、ナルトのことを見守っていた。

（何だろう……：身体の内奥がジンジンと熱を持っているような——この紅い霧みたいなヤツのせいかな？）

フランは余計な思考を、頭を振って払い落とす。

余計な事を考えて、思考の渦にハマってしまったら、闘いの事も考えてしまうかもしれない。

そうなった時、自分も戦闘に参加したくなかって役割も忘れて外に出ていきたくなくなる可能性がある。だから、今はお兄さんを守ることにだけに集中するんだ。

眼前の台座に横たわり、力のない目をしているナルトの方をフランは見た。

「苦しいの？ でも、頑張つて！ ここまで諦めたらダメだよ！」

ナルトはフランの方に少し顔を向ける。

その視線はフランを通り過ぎ、フランの後ろで九喇嘛とナルトを術式で必死に繋いでる影分身に向けられた。

八卦封印の術式は既に完成している。後は、術式と九喇嘛をリンクさせ、術者を楔として八卦封印に九尾のチャクラを封じればいい。しかし、膨大すぎる九尾のチャクラは、尾獣を抜かれた影響で弱った影分身のナルトには荷が重すぎた。

一気に封印ができず、少しずつしか九喇嘛を封印できていないのだ。

これでは、封印を終える前にナルトの命が尽きてしまう。

ナルトは横にした顔を正面に戻して、結界越しに空をぼんやりと見た。

紅い。何もかもが紅い。あまりにも紅いから、すっかり目を開けていられない。

目に突き刺さる紅一色の視界に、ナルトはその紅から逃れようと目を細めた。だが、

目は閉じない。目を閉じてしまえば、もう二度と瞼が上がらなくなると本能的に感じているからだ。

(なんか……九喇嘛と一緒に魂も出ていった気がする。身体が浮いてるような……寝てるのに、身体がふわふわ宙に浮かんでら……)

こんな状態でうずまきクシナは、オレの母ちゃんかあは暴走した九喇嘛の全力を抑え込んだのか。

(何でだつてばよ……)

——君には大切な人がいますか？

脳裏に響く声。その声は、とても透き通つていて静かなのに力強さを感じる、そんな不思議な声。もう二度と聞くことができない声。

(何で、今ハクの言葉が頭に聞こえるんだ?)

——人は……大切な何かを守りたいと思つたときに、本当に強くなれるものなんです。

うずまきクシナには、夫の波風ミナトと息子のうずまきナルトという大切な存在がいた。だから、瀕死の状態でも九尾の動きを封じる程の力を出せたのか。

なら、オレは？

暴走してねエ、むしろ協力的な九喇嘛を未だに封印できず、身体のダルさに身を任せ

つつあるオレはどうなんだ？ オレには大切なものがねエのか？ 幻想郷にこれ以上迷惑はかけられねエだろ。だから、再封印するって決めたんだろ。

そこで、ナルトは気付いた。

(何だよ、オレってば本気で幻想郷を守りたいって思ってたのか)

ただ、自分のせいで幻想郷がおかしくなったのが嫌だった。それは、守りたい感情とは別物だ。

だが、それも仕方ないだろう。ナルトは幻想郷に来てまだ数日しか経っていないし、その半分以上は寝て過ごした。それで幻想郷に愛着をもてという方が土台無理なのだ。

(封印が失敗すりゃ、九喇嘛が幻想郷に解き放たれちゃう。それで本当にいいのかよ!?)
自分を奮い立たせようと、封印が失敗した時を考える。しかし、それでも視界は狭まり、指から力が抜け、身体がゆっくりと死んでいく感覚を消せなかった。

そんな時だった。紅一色の世界に、別の色が飛び込んだ。

結界の向こう側、青い閃光が紅く染まった天を衝く様が見えた。

そのどこまでも力強く、目に沁み^{しみ}るような青い閃光の柱をナルトは知っている。

そして、同時にある事を思い出した。

——もし、私の身が危なくなったら、空に向けて『マスタースパーク』を放つ。それを見たら、必ず来てくれよ。

魔理沙の身に危険が迫ってんのか!?

ナルトの目に、鋭い光が灯る。

何弱気になってんだ、うずまきナルト!

今この瞬間もオレを信じて、必死に闘ってくれてる奴らがたくさんいるじゃねエか!
それに、オレは魔理沙と約束したんだ! この光を見たら、必ず魔理沙のところに
行って!

身体がダルい? それがどうした。

視界が霞む? それがどうした!

魔理沙を救うために、オレはやらかなきやなんねエんだよ!!

台座に横たわっていたナルトの身体が淡く光を放ち始め、その光が紅魔館の結界内に
一気に広がる。

その光が九喇嘛を呑み込み、九喇嘛は口元を歪めた。

(ナルト——お前はやつぱ大した奴だぜ。まさか、影分身と一緒になってワシを一気に
封印とはな)

紅魔館の庭いっぱい広がった光が収まった時、紅魔館にされていた結界のように、
ナルトの姿は台座から消えていた。

「えっ、消えたッ!」

フランはもうナルトのいない台座を、目をまるくしてじつと見た。

友達 Only one of the important presence

「それにしてもどういう風の吹き回しだよ。ナルトのこと、外に出したがってただろ？ そんなお前が私たちに手を貸してくれるなんて」

不思議そうに訊いてくる魔理沙に、霊夢はため息をついた。

「あのねえ……もうアイツん中に封印してたモノが幻想郷に出てるじゃない。こんな状態でアイツを外に出しても意味ないでしょ。今は再封印とやらを成功させるのが重要なのよ」

アレを封印できるのがナルトしかない以上、今ナルトを幻想郷から弾き出すわけにはいかない。

それに、霊夢は元々天狗からナルトを守るために来た。外に出すつもりでこの場には来ていない。

「れ、霊夢、魔理沙、お喋りはその辺で止めといた方がいいわよ」

咲夜が焦った様子で正面を見ている。

魔理沙と霊夢もそれにつられ、一時話を中断して咲夜が見ている方に顔を向けた。

そして、咲夜が見ているモノが何かを知った時、汗が一筋二人の頬を伝つたって流れた。「……おいおい、豪華すぎる来客だな。言つとくが、お前を満足させれるモンは置いてないぞ」

左手に盃を持って、ゆっくりと歩いてくる額に角の生えた女性は、魔理沙の言葉を聞いて楽し気に微笑んだ。

「何を言ってるんだい？ あるじゃないか、あの中に」

角のある女性が右手で紅魔館を指差した。

魔理沙ら三人が同時にスペルカードを指に挟む。

「こうして館の外にいても、ビリビリ伝わってくるのさ。私が手に入れた力と同じモンが」

「紅魔館は今、立ち入り禁止よ。邪魔するってんなら、鬼だろうが力づくで止める」

幻想郷において、鬼という妖怪は強大な力を持つ種族で、幻想郷のパワーバランスを担っている天狗が従っていることから、鬼がどれ程強大な力を持っているか分かる。

その中で、『山の四天王』と呼ばれる鬼の中でもより強い力を持った鬼がいる。

今、霊夢たちの前に立っているのは、その四天王に数えられている鬼、通称『力の勇儀』。

金髪のロングヘアを風に遊ばせ、額に星マークが入った赤い角。瞳の色は赤く、上半

身は体操服のような白色の服を着て、下はロングスカートを着用。両手首には手枷が、両足首には足枷が付いている。左手には『星熊盃』と呼ばれる盃を持っていて、その盃には酒が注いである。

彼女の名は星熊勇儀。力だけなら、幻想郷の中でも最強候補。

そんな存在を、霊夢たち三人はこれから足留めしなくてはならない。

「はっはっはっはっ！ いいねえ、あんたらのその鬨気！ 楽しめそうだ！」

勇儀はぐつと地面を踏みしめ、一步で霊夢たちの眼前まで接近。霊夢目掛けて右拳を降り下ろす。

霊夢は後方に跳躍して回避。そのまま、空に急上昇。

勇儀の拳は地面に直撃し、地面を抉って周囲に砕けた地面の欠片をばらまく。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

星形の光弾が、魔理沙に迫りくる大小様々な大きさの石にぶつかり、砕いていく。

咲夜は能力で時間を止め、飛んでくる石より前に移動。勇儀のすぐ左にきた咲夜は、時間を動かすのと同時に跳躍しながらスベルカードを発動。

「傷魂『ソウルスカルプチュア』！」

咲夜自身の時を加速させ、凄まじい速さでのナイフの斬撃をくりだす。

「ははっ！ いい殺気だ、ゾクゾクするよ！」

その高速の斬撃を紙一重で避けながら、勇儀は笑みを浮かべる。

「霊符『夢想封印』！」

勇儀の頭上から、色とりどりの光弾が降り注ぐ。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

勇儀の背後から、魔理沙のスペルカードによる星形の光弾が渦を巻きながら周囲に放たれる。

逃げ場のない全方位攻撃。それに怯むことなく、勇儀は不敵な笑みで、スペルカードを取り出した。

「力業『大江山嵐』！」

勇儀の周囲に青く輝く大きめの球体が多数現れ、全方位に放たれた。

それらは霊夢と魔理沙の弾幕を相殺し、眼前の咲夜に襲いかかる。咲夜は後方に跳躍し距離をとって、ナイフで飛んできた勇儀の光弾を全て弾いた。

勇儀は咲夜との距離を瞬く間に詰め、その勢いを殺さず、飛び蹴りに近い前蹴りを放つ。咲夜がそれを両腕でガードしつつ、後ろに自分から跳んで蹴りの衝撃を殺す。

咲夜が地面を転がりながら、遙か後方まで吹き飛ばされた。

勇儀は頭上を見、再び霊夢の『夢想封印』が空を埋め尽くして勇儀に牙を剥く様を視界に捉えた。

勇儀は跳躍し、自らその弾幕に突っ込む。

「光鬼『金剛螺旋』！」

勇儀から大型の弾が螺旋状に放たれ、正面の霊夢の弾幕に当たって爆発した。

爆煙が霊夢の視界を遮り、その爆煙を突き抜けて勇儀が霊夢に肉薄し、右腕で殴りかかる。

「……ッ！ 『夢想天生』！」

霊夢はスペルカードを発動させ、勇儀の右腕が霊夢をすり抜けた。

更に霊夢は零距离の勇儀に多数の光弾を浴びせ、勇儀を地面に光弾の爆発で叩きつけた。

その間に魔理沙は箒に乗り、勇儀が落ちた場所に高速で移動。起き上がろうと頭を上げた勇儀の目の前でスペルカードを発動させる。

「星符『エスケープペロシテイ』！」

魔理沙が箒を上を持ち上げ、眼前に大量の星形の光弾を撒き散らしながらそのまま上昇。撒き散らした光弾全てが勇儀に直撃したのを、魔理沙の目は捉えていた。

勇儀の姿が、直撃による爆発の影響で生まれた爆煙に包まれる。

霊夢の隣で、魔理沙は爆煙の方に顔を向けた。

「やったむぐっ！」

霊夢が魔理沙の口を左手で塞いで、魔理沙の言葉を遮った。

「言わせないわよ」

「…………ふはっ！ 何でだぜ!？」

霊夢の左手を引き剥がし、魔理沙は霊夢に問うような視線を送る。

「そのセリフがお約束だからよ!」

霊夢と魔理沙が言い争っている間、爆煙の中から音が聞こえた。ごくごく喉を鳴らしているような、そんな音だ。

「…………んくっ、んくっ、んくっ! ……はあく!」

あーっ、美味しい! 戦闘を着に飲む酒は格別だねえ!」

左手に持っていた盃に注がれていた酒を飲み干し、勇儀は口を右腕で拭った。魔理沙の弾幕が零距离で直撃したにも関わらず、勇儀の身体には傷一つついていない。

「何ともないのか! 私手加減してないぞ!」

「何ともないことはなかったさ。少し身体が爆発で痺れた。

だから、酒を飲み干したんだよ。酒がこぼれるのを気にして、三人を相手にするのはちよつと厳しいと思ったからね。

安心しなよ、盃は手放さないから、左手は使わない。ただ、今までよりも少しだけ動きが良くなるだけさ」

勇儀が霊夢の方に視線をやり、何かを探るように霊夢をじつと眺める。

「霊夢、あんたどつか調子でも悪いのかい？」

霊夢は勇儀の言葉に表面上は表情を変えず、勇儀を見下ろす。

「別に普通よ。何で？」

「いやね、あんたは攻めるように闘うタイプだと前に『弾幕ごっこ』した時に感じたんでね。今のあんたからは攻めるって意思を感じない。

それに、あんな簡単に『夢想^{切り}天生^札』を使ったのには、理由があると思つてね」

「ただの気まぐれよ。理由なんてないわ」

「そうかい。まあ、どうでもいいさ。」

あんたら、本気で私を止めにおいで。じゃないと、飽きて紅魔館に行つちやうよ？」

勇儀は三人を同時に相手取るこの闘いに楽しさを感じていた。勇儀が本気を出せば、紅魔館に行くことなど簡単にできるが、滅多にない本気で止めにくる三人の容赦ないスペルカードの多用。

こんな闘いも普段ではなかなか味わう事のできない魅力があり、別にこのまま三人と闘つていてもいいかと考えたからだ。

勇儀は両足に力を入れ、魔理沙と霊夢目掛けて跳躍。凄まじい速さで瞬く間に二人に近付き、霊夢の左足を右手で掴んで地面に叩きつけるように投げる。

「きゃあああああー！」

「霊夢！」

悲鳴を上げて霊夢が地面へと高速で落下していく。

魔理沙は落ちていく霊夢に意識が一瞬いき、勇儀が霊夢を投げた遠心力で身体を回転させて放った、右足上段からの蹴りへの対応が遅れた。

「加減はするから、心配いらナイよ」

勇儀の右足の軌道は斜めを描き、魔理沙の横腹を捉えて、魔理沙も蹴りで地面に飛ばされた。

霊夢は地面にぶつかると直前、自身の全霊力を投げられた力の相殺に使い、なんとか地面すれすれで勢いを殺すことに成功した。

魔理沙も箒を巧みに使い、飛ばされた力を上手く殺しながら、地面を滑空して勇儀を睨んだ。

「っの！ 肉弾戦じゃなく弾幕戦をしろよ！ 魔符『スターダストレヴァリエ』！」

大量の星形の光弾が勇儀に襲いかかる。勇儀は自身に向かつてきたそれを、自分に当たる光弾だけ全て右手で払い落として、魔理沙の眼前に着地。

「なっ、そんなのありかよー！」

勇儀が魔理沙の箒の柄の部分をつかみ、霊夢の方に槍投げのようなフォームで投げる。

霊夢はそれを避け、魔理沙の箒は地面へと突き刺さった。魔理沙は慣性の法則により、前に転がる。

魔理沙は服についた土を両手で払い落として、地面に突き刺さっている箒を抜き、背負う。その目には、自分の箒を無下に扱われたことによる怒りの輝きがあった。

「勇儀……てめーは私を怒らせた」

「そんなに怒んなよ。壊れないように投げてやったんだから。別にヒビとかも入ってなかったろ？」

「そういう問題じゃない！ 恋符『マスターズパーク』！」

青い閃光の柱が、勇儀に迫る。勇儀は右手を翳して正面から受け止めた。

魔理沙から供給される魔力が勇儀の掌で止まり、柱だったマスターズパークはいつの間にか球体状になった。

そして、魔理沙の魔力供給が終わったと悟った勇儀は、右手を握りしめて裏拳でその球体を斜め方向に弾き飛ばした。

「わ、私の……『マスターズパーク』が……そんな」

今まで『マスターズパーク』をかわされた事は多々あれど、当てたうえで弾き飛ばされた事など一度としてなかった。

だからこそ、魔理沙が受けたショックは並ではない。

「くう〜！ 痺れるねえ！」

勇儀が『マスタースパーク』を弾いて震えている右手を見ながら、嬉しそうな笑みを浮かべている。

「奇術『エターナルミーク』！」

青い丸形の光弾が凄まじい速さで勇儀に放たれ続ける。勇儀はそれを回避しながら前進。咲夜に鋭い廻し蹴りを浴びせようとしたが、咄嗟にバックステップ。

勇儀の正面を横から来た色とりどりの光弾が通つていき、それらの光弾は勇儀を少し通り過ぎると、勇儀に吸い込まれるように軌道を変えた。

「光鬼『金剛螺旋』！」

勇儀は向かって来た光弾を同じく光弾で相殺。そして、一つ頷く。

「うん、もう十分堪能した。そろそろ本命といこうかね」

勇儀は三人との『弾幕ごっこ』はもう終わりにして、この場所に来た理由、即ち九尾との戦闘に移ろうと決めた。

この三人とは正直いつでも闘おうと思えば闘えるが、九尾に関しては今この瞬間しか闘うチャンスがないと本能的に感じていたからだ。

勇儀は正面に生まれた爆煙を煙幕代わりに利用し、咲夜を無視して、紅魔館へと走り出す。

それを邪魔するように魔理沙が勇儀の前に立ち塞がった。口には兵糧丸を含み、手にはミニ八卦炉を握りしめて勇儀に向けて構える。

そして、魔理沙が口に含んでいた兵糧丸を噛む。と同時にスperlカード発動。

「私の『マスタースパーク』は、誰にも止められちゃダメなんだ。誰にも……たとえ鬼でも！」

恋符『マスタースパーク——』

魔力がミニ八卦炉に収束し、青い閃光が勇儀に向けて放たれる瞬間、魔理沙の前を走っていた勇儀が消えた。勇儀はさらにスピードを上げ、刹那の時間で魔理沙の隣に移動したのが、魔理沙には消えたように見えた。

「なかなかの威力っぽいね。あの門壊すのに使わせてもらおうよ」

勇儀はミニ八卦炉に収束された魔力がさつきとは段違いであることに気付いた。

だから、それを紅魔館の門にぶつけて、門を開ける手間を省こうと考えた。

勇儀は魔理沙に足払いをして、魔理沙を転倒させる。

正面に構えられていたミニ八卦炉は転倒により、後方の紅魔館に向けられた。

(ナルト……私は知ってたぜ)

魔理沙の身体は宙返りのような体勢になり、魔理沙の視界が紅魔館を逆さまに捉える。

(お前の心に深い傷があることを)

魔理沙はナルトが意識を失っていた二日間、ずっと看病していた。

その時に知ったのだ。ナルトの右腕が義手だということに。

さらに、ナルトは寝ている間、ずっとうなされていた。誰かに赦しを請うように、うわ言で謝っていた。

魔理沙は知っていた。ナルトがずっと己を責め続けていることを。

だから、看病が終わってそのままナルトとお別れなんてしなかった。

会って間もないのに友だちだと言って、ナルトの傍にしようと思った。

ナルトの傍で、ナルトが何で心に深い傷を負ったのか、知りたいと思った。

——それで……私が少しでもその傷を癒せたらって、そんな柄でもないことを決めたんだ。

その想いは、ナルトと一緒にいる時間が長くなる程大きくなっていった。

最初は強引に友だちだと言ったが、少し時間を共にしただけで、昔から付き合っているような感じで親しみを覚えた。

魔理沙は紅魔館を覗む。

もしここで紅魔館の門を破壊したら、結界に穴が開く。そうなれば、九尾の力は一気にその穴に流れ込むだろう。今まで必死に守っていたことが無駄になる。

ナルトはその時己を責めるだろう。何でもっと早く封印できなかったんだって。今回のことだって、ナルトはかなり責任を感じていたように見えた。

フランや他の誰かのせいにせず、自分が力不足だったからと全て一人で抱え込んでいた。

(ナルト、お前はもう自分を責めちゃ駄目なんだ！)

私は知ってるぞ、ナルト！

お前は誰よりも優しい奴だって！

たとえ幻想郷中の奴らがお前を否定しても、私はお前を否定しない！

ナルトは私にとつて、大切な友だから！

だから私は——ナルトが己を責める原因をつくるのを許さない！

「当たるなあああ!!」

すでにミニ八卦炉に魔力は収束していて、『マスタースパーク』を中断できなかった。宙返りの体勢のまま、紅魔館に向けられていたミニ八卦炉を持つ手を無理やりずらして、紅魔館の空へと軌道修正する。

その瞬間、一際太く青いレーザーがミニ八卦炉から放たれ、紅魔館の空に青い道を創った。まるで天へと誘う導シルベのような、力強くまっすぐな一本道。

『マスタースパーク』を放ちながら、魔理沙は思い出していたことがあった。

——この光が見えたら、必ずお前のところに行く。

ナルトとの約束。

あれは私にとつて、ナルトの心がぎりぎりで壊れないようにするために言った約束だ。

だつてそうだろう？　ここは幻想郷で私の庭みたいなもの。命の危険なんて事態になる前に、私はそれを回避できる自信がある。

卑怯なやり方だけど、私の命をナルトに背負わせた。

誰でもない、ナルトにしかできない役目があれば、ナルトは私との約束を考えて、一人で勝手に潰れるようなことはできなくなる。

あの約束はいわば、私とナルトを繋ぐためだけにした約束。

普通に考えれば、約束を護るのは無理だ。今のナルトは通常の状態ではなく、身動きのできない状態なのだから。

だけど、私の傍に来てほしいと思つてしまっているのも事実。

私の命を、私との約束をナルトに護つてほしいと勝手な事を願っている。

(あつ……：そういえば私、宙に浮いてるんだっけ)

このまま私は地面にぶつかる。

そう思った。でも、ぶつかる直前、力強い両腕が私を支えるのを感じた。

勇儀が突然の来訪者に目を見開く。

私は私を支えてくれた両腕の主であるナルトの青い瞳を見て、あまりの嬉しさに満面の笑みを浮かべた。

「封印……成功したんだな」

「ああ、魔理沙のお陰だ！」

ナルトは笑顔でそう言い、勇儀の方に顔を向けて睨む。

勇儀は紅魔館を見て、今まで感じていた強大な力が消えているのに気付き、残念そうに息をついた。

「ああ、時間切れか。勿体ないことしたねえ。

でも、楽しめそうな相手がまた一人増えたから、これはこれでいいかな」

勇儀はナルトから感じる闘気に、口の端を吊り上げる。

ナルトは魔理沙を地面に立たせ、魔理沙と勇儀の間に割って入った。

「ナルト、お前勇儀と闘う気か!? いくら何でも無茶だぜ! 勇儀はスゴく強いからな
!」

「そんなことはどうでもいいんだ。魔理沙……お前はオレを救ってくれた」

ナルトが思い出すのは、フランの攻撃で傷付いた自分を看病したと言った魔理沙の姿。

「あの時も——」

——今日はナルトと友達になった日だ。

誰一人として自分に心を開いてくれる人がいない中、魔理沙は心を開いてくれた。それがどんなに嬉しかったか。

「あの時も——」

——友達が困ってるなら、力を貸す。

霊夢との『弾幕ごっこ』に負けた時、オレはこの先どうなるか不安だった。

けど、魔理沙はそんなオレの味方をしてくれた。それがどんなに心強かったか。

それに、大切な事を思い出した気がしたんだ。

「そして、今も——」

力強くまっすぐな青い閃光。それがオレに大切な友^{トモ}だちを思い出させた。

幻想郷にも、オレが心の底から護りたいものがあつただつて気付かせてくれた。

だから、最後の最後で気力を振り絞れた。九喇嘛を封印することができた。

「お前はオレを救ってくれた。ホントにありがとな。だから今度は、オレにお前を救わせてくれねエか」

「ナルト……：気にしなくていいんだぜ。私とナルトは友だちだからな。それに、別に命の危険があつたわけじゃないんだ」

「えっ!? そうなの!」

ナルトは早とちりをしていたことに気付き、恥ずかしさのあまり少し顔を赤くしたが、すぐさま鋭い目つきになり、向かってきた勇儀の拳を受け止め、後方に投げ飛ばす。

「おおっ!? いい! いいねえ、兄ちゃん!」

空中で一回転して着地した勇儀は目を輝かす。

「どうもあのネエちゃんはやる気になってるみてエだな」

ナルトは勇儀の正面に立ち、右手の親指で自分を差した。

「オレの名前はうずまきナルトだ! 最初に言っとく。オレはめちやくちやつえエ!」

「そうかい! そいつは楽しみだ!」

「はい! そこまで!」

ナルトと勇儀が闘おうとした刹那、勇儀の右腕を掴んだ者がいた。

勇儀は自分の右腕を掴んだ相手を見て、げつと声を漏らす。

「鬼たちに勇儀がいなくなつたと言われて捜してみれば、こんなところで油売つてたのかい」

「今いいところなんだよ、少し待っておくれよ萃香」

萃香と呼ばれた人物はとても幼い容姿をしていた。

髪型は薄い茶色のロングヘアを先っぽのほうで一つにまとめている。瞳は真紅の瞳で、頭の左右から身長と不釣り合いに長くねじれた角が二本生えている。

服装は白のノースリーブに紫のロングスカートで、頭に赤の大きなリボンをつけ、左の角にも青のリボンを巻いている。

「その外来人に今度旧都まで来てもらいなよ。今ここで勇儀に暴れられると私が困るんだ」

「どういう意味だい？」

「霊夢から話を聞いてね、どうやら幻想郷に起こった何かの力が混じった今回の異変は、一応解決したらしい。」

異変が解決したら、やる事は一つだろうか？」

ニマツと笑う萃香の意図を勇儀は察し、勇儀も同じように笑みを浮かべた。

「今から二時間後に紅魔館で宴会するよ！」

「…………え、宴会？」

話についていけないナルトは、ポカンとした表情で萃香と勇儀を見ていた。

野心くG o b e r s e r k m o n s t e rく

意外だったのは、レミアリアが紅魔館での宴会をすんなりOKしたことだ。

ナルトが九喇嘛の再封印に成功し、紅魔館から九喇嘛の存在が消えてすぐ、天狗たちは妖怪の山に退いていった。

九喇嘛が消えた以上、紅魔館を攻めるメリットはないと天狗たちは判断したのでらう。

その後、萃香がレミアリアに許可をもらい、近場に宴会をするという情報を流した。

紅魔館には今、それなりの人数が集まっている。

ナルト、霊夢や魔理沙、幽香と射名丸、勇儀と萃香が紅魔館の面々と一緒に、紅魔館の庭に敷かれたブルーシートの上に座っていた。

幻想郷では、異変を解決すると後腐れないよう、異変を起こした相手も含めた宴会を行うことがお決まりだった。

魔理沙は自分の両隣を交互に見て息をつく。

魔理沙の両隣にはナルトと霊夢が座っている。そのどちらもぼつが悪そうに、視線を合わそうとしない。

（な、何だぜ？ この気まずい雰囲気は……）

物凄く空気が重い。自分のいるところだけ、別世界のような錯覚をしてしまう。

ナルトと霊夢がこうなっている理由は、間違いないく二人がした『弾幕ごっこ』が原因だろう。

「霊夢、あのさあ、オレってばお前に一つ言いてエことがあるんだ」

霊夢はビクリと身体を震わせた。

幻想郷の外に無理やり出そうとした挙げ句、『弾幕ごっこ』で挑発的なことを散々やつた。

それは九尾のチャクラを取り込み、気分が昂っていたからこそその行動ではあるが、確かに自分の意思で行った。

ナルトが何を言いたいかなど、言われる前から分かっている。

「何よ？..」

「『弾幕ごっこ』をした時のことなんだけどき——」

（ほら、思った通りの言葉がきた。素直に謝るべき？ でも、謝って——その後は？）

私はこの男とどう接していけばいいの？ 正直あまり親しく接するつもりはない。

どうせ私のことなんか気にも留めずに、元の世界に帰っていくだろう。今までの外来人と同じように（）

「勝負だつてエのに、手エ抜いて悪かった！」

「…………え？」

霊夢はこちらに向かつて軽く頭を下げたナルトを唾然とした表情で見た。

——何故？ 何故ナルトが私に謝っている？

『弾幕ごっこ』の勝負に手を抜いていた。それは私も感じていたことだ。だから腹が立って、いつもみたいな『弾幕ごっこ』をしなかったのも事実。

しかし、手を抜いた理由は私をバカにしていたからではなく、私を怪我させないように配慮したからだということも、冷静な頭になった今なら分かる。

優しさからきた手加減だと分かっている。

なのに、それを否定する。ということは、優しさなど捨てて全力で闘うべきだったと、そう言いたいのか？

それは自分自身を否定するのと同義ではないのか？

霊夢には分からなかった。責められるべきは自分の筈なのに、許しを求められているこの状況が。

その理解不能さが、霊夢をイラつかせる。

「……………なんでアンタが謝るのよ……………素直に言えばいいじゃない！ お前のせいで酷い目にあつたつて！ 危うく別の世界に行かされるところだったつて！ ……なのに、なんでア

ンタが謝るのよ……」

惨めだ。どうしようもなく、惨めだ。

気を使われている。お前は悪くないと、別に気にしてないんだと、そう言外に言われているような気がするのだ。

そう思つて、素直にナルトの言葉を受け入れられない自分に腹が立つ。

下唇を痛いくらいに噛み、両拳を強く握る。

ナルトはそんな私を見て、困つたような笑みを浮かべた。

「なんでつて……オレが霊夢の立場だったら腹立つなつて思つたからだけど」

霊夢は舌打ちをした。

そういうのが、そういう言葉が私を惨めな気持ちにされるのだと、何故分らない！ はつきりと相手の口から言われれば、私は素直に謝れる。私のした過ちを、過ちだつて認められる。

「だから——今度オレと『弾幕ごっこ』をしてくれねエか？ 次は本気で霊夢と勝負する」

「……は……」

「本気で勝負して、今度こそ白黒はつきりつけよう」

熱くなつていた頭が、急速に冷静さを取り戻していく。

それと同時に身体から力が抜けた。

笑いが込み上げてくる。私が思っていたよりも、ナルトは器の大きい人間だった。

それを今まで気付かず、普通の人間ならこう思ってるだろうと勝手に決めつけ、勝手に自分を追い込んでいた道化。

『弾幕ごっこ』で生まれたわだかまりを、『弾幕ごっこ』で解消する。

考えてみれば、これ以上ない仲直りの仕方だろう。

霊夢は勝ち気な笑みを浮かべる。

「いいけど……私には絶対勝てないわよ？」

「勝つきー！ 勝ってみせる！」

ナルトが胸の前でぐっと拳を握りしめ、ニツと笑った。

この人は人を惹き付ける魅力があると、霊夢は感じた。

何故なら、ちよつと前のイライラはいつの間にかどこかにいつてしまつて、霊夢はとも晴れやかな気持ちになつてゐるからだ。

「……ふふつ、面白いえばまだ言つてなかつたわね」

「——え？」

霊夢が目のあるお酒を手を持ち、ナルトの方に向けた。

「幻想郷にようこそ、ナルト！ 歓迎するわ……盛大にね！」

霊夢は笑顔でウインクする。

(あ、オレの名前……)

初めて、霊夢がオレを名前で呼んだ。

たったそれだけなのに、嬉しさが込み上げる。

オレを認めてくれた気がする。

「はいっ、それじゃあみんなお酒持って〜」

萃香が仕切り、全員がお酒を手を持つ。

「異変解決を祝して、それから新しい幻想郷の仲間に、かんぱ〜い！」

「かんぱ〜い！」

全員がそれぞれそう口にし、各々のいれものに入ったお酒を飲み干す。

(忍にとつて、酒はマズいけどなあ)

ナルトは空になったコップを手で弄びながら、ため息をつく。

忍の三禁の中に酒が入っている。

少しくらいなら問題ないが、身体の動きが鈍るくらい飲むのは、忍としてやってはい

けないことだ。

「兄ちゃんのいた世界はどういう世界だったんだい？ おや、なんだいお酒がないじゃ

ないか」

ナルトの傍に勇儀が来て、ナルトのコップにお酒が、勇儀の手により注がれる。

「はっ!? いやいやオレは酒はもう十分だ! なんかジュースとかでいいから!」

「何言ってるんだい? 今ジュースを注いだろ?」

「いや、どう見ても酒——」

「いいから! 騙されたと思って飲んでみな!」

ナルトは渋々コップに口をつけ、飲む。

(酒じゃねエか)

てか、酒めちやめちやつえエ。

何で周りの奴らはこんなグイグイ飲めんだ?

顔が熱くなつていく自覚がある。けど、まだ大丈夫だ。まだ——。

「クスツ、そこのお酒は飲んで、私のお酒が飲めないってことないわよね?」

幽香がナルトの目の前で酒瓶を左右に揺らしながら、悪意のある笑みをしている。

ナルトは酒が苦手だと気付いたらしい。そこを攻めることに、幽香は快感を覚えているようだ。

ナルトは顔に冷や汗を浮かべた。

「ほらっ、さっさと空けて……」

「…………ぐっ」

飲む、コップの酒を飲み干す、幽香から酒が注がれる。

一応オレの歓迎会も兼ねていると、萃香が言っていた。だから断るのは悪いと感じて、飲まざるをえない。

(この酒は、ゆっくり飲もう、ゆっくり)

「あーっ！　ズルいぜお前ら！　ナルト、私のお酒も飲んでくれよ！」

「へっ!?!」

「…………私のお酒は嫌なのか？」

魔理沙が不安気な表情で、ナルトの目を見つめている。

(くっそ…………反則だろこれ)

断ったら、とてつもない罪悪感に襲われそうだ。

仕方なく、コップの酒を一気に飲む。飲み干し、魔理沙から酒が注がれる。

(今度こそ…………今度こそ…………)

「魔理沙の酒が飲めて、私の酒が飲めない…………なんてこと、ないわよね？」

　　霊夢の手に酒瓶。

「…………モチロンデストモ」

宴会が始まってから一時間後。

「ほい！ 多重影分身の術！ そんなでもって変化の術！」

大量のナルトが一齐に水着を着た金髪の美女になる。

『ハーレムの術』つって、これを見たエビスつて先生がさ！ おもつきり鼻血出してぶつ倒れちまつたんだよ！」

ナルトが笑いながらそう言うのと、そこにいた全員が吹き出した。

「あつはつはつはつ！ そりゃこんだけの美女に囲まれたら鼻血も出るさ！」

「そうそう！ それにしてもよくできてるね〜！ 他にもなんか変化できないの？」

「できるぜ！ 変化！」

萃香の言葉に多重影分身を消し、美女の姿のまま変化の術の印を結ぶ。

美女の身体が煙に包まれ、煙が晴れると萃香と全く同じ姿をしたものが立っていた。

「私かい!? へえ〜、面白いもんだ！」

「ナルト、今度私の姿で、旧都の仕事をやってくれないかい？」

「こらっ！」

「冗談だよ冗談！ だからそんな睨むなって」

萃香に睨まれ、勇儀は肩をすくめる。

「わ〜、お兄さん色々できるんだね〜。そう言えば、目の前で消えたことがあったけど、

あれは何？」

フランの問いに、魔理沙が箒を手に持ち柄の部分でフランに向けて、その先に貼られたマーキング札を指差す。

「あれはだなく、ナルトはこのマーキングが入ったところに瞬間移動できるんだぜ！ 私のマスタースパークを見たら、私のとこに来てくれるって約束してたんだ！」

「へえ、その札って他にないのかな？」

「ほうほう！ その話もつと詳しく聞かせてもらえませんか！ いい記事書けそうなので！」

魔理沙は後ろを見る。射名丸がメモ帳に何かを書きながら、目を輝かせている。

「お前には絶対何も話さない！ 札なら、ナルトに言えば貰えると思うぜ！」

「そつかく、あれ？ お姉さまがない？」

フランは辺りを見渡し、レミリアがいなくなっていることに気付く。

「そっかいやあ、霊夢もいないな」

魔理沙も周りを見渡し、霊夢の姿が見えないことに気付いた。



紅魔館、館内のレミリアの部屋。

月明かりしか光源がない部屋で、レミリアが椅子に座り、その正面に霊夢が立っている。

「こんな誰もいないところに呼び出して、何の用？」

レミリアが霊夢に尋ねる。

宴会の最中、霊夢がレミリアに二人きりになれる場所で話したいと言ってきたのだ。

「今回の異変についてよ。魔理沙は、アンタがフランをナルトにけしかけたって言ったわ。それは本当なの？」

「ええ、そうね」

「なら、私はこう考える。今回の異変の原因はナルトだったけど、元凶はアンタだって。

こうなることが分かっててけしかけたんでしょ？ 私の勘がそう言ってるのよ」

霊夢は鋭い眼光を暗い部屋の中で輝かせて、レミリアを見据える。

「……フフフ……」

レミリアから笑い声が漏れた。

「流石は博麗の巫女。いい勘してるわね」

「じゃあ、やっぱり……！」

霊夢は驚きで目を見開いた。

レミリアは不敵な笑みをしている。

「でも、今更あなたが気付こうと、何かをしようと意味ないのよ」

「何ですって……?」

「タイムオーバーなのよ、博麗霊夢! あなたがどう足掻あがこうとも、動きだした運命を止められはしないわ! アハハハハッ!」

「レミリア! アンタ何をしようとしてるの!? 言いなさい!」

霊夢はレミリアの胸ぐらを掴み、物凄い剣幕でレミリアの顔を睨む。

レミリアは悪戯っぽい笑みで、ペロツと舌を出した。

「なぐんてね、全部ウソよ。どう? 今の演技。黒幕つぽかった?」

「……っ!」

音が部屋中に響いた。霊夢がレミリアの頬を思いつきり平手打ちした音だ。

「私はアンタを本当に心配して、話そうと思ったのに」

霊夢はレミリアが自分の想像していた以上の事態になって、内心落ち込んでいるので

はないかと思った。

だから、異変を起こしたことを認めたら、許してあげようと思っていた。

しかし、その気持ちはレミリア自身により打ち砕かれた。

霊夢は怒りに身を任せて、レミリアの部屋を出ていく。

レミリア一人になった部屋。

レミリアは平手打ちされた頬を軽くさする。

「ゴメンね霊夢。全部ウソっていうのがウソなのよ」

もう賽は投げられてしまった。退路は断ってしまったのだ。なら私にできることは、私に課した役割を果たすだけ。

レミリアは寂しそうに、霊夢が去っていった扉の方に視線をやった。

「あなたは……巻き込めない。あなたのこと、結構気に入ってるのよ、私」



霊夢が紅魔館の庭に戻ってきた。

霊夢が見たものは、だらしのない顔をしてビニールシートで寝ているナルトの姿。それを中心に、魔理沙や勇儀や萃香、咲夜、パチュリィ、フラン、美鈴がピースしている。

射名丸がカメラを構えているのを見ると、写真を撮るようだ。

「初潰れ記念らしいわよ」

いつの間にか来ていた紫が、霊夢にそう言った。

なんでもナルトは、今まで酔い潰れたことがないと言っていたようで、それを聞いた

周りの連中が面白がって酒を飲まして、案の定ノックアウトしたと、そういう流れらしい。

「アホくさ……てか紫、髪戻ったのね」

「そうなのよ、必死にブラッシングして、ようやく元の髪に戻すことができたの！もうアフロ紫なんて呼ばせないから！」

紫はぐつとガツポーズした。

「どうやら写真を撮り終わったようで、射名丸が霊夢の方にやってきた。」

「あ、そうだ。今の写真、一枚くれない？」

紫が射名丸に言う。

「いいですけど……一体何に使うんです？」

「ちよつとメツセージを添えて、彼の世界の人に届けてあげようと思つて。この写真を見たら、彼の世界の人は少なくとも危険はないつて思うでしょう」

「危険はないつて思うかもしれないけど、恋人とかいたらどうするのよ？ あの光景は

ちよつとヤバイ気がするんだけど……ナルトが元の世界に帰ったら大喧嘩するんじゃない？」

「だいじょぶ、だいじょぶ！ ここは私を信じて！」

こうして、紅魔館での宴会は終わった。

紅魔館で宴会が行われていた同時刻、天魔は天魔の家で両腕に九尾のチャクラを集中させる。

すると白い煙のようなものが傷口からたちのぼり、傷口がどんどん塞がっていった。「そーいえば、そろそろか」

天魔は天魔の家を出て、天狗の住み処を歩く。

暫く歩くと、ある天狗の家に着いた。

天魔は家の扉をノックする。

「はい？ これは天魔様!? ささっ、どうぞ中に……」

扉を開けた天狗が天魔に一礼して、手を家の中に向けた。

天魔は無言で中に入り、扉が完全に閉められた後、眼前の天狗を見据える。

「二年前から今日まで、あの場所に行かせた天狗はいるか？」

「いいえ、いいえ！ 今から天魔様が行かれるところには、私以外誰も行かせておりませ

ん！」

「そうか」

天魔は天狗の案内を待たずに家の廊下を歩き、左手にある扉を開け、中に入る。そこは書庫のようで、多数の本が置かれていた。

何とか足の踏み場があるような状態の部屋で、天魔はおもむろに本が散乱している床の一部分の本をどかし、床を持ち上げる。

すると、木で造られた床の一枚の木の板が外れ、隠し階段が現れた。

天魔はその階段を下り、洞窟のようになっていた地下を歩き続ける。

少し歩くと扉があつた。その扉を天魔は開け、中に入る。

その扉の先は上と同じく様々な本が大量に置いてあつた。

漫画や小説、学術書にビジネス書等がところ狭しと積みあがっている。

だが、上と違う点が一つあつた。

「おお、よく来たなあ大天狗」

黒い翼の生えた女性。白い衣を羽織り、長くてまつすぐな黒髪を床につけて、寝転がりながら本を読んでいる。

女の天狗がこの部屋で暮らしているのだ。

しかし、今天魔を彼女は大天狗と言った。ここに大天狗がいたら激怒しているだろう。

天魔は気分を害した様子はなく、むしろその場でひざまず跪く。

「お久しぶりです、天魔様」

「うむ、それにしてももう二年経ったのか。時の流れは速いのう。どうだ？ 幻想郷は変わらないか？」

「はい、天魔様がおられた頃と、寸分も変わらず」

女の天魔は起き上がって床に胡座をかく。

「大天狗よ、わらわの気紛れに付き合わせて悪いのう」

女の天魔は、天狗たちを驚かそうと大天狗と一部の天狗たちに協力してもらい、三十年前からこの場所で暮らしていた。

「外で暮らす」と書いた書き置きも、大天狗に天魔を任せると書いたのも、全てはこの女天魔が企てたことだ。

数ヶ月姿を眩ましたことはあれど、さすがにこれだけ長い期間姿を眩ましたことはい。い。

きつと姿を現したら、天狗たちは大層驚くだろう。その顔を想像するだけで、愉快な気分になる。

「それにしても大天狗……お主、変わった力を感じるぞ。幻想郷で、本当は何か起きているのではないか？」

女天魔は、跪く天魔を探るような目で見る。

天魔は女天魔の視線を真っ向から受け止め、首を横に振った。

「天魔様が気になさるようなことは何も——」

「……ウソだな。わらわを見くびるでない。この場所にも飽きたし、もう十分な時間が過ぎた。わらわはそろそろ外に出る」

女天魔は立ち上がり、部屋から出ていこうと歩きだす。

「それはなりません」

その行く先を、天魔が立って遮る。

「……何？」

「今、あなたに戻られては私が困るのですよ」

天魔の圧力を伴った瞳に、女天魔は数歩後ずさる。

敵意だ。明らかな敵意が、女天魔に向けられている。

ここで女天魔は気付く。気付いてしまった。そして、自分はまだかたがたに迂闊なことをやってしまったと悟る。

「貴様……天魔わらわに成り代わるつもりか!？」

女天魔から、莫大な妖力が迸る。

右手を眼前の天魔に向け、妖力を掌に集中。

「縛ッ！」

天魔が創った、九尾のチャクラを混ぜ合わせた妖力の縄が女天魔を拘束する。自由を奪われた女天魔はそのまま床に倒れた。

「バカな……貴様がわらわの力を上回る筈が……」

「あなたはそこで大人しくして下さい。私が天狗を指揮し、幻想郷にいる全ての妖怪たちを支配してみせます」

「愚かな……妖怪同士で殺し合う時代は終わったのだ！ 何故それに気付かん！ そんな未来に先はない！」

天魔は動けず床に這いつくばる女天魔を見る。

その目は確かな野望に燃えていた。

「あなたはそこで見届けるがいい。天狗が頂点に立ち、天魔であるこの俺が、幻想郷を支配するところを」

天魔は振り返り、扉に手をかける。

この扉は防音性が高く、閉めてしまえばこの部屋でどれだけ騒ごうとも音が外に漏れることはない。

「さようなら……元天魔」

「待つ——」

天魔は扉を閉め、歩きだす。扉の方は一切振り向かない。

上に出て、床と本を元通りにする。

書庫を出て、この家に住む天狗の元に行く。

「これは天魔様、どうでした？」

「外に出ようとしたから、身動きとれなくした」

天狗はそれを聞いても動じない。むしろ少し喜んでいるようにも見える。

「これからは、真正正銘の天魔様ですね！」

この天狗は天魔の真実を知っていて、この天魔に心酔している天狗であった。

天魔は天狗の胸ぐらを掴み、引き寄せた。

「貴様に言っておく。これまで通り、あの方にはしつかり食事を摂らせろ。

もし、あの方を殺したり、何か粗相をしたら、貴様を殺すからな」

天狗は無言で何度も頷いた。

それを見て、突き飛ばすように天狗を離し、天狗の家から出ていく。

——必ず、必ず俺が幻想郷を手に入れる。

その野望を胸に秘め、天魔は天魔の家へと帰っていった。

第2章 望んだ運命〈Monster of dark

ness〉

情報〈Information full of do
ubt〉

火の国木の葉隠れの里。この里では今、緊急警備態勢を敷いている。

額宛をした忍たちが屋根を跳び回り、里内の街道をいくつかのチームで見回り、里周
辺にも多数の忍たちが異常がないか目を光らしている。

数日前、正確にはうずまきナルトが行方不明となった時から、この警備態勢は続いて
いる。

いつものように屋根を跳び回り、高いところから里を警備していた忍は、火影の家を
視界に入れて首を傾げた。

火影の家には、火の文字が大きく書かれている。その火の文字が、何かに遮られてい
たからだ。

忍は不審に思い、火の文字のところまで近付く。

そこには封筒が貼り付けられていた。透明なテープを十字にして、風で飛んでいかないうようにしっかり固定されている。

その封筒の表面には、『この場所で一番偉い人に』と書かれていた。

忍は封筒を火の文字から剥がし、裏面を見る。

そこにあった文字は、『うずまきナルトを連れ去った者より』。

忍は慌てて地面へと飛び下り、火影の家へと入っていった。

その出来事から一時間後。

奈良シカマルと春野サクラは火影の家に呼び出されていた。二人の正面には六代目火影、はたけカカシが執務机を前に座っていて、そのすぐ隣には五代目火影を務めた綱手が立っている。

「……ナルトの情報が入ったって聞いたんすけど。里の連中も騒いでるし」
「彼には黙っててくれって言ったんだけどねエ」

カカシは呆れたように、軽く息をついた。

どうやら封筒をカカシに届けた忍は、自身がうずまきナルトの手掛かりを手に入れたことに対してかなり喜び、その喜びを自制できずに里の人に口を滑らしてしまっただけ

い。

里の人が、どれだけその情報を求めていたか知っているからこそ、口も軽くなつてしまつたのだろう。

「——つてことは、本当なんですか?!」で、敵からの要求は?」

サクラが執務机に両手をつき、カカシに詰め寄る。

ナルトは里に現れていない。ということは、ナルトを連れ去つた相手はナルトを返したわけではなく、ナルトを使った取引を持ち掛けてきたのだろうとサクラは予想した。シカマルもそう考えているようで、カカシの言葉を聞きのがすまいと強張つた面持ちをしていた。

カカシは隣に立つ綱手と視線を交わす。

その二人の煮え切らない態度が、サクラとシカマルの表情を余計に硬くさせる。

それだけで敵からの手掛かりがあまり良くない内容だと察することができたからだ。「要求はないよ。いや、あるといえればあるかもしれないが」

「どつちなんです?」

「ま、話すより見るほうが早いな」

カカシは執務机の上に封筒を置いた。火の文字の部分に貼られていた封筒だ。

それをサクラが手に取り、執務机の上に封筒の中身を並べる。

封筒の中身は、一枚ずつの写真と手紙だった。

まずは、一枚の写真。そこには、寝ているナルトの周囲にたくさん女の子がピースしている光景が写し出されている。

次に、一枚の手紙。そこに書かれている内容は、『一ヶ月後から二ヶ月後の間に、うずまきナルトはお返しするってばYO！ 安心して大人しく待っててほしいってばYO！』だった。

サクラとシカマルは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「何です、これ？」

「ま、そういう反応だろうね。俺も初めに見た時はそういう顔になった。

で、お前たちを呼んだ理由は、お前たちはナルトが連れ去られた瞬間まで傍にいたからだ。

その写真や手紙には不自然な点がいくつもある」

「そういうことっすか……」

シカマルは合点がいったように頷く。

サクラは二人のやり取りについていけず、困惑した表情になる。

「二人だけで話してないで、教えてよ」

「つたく、しょうがねえな。まず、この写真に写ってるナルト。これが一番おかしい」

シカマルが写真に写ってるナルトを指差す。

「確かにナルトは敵に捕まってるのに、こんなに油断しきってるのはおかしいわね」
「ちげえよ。問題なのはナルトの服だ」

そうシカマルに言われて、サクラは何を言いたいか理解した。

ナルトの服が綺麗すぎるのだ。まるで新品の服を着ているように。

ナルトが連れ去られた時、ナルトの服は汚くはなかったが、それでも少し汚れが滲んでいる箇所があった。

それが、この写真に写っているナルトの服にはない。

「つてことは……このナルトは偽者？ 変化の術でナルトに化けてるってこと？」

「やっぱりそうだったかい」

綱手とカカシも、写真を見た時から同じ結論に達していた。

その結論に確信を持たせるために、ナルトと最後までいたサクラとシカマルが呼ばれたのだ。

綱手は拳を震わせている。

綱手からすれば、ナルトを使ってこつちをおちよくっている感じがするのだろう。

「けどねサクラ、これを偽者だと仮定すると納得できない点が幾つも出てくるんだよ」

まず、何故こんなにバレやすい変化をしたのか。

変化の術で、服の汚れも真似ればいい筈なのに、それを怠っている。変化の術でただナルトに化ければ騙せるなどと、下忍でも考えない甘い考えを敵はしているのか。

むしろ、まるで気付いてくれと言わんばかりのあからさまさだ。

次に、何故わざわざ寝ているところを撮ったのか。

写真を見る限り、変化をした術者は間違いなく寝ている。

普通に起きているところを撮ればいいんじゃないだろうか。

安全だということ伝えていたのだとしても、それは起きた状態でも伝えられる。

その次に、周りを女の子で囲ませる理由。

一体何がしたいのか分からない。

それも翼や角がある女の子までいる。これは一体何を意味しているのだ？

ヒナタとナルトを仲違いさせるのが、この写真を送った理由なのか。

そして、手紙。

こつちはハツキリ言つて写真より意味が分からない。

何故、返す期間をわざわざ伝える？

いや、それは百歩譲つていいとしても、大人しく待つていうのが意味不明だ。

何か敵の手掛かりを少しでも掴んでいて、敵にとって都合が悪かったのなら、理解で

きる。

だが、カカシもシカマルも誰一人、今日までナルトを連れ去った相手の情報を、何一つ手に入れられなかった。

敵からすれば、こつちがどれだけ忙しく動いていようが、何の脅威も危険もない。その筈だ。なのに、大人しくしていると言う。まるでこつちを案じているように。向こうがナルトを拐さらったくせに。

「この一ヶ月から二ヶ月って期間はなんだと、シカマルは考える？」

「最悪なケースを考えるなら、ナルトから尾獣を抜くのに必要な時間がそれくらいかかるってことつすね。

まあ一方的に相手が言ってきたことなんで、この期間自体が俺らの動きを鈍らせる畏おそって可能性もある。

なににせよ、あんま信用しない方が良さそうつす」
「うむ、それは同感だな」

綱手が力強く頷いた。

そして、語尾の『つてばYO!』。

もう、絶対敵は遊んでる。木の葉の里をおちよくつて、陰で笑っている。

そもそも、ナルトのあれは別にラップ調を意識しているわけではない。

「ま、一番の問題は敵から送られた封筒の内容じゃないんだけど」

カカシが真剣な表情で呟く。

その言葉には、サクラもシカマルも心から同意した。

今、木の葉の里、いや、他里も緊急警備態勢を敷き、ナルトの搜索と敵からの再襲撃に備えている。

木の葉の里内の感知結界も最大限まで感度を高め、多数の忍が目を光らせている。にも関わらず、火影の家の火の文字の部分という目立つ場所に、敵は忍たちの目を掻い潜り、封筒を貼ってみせたのだ。

つまり、どれだけこちらが警戒を高めようが無駄だという事実。

これが何よりも問題だ。敵の襲撃に対して、事前に対処することが極めて困難である
と、今回の事で思い知らされたのだ。

「そこで私たちは、緊急警備態勢を解除する結論に達した。

そのかわり、常に三人一組スリーマンセルでの行動を徹底させる。

チームメイトには常時注意を払い、お互いの身を護衛し合う」

事前に対処できないなら、事後に素早く対処する方向に即切り替える。

木の葉の里の現火影と前火影の判断は、とてつもなく速かった。

写輪眼や白眼のように強力な、新しい特異体質の出現。

サクラの、ナルトを連れ去った空間の中に、無数の目が浮かんでいたという情報により、ナルトの世界の全員がこの懸念を抱いていた。

第四次忍界大戦の根幹に、万華鏡写輪眼による『月の眼計画』があり、そのせいで眼というものに対して、ナルトの世界の住人は敏感になってしまっている。

全員が固い面持ちで話し合っている中、ドタドタと廊下を走る音が、全員の耳に飛び込んできた。

慌ただしく扉が開けられ、長い黒髪をした女性が切羽詰まった表情で入ってくる。

「ナルトくんの情報が入ったって本当ですか!？」

「ヒナタ!？」

サクラが驚きの声を上げる。

ヒナタは執務机の上に置いてある一枚の写真に気付き、それを手にとって写真を確認した後——気を失ってそのまま真後ろに倒れた。

「おいヒナタ! しっかりしろ!」

「誰か! 医療忍者呼んできて!」

「落ち着きなサクラ! お前が医療忍者だろうが!」

「そうだった!」

とりあえずサクラは、落ち着ける場所にヒナタを移動させようとヒナタをおんぶし

て、火影の部屋を出ていく。

サクラは、ヒナタを火影の家にある使っていない部屋のソファーにゆっくり寝かせる。

その時の微かな衝撃の影響か、ヒナタは静かに目を開けた。

「あ、起こしちゃった？」

「大丈夫、ちよつとビックリしちゃったただけだから」

ヒナタはサクラを見て微笑む。

その笑顔を直視して、サクラは痛々しい気持ちになった。

「ナルトを拐った奴も酷いことするよね。ナルトに化けてあんな写真撮るなんてさ」

「サクラさん、あのナルトくんはナルトくんだよ。ナルトくんが下忍の時に、何度か見た

ことある寝顔だもん」

「えっ!？」

あの写真のナルトが本物なら、ヒナタ的にあの周りにいた女の子たちはどうなのだろうか。

サクラは悪いと思いつつも好奇心に勝てず、ヒナタに訊いた。

「あく……ヒナタはあの写真どう思ってるの？」

「ちよつとだけ……嫉妬しちゃうかな。ナルトくんが少しだけかもしかもしれないけど、昔のナルトくんに戻ってる気がするの」

サクラは顔を伏せる。

ナルトはいつからか、任務を多くこなすようになり、任務がない時は何かにとり憑かれたように修行に明け暮れていた。

しかし、張り詰めた糸が切れやすいように、削り過ぎた鉛筆の芯が折れやすいように、ナルトはいつ倒れてもおかしくない状態だった。

「私ね……このままだとナルトくんが壊れちゃうかもって不安だったんだ。でも、何言ってもナルトくんは笑って心配いらなくて言うの」

ナルトのことをずっと昔から見えてないと、ただ修行熱心だとしか思わないだろう。

だが、昔からナルトを知っている人間からすれば異常だった。

昔も、ナルトは修行をよくやっていたのは知っている。

問題なのは、何かに追い詰められているかのように、修行内容が過酷だったこと。

一刻も早く強くならなければという意志を、修行中のナルトから感じた。

サクラがあまり無理しないようにと言っても、へーきへーき大丈夫だってと笑って、修行を止めない。

「ナルトくんね、私のことしつかり見てくれないの。約束とかしたり、プレゼントとかは

貰えるんだけど、デートしてもどこか上の空で、何かを考え込んでるみたいだった。

私にできたのは、ただナルトくんの隣にいて、ナルトくんが壊れないようにって願いながら、笑ってナルトくんに接することだけ。

だから——この女の子たちが私にできなかったことを、ナルトくんにしてくれたんだって思ったら、悔しくなっちゃって。本当は私がしてあげたかったのに」

「えっ、そういう嫉妬!? ナルトが、あの女の子たちの内の誰かに取られちゃうかもとか考えないの?」

サクラが驚きで目を見開く。

ヒナタは笑って頷いた。

「だって、ナルトくんが約束してくれたから。絶対に私のところに帰ってくるって。私はナルトくんを信じてるもの。ナルトくんが約束を破ったことなんて、今まで一回もないんだよ」

強いていえば、ナルトと付き合って一年の記念日にデートするという約束を破られたが、それはナルトではなく他の誰かのせいだ。ナルトは精一杯その約束を守ろうとしてくれた。

「ヒナタは本当に良い子だね。こんな良い子をほったらかして、ナルトの奴は!」

……うん! ヒナタのこと、見た感じ大丈夫そうだから、私はカカシ先生のとこに戻

るね」

「うん。ここまで運んでくれてありがとう」

「いいのよ別に、気にしないで。それじゃあね」

サクラは部屋から出ていき、扉を閉めた。

一人になった部屋で、ヒナタは両膝の上で両拳を握りしめる。

「……大丈夫だよ、ナルトくん。信じて——いいんだよ。でも、怖い……怖いよ、ナルトくん。」

もしかしたら、もう二度とナルトくんには会えないかもしれない。それが怖いよ……」

ヒナタは堪えきれずに両手で顔を覆い、声を殺して泣いた。

そんなヒナタの言葉を、扉に身体をもたれさせながら、サクラが聞いていた。

サクラは扉から離れ、火影の部屋に向けて歩きだす。

いつもヒナタは、弱気なところを誰にも見せなかった。

でもきつとヒナタは、毎晩誰もいないところで泣いているのだろう。

「ナルト……絶対に帰ってきなさいよ」

もし、私をもっとしつかりしていたら、ナルトが連れ去られることなんてなかったかもしれない。

そんな後悔に胸が押し潰されそうになるけど、今それを考えても仕方ない。

「あんたが帰ってくるのを、みんな待ってるんだから」

ヒナタだけではない。誰もがそれを望んでいる。

この世界に住む誰もが、ナルトが行方不明になったことにショックを受けているのだ。

だから、早く戻ってきて安心させてほしい。

帰ってこないなんて許さない。

ナルトの世界は、紫の気紛れで大混乱に陥っていた。

自惚れ〜Tomorrow invisible〜

スキマの中で、紫はにやりと微笑した。

「完璧すぎるでしょ、わたし……いー」

自分のしたことは、非の打ち所がない完璧さだったと、紫は自信を持って言えた。

まずは封筒を貼った場所。

完璧だ。絶対に気付く目立つ場所。あそこに貼れば、早くて数分、遅くても数時間で相手の手に渡るだろう。

次に写真。

完璧だ。誰が見ても危険なんて考えない。周囲でピースしてる女の子たちも、それを裏付ける良いアクセントになっている。

最後に手紙。

完璧すぎる。もしかして、わたしには文才というものがあつたのではないだろうか。

まずナルトを返す具体的な期間を明示することで、こちら側はナルトを返す意思があると伝える。うん、スマートすぎる。

そして、相手がそれまで落ち着いて安心して暮らせるよう、一言相手を気遣う言葉を

入れる。これで相手はわたしに好印象を抱くだろう。この配慮がわたし的に完璧だわ。最後の締めめに、ナルトの口癖の模倣。これをする事で、相手に自分はナルトと親しい仲だと、暗に示せる。

相手はもうわたしを敵とは思えないだろう。ホームステイ先の家族みたいな印象に変わっている筈だ。

完璧。完璧な流れにして散りばめられた技の数々。これを文才といわず何というのか。

もうナルトの世界を見る必要もない。いや、見るまでもない。

あとは期間内までナルトを幻想郷で暮らさせて、幻想郷にどんな変化があるのか見守って、最後にナルトを彼の世界に返せばいい。

それにしても――。

「良いことした後って、気持ちいいわね〜」

紫はぐくと伸びをした。

紫がナルトの世界の人々に、姿を一切見せないのには理由がある。

面倒な事になるからだ。

姿を見せて、万が一相手が紫を捕まえる何かしらの術すくを持っていたら、ゲームオーバー。

そこから先は拷問か解剖か実験体か、いずれにせよ考えたくもない未来が待っている。

ならば、紫はリスクを一切冒す気はない。別に姿を見せなくても、事を為せる。

それに、拐った相手の姿を見て相手が何かを知れば、更に動きが活発化するだろう。霧のように相手に実体を掴ませない方が、相手の戦意を削ぐのに都合がいい。

「それじゃあ、彼に元の世界はもう気にしなくていいって伝えてきましようか」
スキマの空間に割れ目が生まれ、紫はその中に消えていった。



紅魔館のナルトに割り当てられた部屋のベッドの上、ナルトはぐったりしていた。

「頭いてエ……気持ちわりイ……」

これが二日酔いか。成る程、忍の三禁に入るわけだ。こんな状態で任務なんてやる気が起きないし、そもそも速く身体を動かせない。

もう二度と酒を浴びるほど飲まないと、ナルトは心に決めた。

ナルトは自身の姿を軽く見て、変化の術が解けていないのを確認すると、一つ頷いた。

(こんな状態でもしっかり変化できてんじゃん。オレも成長したな)

以前なら、無意識下での変化の術の維持などできなかった。これもチャクラコントロールを極めたからこそできるようになった芸当だ。

「ナルトく生きてるか」

ナルトの部屋の扉を勢いよく開け、魔理沙が入ってきた。

その時の音がナルトの頭を刺激し、頭痛が更に痛みを増した。

「イテテテテ、もう少し静かに来てくれよ」

「あつはつはつはつ！ 大丈夫そうだな！」

「どこが!? ……つつう」

反射的にツツコんだナルトは、頭に響く痛みに顔をしかめる。

「ツラそうだな。でももう安心！ 困った時にヒーローが来るのはお約束だぜ！ 萃香

先生、お願いします！」

「うんうん、私に任せておけば万事解決さ」

魔理沙の後ろから、萃香が酒を飲みながら現れた。

フラフラとした足取りで、ナルトが寝ているベッドの横に立つ。

「ただの酔っ払いじゃねエか。お前も寝てろよ」

「ふふん、私は好きで酔っ払ってんだよ。ナルトみたいに酒に吞まれてるわけじゃあない」

「魔理沙、萃香は何を言ってるんだ？ 現在進行形で酒に吞まれてるよな？」

グビグビと酒を飲む萃香を横目に、ナルトは魔理沙に視線を送る。

「こう見えて、やる時はやる奴なんだぜ」

「そうそう」

萃香がナルトの身体に手を置く。

「いきなり何すんだっ——あれ？ 頭痛くねエ、吐き気もしねエ……な、なんだ？ 萃香、お前何したんだ？」

萃香は得意気な表情で胸を張り、両手を横腹に置く。

「ナルトの身体の中にあつた酒気を散らしたんだよ。スゴいだろ〜」

「散らす？」

「萃香はありとあらゆるものを集めたり散らす能力をもってるんだ。身体を巨大化させたり、逆に霧状にしたりとか、色々反則的な能力だぜ」

萃香の能力は、使い方次第では疑似ブラックホールの生成もできる、使い手の発想で化ける能力だ。

「そうか、サンキューな萃香。一気に楽になった」

「ま、無理やり飲ませちゃったからねえ、そのお詫びみたいなもんだよ」

ナルトはベッドから起き上がり、冷蔵庫から水をとってコップに注ぎ、一息で飲み干

す。

「ふう……これからどうすつか。できりや、オレの世界のみんなに無事ってことだけでも伝えてエけど」

「安心して、わたしがバッチリ伝えといたわ」

ナルトの目の前の空間が割れた。

そこからガッツポーズをした紫が、ひよこつと顔を出す。

「つてことは、オレの世界の連中は、オレが無事だつて知つてんのか？」

「ええ、間違いなく知ってるわ。わたしが完璧すぎる伝え方をしたからね。」

でもその内容の中に、ナルトはあと一ヶ月から二ヶ月の間に返すっていうのを勝手に決めちゃったの。

つまり、ナルトは最低でもあと一ヶ月くらい幻想郷にいてほしいんだけど……いい？」

「ちゃんと伝えてくれたんなら、いいぜ。オレも気になることがあつたからな」

「なんだその気になることつて？」

魔理沙がナルトの方に近付き、訊いた。

「ほら、幻想郷中に九尾のチャクラが漏れただろ？ だからさ、少し幻想郷を見て回ってエと思うんだ。何か問題はねエかって」

幻想郷の世界に漏れた九尾のチャクラは、未だにそのままだ。

妖怪が取り込んだ九尾のチャクラも消えていない。

ナルトは幻想郷を見て回って、九尾のチャクラを誰がもっているか、害はないかを調べてみたかった。

ナルトは悪意と呼ばれるものに敏感に反応できるため、会えば悪者かどうか分かる。

「幻想郷に迷惑かけちゃったから、見て回るついでに謝りてエシな」

「わ、私も付いてっつていいかな？」

「別にいいぜ。幻想郷に詳しい魔理沙がいてくれた方が、オレも心強いからな」

「決まりだな。これからもよろしく頼むぜ！」

「ああ」

ナルトと魔理沙は軽く拳を合わせる。

ナルトは部屋を出て、レミアアの部屋に向かう。その後ろを魔理沙、萃香、紫が付いていく。

「そーいやあ、霊夢とか勇儀はまだ紅魔館にいるのか？」

「勇儀は旧都に帰ったよ。霊夢は紅魔館にいるけど……」

「ナルト……霊夢はな、頑張ったんだよ。私たちにできるのは、霊夢を休ませてやることだけなんだ」

萃香が身体を震わせながら顔を背け、魔理沙の両目は涙で滲んでいた。

「魔理沙、目薬見えてるぞ」

「えっ、マジで!？」

ナルトは魔理沙が隠した目薬を見逃さなかった。

というか、そんな演出をして何か意味あるのか？ とナルトは疑問に思ったが、魔理沙は人をからかったりするのが好きらしいというのは薄々気付いていたため、イラツとはこなかった。

「今霊夢は全身筋肉痛で、礫にされているように、ベッドで大の字になって寝てるわ。

多分今霊夢を見に行ったら、マジギレするでしょうね。あの子ムダにプライド高いから、無様にベッドでダウンしてる姿なんか人に見られたくないでしょうし」

紫がやれやれという感じに肩をすくめる。

「萃香、霊夢の痛みを散らしたりはできねエのか？」

「あー、どうだろ？ まあ、できてもやらないけどねえ」

「何でだ？ 霊夢と仲わりいのか？」

「いや、わたしは仲いいと思ってるよ。ただ、今の霊夢はなかなか見れないよ。この機会に見とくべきだと思うねえ。」

さつきチラッと見たんだけどさ、『筋肉痛！ 筋肉痛ナメてた！ イタタタタ、もう絶

対筋トレしない！ してたまるかあああああ！』って、ずっと言ってるんだよ！もう部屋の外で大爆笑しちやつてさ、普段とのあまりのギャップに」

「さつき身体震わしてたのは、笑いを堪えてたのかよ。

お前らけつこう容赦ねエっていうか、仲いい奴にもわりとヒドいことするよな？」ナルトは魔理沙と紫の喧嘩を思いだしていた。あれも結構容赦のない闘いだつた。

「そんなことない。一種のコミュニケーションみたいなものだぜ。なあ、紫？」

「ええ、そうね。ところで魔理沙、今度そのコミュニケーションをしない？ 別に殺さないから、心配しないでいいわよ」

魔理沙の顔が青ざめる。

魔理沙が思っている以上に、紫は魔理沙のしたことを根にもっているらしい。

「遠慮しておくぜ。お前とのコミュニケーションは十分とれてるからな」

「何を言ってるのかしら？ わたしはあなたの頭をアフロにさえできれば満足なのよ」
「絶対イヤだああああ！」

魔理沙が館内にもかかわらず箒に跨がり、低空飛行で紅魔館の廊下を移動する。

その途中に窓を見つけた魔理沙は、窓の方に方向転換しつつ、ミニ八卦炉に魔力を集中させ、極細のマスタースパークで、窓ガラスを円形に切り抜く。

そうしてできた窓の円の中に魔理沙は飛び込み、外へと消えていった。

「いやいやいや、これはウソじゃないんだ！　これだけは本当なんだ、信じてくれ！」
「魔理沙、一つ言っておくけど、幻想郷にアフロはいないのよ」

咲夜は人差し指を立てて、諭すように魔理沙に言う。

「いたもん……アフロが、ホントに……ホントにアフロがいたんだあああ！」

恋符『マスタースパーク』！

魔理沙は涙目になりながら、正面にマスタースパークを放ち、正面のナイフを全て吹き飛ばした。

そうしてできた逃げ道を、魔理沙は疾走。ナイフからの包囲を抜けた。

「ツ！……まだまだツ！　奇術『エターナルミーク』！」

魔理沙に多数の光弾が襲いかかる。

「当たるわけにはいかない！　私には、護りたいものがあるんだ！」

魔理沙が宙を舞い、鮮やかにかわす。

ナルトはその光景を見て、目を丸くしていた。

「何ですぐこういう展開になるんだ……」

萃香はナルトの横で身体を震わしている。

「何楽しそうなことやってるんだ！　私も入れろー！」

萃香は勢いよく窓に飛び込み、窓ガラスを割りながら外に出る。

何で魔理沙が出ていった、窓ガラスのない部分から出ていけないんだよとナルトは思ったが、深く考えないことにした。

「つたく、しようがねエな。紫、こういう時はどうやって止めて——いねエし」

ナルトは紫がいた方に顔を向けたが、紫の姿は跡形もなく消えていた。

「魔理沙、随分好き勝手言ってくれたわね。あなたはもうアフロすら生ぬるい！ モヒカンにしてあげるわ！」

「お前はいい加減にしろ！ いいぜ、こい……こいよ紫！ スキマなんか捨ててかかってこい！」

「いい度胸ね。言っとくけど、前みたいにはいかないわよ」

「私も前とは違うぜ！ それに、今の私には護るべきものがある！ 勝負だ紫！」

魔理沙と紫が互いにスペルカードを取り出し、紅魔館の庭が様々な弾幕で埋め尽くされる。

その二人の勝負に、途中から咲夜と萃香が参戦し、紅魔館の庭は、爆発音と閃光が絶えない戦場に早変わりした。

「ええ……」

ナルトは目の前の光景に絶句していた。

なにこれ？ なにこれ……。

さつきまで普通に会話をしていた。これは間違いない。なのに、何故今こうなつている？

そして、何故誰も止めようとしらない？ むしろ水を得た魚のように、生き生きと戦闘の渦中に飛び込んでいく。

『九喇嘛……オレ、幻想郷でやってけんのかなあ』

《お前次第だろうよ。まあ頑張れや》

これから一ヶ月過ぐすと決めた初日から、先行きが不安になったナルトであった。

勉強～Time of hell～

ナルトは、途中で魔理沙たちが紅魔館の庭で暴れるアクシデントがありながらも、予定通りレミリアの部屋にいった。

ナルトの他には、息を切らした魔理沙、萃香、紫、咲夜がいる。

ナルトも驚いたのだが、ナルトが彼女らに一言「じゃあ、オレってばレミリアんとこ行つてくつから！」と声を張り上げて伝えたところ、紅魔館の庭で好き放題暴れまわっていた四人はピタリと争うのを止め、ナルトの側に帰ってきた。

要するに、彼女らが争うのに深い意味なんてないんだとナルトは悟った。

スペルカードを取りだし闘うのは、自分の世界でいうところの挨拶に近い感覚であり、遊びなのだろう。

だからといって、庭を台無しにしたのを許すほど、レミリアは甘くない。

レミリアはナルトに付いてきた四人を冷めた目で見ると、一言だけ口を開いた。

「あなたたちは、庭を元に戻してから来なさい」

魔理沙たちはがっくりとうなだれて、とほとほとレミリアの部屋から去っていった。

今回ばかりはレミリアが正しいため、誰も反論しなかった。

「——で、何の用？」

椅子に座っているレミリアの視線が、ナルトに向く。明らかに不機嫌そうな表情だった。

ナルトは苦笑する。

「機嫌悪そうだな」

「別に。もうそろそろ寝ようかなーってベッドに寝転がったところで、激しい爆発音が聞こえてきて、それに驚いて目が冴えちゃったことなんて、私は全然気にしてないわ」
いや、気にしてんじやねエかとナルトは思ったが、そこを指摘すると面倒なことになるのは火を見るより明らかだったため、触れないようにした。

「幻想郷を見て回りてエって思ってたな。レミリアには世話になったから、礼を言いにきたんだ」

「まるで紅魔館を離れるみたいな言い方ね」

「紫は最低でも一ヶ月は幻想郷にいてほしいって言ってた。何の礼もできねエのに、あと一ヶ月も世話になるのは心苦しい。」

紅魔館を出た後は、人里でどうすれば金が稼げるか訊いて、人里にある宿を一ヶ月間借りたいと思ってる。宿あるかどうか知らねエけど」

「私は別にあなたの滞在が迷惑なんて思っていないわ。」

それに、今あなたは何の礼もできないと言ったけれど、とんでもない。あなたはパチエを治してくれた。

それだけで、あなたは一ヶ月どころか一生紅魔館にいてもいいくらいの礼をしてくれたのよ。

パチエの友人として、あなたをしつかりもてなさない、私の気が収まらない」

「……………」

「な～んか、不満そうね？」

パチユリーの喘息は、永遠亭に住む凄腕薬師、八意永琳でも治せなかった。

それはつまり、幻想郷の誰もパチユリーを治せる者はいないということ。

だからこそ、ナルトがパチユリーを治してくれたことに対して、レミリアは感謝の念に堪えない。

だが、レミリアの言葉を聞いて、ナルトは苦い顔をしている。

レミリアには、それが理解できない。

何故、大いに感謝してしつかりもてなしたいと言っているのに、少しも嬉しそうな顔をしない？

「オレは別に礼が欲しくてパチユリーを治したわけじゃねえからな。それに、パチユリーを治した礼がしてエってんなら、九尾の再封印を手伝ってくれたことが、オレに

とつちや礼みてエなもんだ」

「あなたを手伝ったのは、あなたの封印が壊れた原因に、私たちも関わっていたからよ。礼より償いの意味の方が強いわ」

「それでも、レミリアたちが協力してくれなかったら、今でも封印できずに幻想郷を走り回ってると思う。

だから、それでパチュリーの場合はチャラだ」

成る程、とレミリアは一度頷いた。

ナルトは貸し借り無しの対等な関係を、レミリアたちに望んでいる。なら、話は簡単だ。

レミリアは唇の端を吊り上げる。

「あなたの言い分は分かったわ。なら、あなたを友人として紅魔館に招き入れるというのはどうかしら？」

勿論、何かあなたにしてほしいことがあれば、あなたにじゃんじゃん協力してもらおうわ」

ナルトは驚いた。

そして、観念したように笑った。

「こりゃあ、一本とられたな」

礼ではない。

友人をただ住まわせたいと言っているだけだ。何かあれば、遠慮無しに力を借りるとも言っている。

上下関係のない、ナルトの望む形。

上手い、と思った。

言葉遊びかもしれないが、しっかりとこちらの意見を聞き入れ、その上で自分の意見を通す。

ナルトとて、紅魔館が嫌いだから出ていきたくないわけではない。むしろ幻想郷にいて、紅魔館に滞在できた方が都合が良い。

不満だったのは、自分が紅魔館の面々に対して何も返せないことだった。それが解消できるなら、ナルトとしては何も問題ない。

それに、ここでレミリアの申し出を断るのは、それはそれで失礼な気がする。

そういうのも全て見通して、レミリアは言ったのだろう。レミリアの方が、ナルトより一枚上手だったのだ。

「決まりね。一つ訊きたいんだけど、あなたは幻想郷のことをどれくらい分かってるの？」

「魔理沙から色々教えてもらったけど、大まかなことしか分かんねエ」

「なら、幻想郷を巡る前に、幻想郷についてしっかり勉強していきなさい。今ならパチエが大図書館にいると思うから、パチエに頼んできて」

ナルトは勉強と聞いて、露骨に嫌そうな顔をした。

元来、彼は頭を使うより身体を使うほうが性に合っている。

レミリアはジト目になり、

「……勉強やらないなら、お昼ご飯抜きね」

「分かったよ、やるよ、やりやあいんだろ」

さすがに昼飯抜きはナルトでもこたえるようで、やけくそ混じりに言った。

「じゃあ、パチエよろしくね」

「おう」

その会話を最後に、ナルトはレミリアの部屋を出た。



「ふーん、なるほどね」

事情を聞いたパチュリーは、読んでいた本を閉じた。

「……もしかして、今マズかったか？ なら、しょうがねエな！」

言葉とは裏腹に、ナルトは嬉しそうな顔をした。

「いえ、全然。喜んでその役目、引き受けるわ。こあ、幻想郷について書かれてる本持ってきて！」

「はい、パチュリー様！」

目の前の机に、こあがどんどん本を積み上げていく。

ナルトはその本の多さに目眩がしそうになった。

パチュリーは何処に用意していたのか、眼鏡をかける。

パチュリーは形から入るタイプなんだなど、ナルトは現実逃避をするように思った。

「——さて、準備も整ったし、勉強始めるわよ」

「いや、準備整うの早すぎだろ!? まだ五分も経つてねエぞー！」

「善は急げっていうしね。はい、席に着く！これからパチュリー先生の授業を始めるんだから！」

「……うへえ」

ナルトはため息をついた。

パチュリーのこの生き生きっぷりを見る限り、かなりハードな勉強になることは間違いない。

そして、あつという間に三時間という時が過ぎた。

時刻は正午近くになり、太陽が高く昇っている。暖かな陽光が幻想郷をあまねく照らしているが、地下にある大図書館までは届かない。三時間前と変わらぬ部屋の状態だ。机に突っ伏し、魂が出かかったナルトの姿を除けばだが。

昼食時になったので、その事を知らせようと咲夜が大図書館にやってきた。

「……うわぁ」

部屋の中を見て、咲夜はナルトの変わり果てた姿に思わず声が漏れた。

パチュリーは咲夜に気付くと、手に持っていた指示棒を机に置いた。

「あら、もうそんな時間なのね。ナルト、お昼ご飯の時間よ」

「昼飯ッ!?!」

ナルトは突っ伏した状態から勢いよく身体を起こした。生気のなかった瞳に光が生じる。

素早く椅子から立ち上がって、ナルトは瞬く間に外へと走り去った。

それを唾然とした表情で、その場にいた三人は見送った。

「解放されたのが、よっぽど嬉しいみたいね。どんな勉強の教え方をしたのやら」

咲夜がパチュリーに視線を合わせながら言った。

パチュリーは少しムツとする。

「別に普通よ。ナルトもだらしのないのね。知識を詰め込んでいただけなのに」

「その詰め込む知識が尋常じゃない量あったんですか」

こあが高く積み残している本を横目に、ため息をつく。

いや、お前が本用意したんだろと、この場にナルトがいたら言っているだろう。

「大した量じゃないわ。そんなことより、私たちもご飯食べにいかないか。こあは、机に置いた本の整理お願いね」

「分かりました」

大図書館にこあを残して、パチュリーと咲夜の二人は大食堂に向かった。



大食堂はその名に恥じず、広々とした部屋に長いテーブルと椅子が多数置かれている。

そのテーブルの上には、野菜をたっぷり使ったローストポークサラダに、じゃがいもやキャベツ、玉ねぎ、豚肉のつくねが入ったコンソメスープ、赤ワインを混ぜたトマトソースをかけたポークステーキ、ちょうど良い焦げ色のついたクロワッサンが、座っている人数分分けられて置かれている。

「わく、すつげエ！」

ナルトは見たことのない料理に目を輝かせ、歓声をあげた。

大食堂には既に魔理沙、美鈴、フランがいる。ナルトは上座と思われる場所から一番離れた椅子に座った。

「あれ？ 紫と萃香はどうした？」

「あいつらなら、庭を片付けようとしたら急用を思い出したとか言つて帰つたぜ。おかげで最初は私と咲夜の二人だけで掃除してた。途中から美鈴とフランが手伝つてくれたから助かつたぜ」

「そうか。あの二人面倒な事嫌いそうだな。てか、紫が帰ったら霊夢はどうすんだ？」

「紫は明日また来るって言つてた。今日は丸一日霊夢は駄目だろうから、明日まで預かつてくれとも言つてたぜ」

「——まったく、いつも勝手なんだから」

咲夜とパチュリーが大食堂に来て、最後はレミリアが姿を現す。魔理沙の言葉を聞いて、レミリアが呆れたように吐き捨てた。

レミリアはテーブルの上に置かれた料理を見て、感心したように息を漏らした。

「今日は豪勢ね」

「宴会の料理の食材をたくさん買ったんですけど、思ったより使わなくて。その食材の余りです」

「へえ、じゃあ冷めないうちにいただきましょうか」

レミリアのその一言を合図に、昼食が始まった。

山のように盛られていた料理がどんどん少なくなっていく。

食事の途中、ナルトはフランの料理が自分のよりも赤いことに気付いた。

「なんかフランの料理、オレより赤くないか？」

ナルトの問いに答えたのは、料理を作った張本人である咲夜だ。

「お嬢さまと妹さまの料理は、特製ソースが使われておりますので——」

「……ああ、そうか」

ナルトは吸血鬼が何なのかを今日学んだ。そして、吸血鬼が何を主食にしているのかも知った。

つまり、アレがソースの中に入っているということだ。

「その様子だと、勉強は順調みたいね」

「当然よ、私が教えたんだから」

パチュリーは胸を張った。そして、ナルトの方に顔を向ける。

「ナルト、幻想郷って何？」

「えーと……博霊大結界つつうので外の世界と隔てられてて、人や妖怪や神様や幽霊が住んでいる場所」

「吸血鬼って何？」

「人を襲ってその血を啜り、桁違いな身体能力をもっている妖怪」

「レミイの好きな食べ物は何？」

「……納豆」

「レミイが紅茶を飲む理由は？」

「……偉そうだから」

「レミイの紅茶は大半を何が占めている？」

「………B型の血液」

「ブラボー！」

レミリアは両手を叩いて拍手する。

「この調子で昼食後も頑張りなさいね、ナルト」

「まだ勉強しねエといけねエのかよ。オレってば退屈なのはきれエなんだ」

「今日だけだから我慢する！ 知識を知ってるのと知らないのでは、天と地程の差があるから」

「私がナルトに付いてくから、心配ないと思うぜ」

魔理沙が口元をフキンで拭きながら、口を挟む。

「何何？ 何の話？」

フランが興味津々といった表情で尋ねた。

「ナルトは幻想郷を巡りたいんだってさ。多分レミリアはそのための準備をしてるんだろ」

「何で幻想郷を巡りたいの？」

「ナルトに封印されてる力が漏れた影響がどうなっているか、確認しておきたいからだとさ。あと、幻想郷を混乱させて謝りたいからとも言ってたな」

「——ふーん、そうなんだ」

フランは何か考え事をしているような感じで俯いた。

そして昼食が終わり、パチュリーに引き摺られるようにナルトは大図書館に戻っていった。

今度は魔理沙もナルトに付いていき、大図書館でパチュリーと一緒にあってナルトに幻想郷のことを教えたり、魔導書を読んだりした。

それから数時間が経過し、太陽も沈みかけた夕方。

ナルトはようやくパチュリーから解放され、魔理沙と二人で紅魔館の廊下を歩いていた。

「あく、やっと終わった〜」

ナルトはぐつと伸びをして、固くなった身体をほぐす。パキパキと関節が鳴った。

「明日から、幻想郷の各地に出掛けるのか？」

「そのつもりだけど」

「何処に行くとかは決めてるのか？」

「ああ。最初は人里に行ってみてエと思う。」

「いい加減このボロボロの服から着替えねエとマジいだろ。金稼ぎを何よりも優先してやるつもりだ」

「確かにそうだな。ナルトなら労働力には最適だし、割りのいい仕事が見つかると思うぜ」

「おう。なんにせよ、明日だな。頭使いすぎて眠くて仕方ねエ」

あくびをしたナルトを見て、魔理沙は声を殺して笑った。

「ダウンする度に、パチュリーが持ってた棒で叩かれてたな」

「あれ、痛くはねエんだけどさ、反応して顔を上げると目の前に微笑したパチュリーがいて……あれはもうトラウマだつてばよ。もうあの棒見ただけで冷や汗が出るようになってしまった」

ナルトと魔理沙は途中で別れ、ナルトは自室に戻った。

そして、シャワーを浴び終わってくつろいでいるところに、部屋の扉がノックされた。

「レミリアだけど、今大丈夫？」

「ああ、いいぜ」

ナルトの声を聞いて、レミリアが扉を開け、ナルトの部屋に入る。

「何の用だ？」

「あなたにお願いがあつて来たの。あなたの幻想郷巡りに、フランも連れていってくれないかしら？」

レミリアの声は淡々としていて、その言葉にどんな感情が込められているか、ナルトには分からなかった。

しかし、何かを企んでいる。それだけは、ナルトの直感というべきものが、感じとっていた。

出発 Day of departure

ナルトはベッドから起き、窓にかかっているカーテンを開けた。
暖かな日の光が部屋に注ぎ込まれる。

ナルトは眩しそうに目を細めて、窓から空を見た。

「いい天気だ。人里に行くのに最適だな」

「ナルトく、起きてるか」

無造作に扉を開け、魔理沙がナルトの部屋に入ってきた。

ナルトは魔理沙の方に視線を向ける。

ナルトの顔を見て、魔理沙は再び口を開いた。

「起きてるな。気分はどうだ？」

「もうバツチリ！ いつでも行けるぜ！」

ナルトは魔理沙に笑みを返し、寝る前に用意しておいたポーチを身に付けた。

魔理沙は一度自分の帽子に手をやり、帽子を被り直すと勝ち気な笑みになる。

「よし！ じゃ、いくか。人里に！」

「ああ！ けど、レミリアからフランも一緒に連れてってくれって言われてんだ。だか

ら、まずはフランを探さねエと」

「またレミリアか。それにフランを人里って、正気とは思えない頼み事だぜ」

魔理沙はうんざりしたように軽く息をついた。

ナルトはハツとした表情になる。

「あ、そつか。吸血鬼は日光に弱いんだった。これじゃ日が落ちるまで出掛けられねエな」

「……私が言いたかったのはそつちじゃないけどな。ナルト、安心していい。確かに吸血鬼は日光に弱いが、レミリアやフランみたいに強い力があれば日中でも動ける」

「へえ、そうなんか。なら、大丈夫なんか？」

「大丈夫だろ。大体、レミリアの奴が連れてってほしって言ったんだし、それならこつちに合わせるくらいしてもらわないと」

「——そうだよ」

魔理沙の後ろから声が聞こえた。

フランが扉の陰から姿を表す。

魔理沙は振り返った。

「……フラン、本当にいいの？」

「うん。魔理沙もいるし、多分平気。ほら、ちゃんと日傘もあるよ！」

フランは自分の手に持っている日傘を二人に見せた。

日光を浴びても動けるとはいえ、直接日光を浴びるのと、日傘で間接的に日光を浴びるのではかなり違ってくる。

ナルトと魔理沙は部屋を出て、フランを含めた三人で紅魔館の廊下を歩く。しばらく歩いていると、少し離れたところの部屋の扉が開いた。

「あゝ、酷い目にあつたわ」

霊夢がそう呟きながら、廊下に出てきた。

霊夢はナルトたちに気付き、気まずそうに視線を逸らす。

魔理沙は気まずくなつた空気を紛らわせるように口を開いた。

「……あゝ、霊夢、その……なんというか、お前でもあんな情けない姿になる時があるんだな」

「……情け……ない……？」

魔理沙の言葉が刃となつて、霊夢の心を突き刺した。

魔理沙はぶんぶんと手を振つて、自分の言葉を訂正する。

「ち、ちがつ……！　そういう悪い意味じゃなくてだな、そう！　霊夢にもか弱い女の子らしいところがあつたんだっていう、新しい発見ができて私は嬉しかったぜ」

「……魔理沙……私は元々か弱い女の子よ」

「えっ?」

「…………え?」

「あつ、いや…………」

霊夢は怒りで身体を震わせる。

「これからは博麗神社に來てもタダでお茶菓子出さないから! 覚悟なさい!」

そう言うと、霊夢は廊下を走ってナルトたちの前から消えた。

ナルトは首を傾げる。

「…………お茶菓子?」

「あんま気にしなくていいぜ。お茶はタダで出してくれるみたいだしな」

「魔理沙はもう少し気にした方がいいと思うなあ」

三人は歩みを再開し、紅魔館のエントランスまで來た。

エントランスには咲夜とレミリアがいる。

「行くのね?」

レミリアがナルトに尋ねた。

ナルトは小さく頷く。

「…………そう」

魔理沙が周囲をきよろきよろと見渡した。

「レミリア、霊夢が来なかったか？」

「来たわ。一言私に礼を言ったら、慌ただしく出ていったけどね」

「そうか」

フランがレミリアの前に進み出る。

レミリアはフランの顔を見た。

フランの表情は少し固くなっている。

レミリアはフランの両頬をつまんで無理矢理フランを笑顔にした。

「お、お姉様？」

「初めての人里でしょう？ 楽しまないともったいないわよ」

「……うん！」

レミリアはフランの両頬から指を離した。

フランの表情から固さがとれ、フランは嬉しそうな笑みを浮かべる。

レミリアの傍に控えていた咲夜が軽く一礼した。

「妹様、ナルトさんも行ってらっしゃいます。夕食の時間には帰ってきてくださいね」

「咲夜、私もいるんだが……」

「えっ？ 魔理沙も帰ってくるの？ 魔理沙には魔理沙の家があるじゃない」

「……ダメか？」

「お嬢様……」

咲夜はレミリアの方を向き、レミリアは少し考える素振りをすると、一つ頷いた。

「ま、部屋は余ってるし、フランの相手をしてくれるみたいだから、ナルトがいる間は滞在を許してあげる」

魔理沙の表情がパツと明るくなる。

「レミリア、ありがとうだぜー！」

「感謝はいいから、しっかりフランを楽しませてあげて」

「分かってるさ。二人とも行こうぜ」

魔理沙が玄関を開けて、一番最初に庭に出る。

ナルトとフランがその後続いた。

フランは日傘を開き、直射日光を遮る。

紅魔館の門を開けて三人が外に出ると、門の隣に美鈴がいた。

門の壁にもたれかかり、目を閉じている。

ナルトが美鈴を注意深く観察。

美鈴の口からよだれが垂れていた。

「魔理沙、これって……」

「ああ、寝てるな」

「……ふえ!! ね、寝てませんよ! デイフエンスに定評のある私がサボるわけないじゃないですか!」

美鈴は勢いよく壁から離れ、口元をぬぐって直立不動の姿勢になった。
瞬きの間に、美鈴の前に咲夜が顕現する。

「あなたという妖怪は……」

「いえ、咲夜さん! 仕事! ちゃんと仕事してましたよ!」

「あら? でも口からよだれ垂れてるわよ」

「えっ、そんな……さっきしつかりぬぐった筈——はっ!」

美鈴は口元を再びぬぐい、そこで咲夜の狙いを悟った。

咲夜の顔が悪魔の笑みになる。

「ど・う・し・て、よだれを気にしたのかしら? 真面目に仕事していたら、わざわざ口をぬぐったりしないわよね?」

「……あ……ああ……」

美鈴は恐怖で身体を震わせている。

咲夜はそれに気付き、悪魔の笑みを天使の微笑に変化させた。

「あら? 安心して。今日はナイフで串刺しにはしないわ」

「ほ……本当ですか……?」

「ええ」

咲夜が右手の手の平を上に向けた。手の平の中にカードが積まれていく。咲夜の顔から表情が消える。

「あなたのために、新しいお仕置きを考えたの。」

速攻スペルカード発動！ 狂符『バーサーカーソウル』！

「え？ そんなスペルカード聞いたことない……」

「このスペカはスペルカード以外のカードが出るまでカードを引き続け、引いたスペルカードは全て発動できる！

覚悟しなさい！ 一枚目、ドロー！ エターナルミック！」

大量の丸い青色の光弾が美鈴に殺到し、美鈴は壁に叩きつけられた。

咲夜のお仕置きはまだ止まらない。

「二枚目、ドロー！ エターナルミック！ 三枚目！ エターナルミック！ 四枚目！
エターナルミック！ 五枚——」

「きゃあああッ!!」

美鈴は絶叫とともに爆発に呑み込まれた。

ナルトたち三人はなんとなく美鈴の方に両手を合わせて合掌する。

数秒後、魔理沙は美鈴に背を向けた。

「さ、別れの挨拶もすんだ。人里に行こう」

「お、おう」

「美鈴のこと……私、絶対忘れないから」

「い、妹様……私、生きてますよ……」

三人の背後から美鈴に似た声が聞こえた気がしたが、すぐに悲鳴がその声を掻き消した。

三人は同時に同じことを決意した。

仕事は真面目にやろう、と。



人里への道中、チルノに絡まれたりしたが、それ以外は大した出来事もなく、人里に到着。

人里の入り口前にはたくさんの方が集まって周りを掃除していた。

幽香が蹂躪した妖怪の残骸を片付けているのだ。

ナルトは血の気が引いた表情でその光景を見た。

「なんだよ、これ……」

「多分、人里を襲おうとした妖怪たちだろうな。こんなエグい殺し方をする奴なんざ、一人しか思い付かないが」

掃除していた人の内の一人が、ナルトたちに気付いた。

フランの姿を見て顔を青くする。

「お、おい、あいつ、フランドール・スカーレットじゃないか?」

「な、なにい!?! おい、全員逃げろおおおッ!!」

掃除していた全員が掃除道具を放り出して、人里の中に逃げていった。

その場に残ったのはナルトたち三人だけである。

フランは暗い表情で顔を俯けた。

魔理沙は軽く舌打ちする。

「やっぱ私が心配した通りになったぜ」

「フランって人里初めてだろ? なんであんな風に周りから恐れられてるんだ?」

魔理沙はフランを一瞥する。

フランは心当たりがあるようで、暗い表情はしていても困惑した感じはない。

「人里は、外来人が大抵住み着くところだ。で、紅魔館に行つてフランにボコボコにされた外来人が人里に逃げ帰つて、フランは人間が近付いたら玩具にされるだとか、なぶり殺されるとかいろいろ大げさに話した。」

元々幻想郷に住んでる人間に、紅魔館に行こうなんて考える奴はいない。

外来人の話がそのまま人里の奴らに浸透したってわけだ」

「けど、そんな簡単に信じるもんか？」

「その話をした外来人は一人じゃなかったからな。多少の違いはあったが、大まかな部分はどの外来人の話にも当てはまった。私はフランはそんな奴じゃないって言ったんだが、外来人の話の信憑性を覆せなかった。

だから人里じゃ、フラン＝超危険って認識になってる」

フランの表情はますます暗くなった。

ナルトはフランの頭の上に手を乗せ、優しく撫でる。

「フラン、大丈夫だ。人を傷付けないよう気を付けて行動すれば、きつといつか人里の人も分かってくれる」

「お兄さん……うん、ありがとう」

「気にすんな。お前のままでいればいい、そんだけの話だからよ」

フランの気は少し晴れたようで、表情に笑みが戻った。

ナルトも明るく笑った。

そこで、人里の方からこつちに駆けてくる足音が聞こえた。

三人が視線を人里の方に向ける。

長い銀髪で頭に帽子を乗せた女性。その女性は上下一体の青い服を着ていて、下部分は長めのスカート。

魔理沙はその女性を知っているらしく、げつと声を漏らした。

「あれは……慧音!？」

「人に危害を加えようとしているのはお前か!」

「ぐっふっ……!」

慧音が跳び、ナルトの腹に頭突きした。

いきなりの攻撃にナルトは対応できず、腹を押さえて数歩後ろに下がる。

「い、いきなり何すんだ!？」

「黙れ。人里を恐怖に陥れようとしている者に当然の報いを与えたまでだ」

「おい、慧音。人里の連中に何言われたか知らないが、人里を恐怖に陥れるつもりなら、

いつまでも入り口で話してるわけないぜ」

「……むっ、それは……」

慧音は深呼吸し、自分を落ち着かせた後、ナルトとフランをまじまじと見る。

「その青年、一つ聞いてもいいだろうか?」

「なんだ?」

「人里には何の目的で来た?」

「日雇いの仕事がなんかないか探しに来た。オレの世界の金は幻想郷じゃ使えねエミでエだしな。それで、金を稼いだら服を買いてエ」

慧音はナルトの姿を見て、納得したように頷いた。

「成る程、外来人か。ふむ、見たことがない服装をしているし、嘘は言つてないようだな。そつちの日傘を差ししてる子はフランドール・スカーレットで間違いないか？」

「う、うん」

慧音はフランと同じ目線まで持つていくと、表情を和らげた。

「百聞は一見にしかずとはよく言ったものだ。私が想像していたフランドール・スカーレットはもつと凶悪な見た目だったが、こうして見ると無邪気な子供にしか見えないな」

慧音は立ち上がり、ナルトの前で小さく頭を下げた。

「すまない。私の早とちりで嫌な思いをさせてしまった。まずは謝らせてほしい」

「別に気にしてねエから、頭を上げてくれ。分かってくれりや、それでいい」

慧音はふつと笑みを浮かべた。

「私は上白沢慧音。ここ人間の里で寺子屋を開いている」

「オレの名前はうずまきナルトだ。ナルトって呼んでくれ」

「分かった。ようこそ、人間の里へ。とりあえず人間の里にいる間は、私と行動を共にし

てもらう。私と一緒になら、周りも人間の里から排除しようと考えない」

慧音は半人半妖であるが、人間を愛し、常に人間側に立つて行動している。そのため、人間からとても信頼されているのだ。

慧音と共に行動するとはつまり、人間の害にならないと証明したのと同義。「さて、では人間の里を案内しよう」

慧音の後に続き、三人が慧音の後ろをついていく。

こうして慧音の人里案内が始まった。

案内（Fun Tourism）

人里には様々な施設があつた。道具店や花屋、様々な飲食店、貸本屋、食材を売る店やナルトにとつて馴染みのある茶屋。

ナルトは慧音の後について、人里を興味深そうに見ていた。フランも日傘を右手に目を輝かせながら人里を眺めていた。まるで観光気分である。魔理沙は人里によく通じているため、慧音の説明にちよくちよく補足を入れた。

大きな屋敷が見える。

「あのでっけえ家は？」

「ああ、稗田阿求が家主の屋敷だな。人里の中でも有力な家で、私も寺子屋で子どもたちに教えるために、資料をよく使わせてもらっている。寺子屋の教科書は阿求が執筆してくれたんだぞ。」

多くの使用人がいるし、農地を持つていてそこを耕す小作人もいる。祭事を取り仕切ることでも多々あるため、儀礼をする者もよく出入りしている。この屋敷で仕事について話をすれば、仕事を見つけやすいだろうな」

「へえ、なるほどなあ。後で訪ねてみるか」

最後は慧音が教師をしている寺子屋だった。

「ここが私が教えている寺子屋だ。やんちゃな子が多くて色々手を焼いているが、楽しいところだぞ」

「あ、けーねせんせー」

慧音が寺子屋の門をくぐって庭に入ると、子どもたちが慧音に近寄ってきた。子どもたちにかなり慕われているようだ。教え子に好かれるのは良い教師である何よりの証拠である。

ナルトはその光景を微笑ましそうに見ていた。魔理沙はナルトの横に立ち、フランは二人の少し後ろに隠れるようにしていた。

「あ、あのひとだれ？」

子どもがナルトに気付いたようだ。

慧音がナルトの方を振り返る。

「ああ、人里に仕事を探しにきたようだな、今人里の案内をしていたんだ。外来人でナルトという名前だ」

「なると？　へんななまえ」

そう言った子どもを慧音が頭突きした。子どもが頭を両手で押さええてうずくまる。ナルトたちは驚いた。

「……いたいよ、けーねせんせい」

涙目になっている子どもを慧音は見下ろす。

「人の名前を馬鹿にしてはいけない。いいね?」

「あっはい」

「よろしい。それで、君たちは私がない間やれと言った課題を終わらせたのか?」

「も、もちろんだよ。なあ!?!」

「うんうん!」

「カダイハオワツタヨ」

「そんなことよりおうどんたべよう」

「そうか。それなら良かった……って、言うと思ったか!?! 今すぐ課題を見せろ! 今

すぐ!」

「わ、けーねせんせいがおこった!」

「にげろにげろ」

子どもたちが一目散に逃げ出し、慧音は子どもたちを追いかけた。取り残されたナルトたち三人はほかんとした表情で立ちつくしている。

「どうすんだよこれ……」

「とりあえず人里の人間から信用してもらえるまでは慧音と一緒に行動しないといけな

いから、待つしかないんじゃないか？」

「魔理沙と一緒にや信用されないのか？」

「私は結構色んな妖怪と関わりがあつて、それで問題をよく起こしたりするから警戒されてるんだぜ。さっきの屋敷の阿求なんか、私に屋敷の書物を盗まれないか本気で心配してるからな。」

だから、私と一緒にだとか何か面倒に巻き込まれるんじゃないかって考えて、あまり協力的になつてくれないんだぜ。困つたもんだ」

どっちがだよ、とナルトは思ったが、口に出しては言わなかった。

「要すんに、あいつらを早く取っ捕まえりゃいいんだろ。影分身の術！」

ナルトが印を結ぶ。子どもの人数と同数のナルトが現れ、子どもたちが逃げた方向にそれぞれ散った。

ナルトのスピードに子どもが敵う筈もなく、あつという間に子どもたちはナルトに捕まった。寺子屋の庭に子どもたちを連れてくる。

慧音は目を丸くして、子どもを連れてくる多数のナルトを見ていた。子どもたちも不思議そうな表情でナルトを見ている。魔理沙とフランはそんな様子がおかしくて、声を殺して笑っていた。

「慧音、捕まえたぞ」

「あ、ああ、ありがとう。それにしても驚いた。ナルトは分身ができるんだな」
「まあな」

ナルトの影分身が全て消え、本体だけがその場に残った。

子どもたちは自由になったが、逃げようとしないう。目を輝かせて、ナルトの方に顔を向けている。

「すっげー！　いまのどうやったの!？」

「もっかい！　もっかいみせて！」

「ほかにどんなことできるの!？」

子どもたちがナルトに集まった。

ナルトはニツと笑う。

「見せてやりてエが、慧音先生の課題が残ってちやなあ……。課題をちやんと終わらせたら、好きなだけ見せてやるぜ！」

「え、ホント!？」

「けーねせんせい！　はやくきょうしつにいこ！　おしえてほしいところがあるんだ！」

子どもたちは寺子屋の中に走って入っていった。ナルトは慧音に向けてピースする。慧音は微笑んだ。

「ナルト、ありがとう」

「気にすんなよ。元はといやあ、オレたちの案内のせいだしな。これくれエは協力させてもらうぜ」

「なるべく早く終わらせてくるよ。あ、そうだ。ナルト、これを」

慧音がナルトにお金を渡した。

「これで何か食べてくるといい。一時間くらいで終わるだろうから、それくらいの時間に戻ってきてくれ」

「いいのか？ 金なんかもらっちゃまって」

「ああ、色々連れ回してしまったし、今の礼もある。三人分の食事代はあると思うから、遠慮せず使ってくれ」

「分かった。サンキューな」

慧音は寺子屋の中に入っていった。

魔理沙は慧音からもらったお金を嬉しそうに見ている。

「よし、ナルト。食べに行こう。美味しい蕎麦の店を知ってるんだ」

「けど、フランはどうする？ 蕎麦じゃダメだろ」

「大丈夫！」

フランが革袋を小さなカバンから取り出した。動物の胃袋に似た形をしている。

ナルトは形状から何か液体を入れるものなんだろうなどと推測し、嫌な予感がした。

「この中に血が入ってるから、これで蕎麦を食べるよ」

「ええ……」

「それで蕎麦を食べると、口の周りが赤くならないか？ 服も汚れるかもしれないぜ」

違う、そこじゃないとナルトは思った。

血をつゆにして蕎麦を食べるとか、店の人や他の客から怖がられないか。

そんな不安がナルトの胸を支配していた。

「平気だよ。汚れないようきれいに食べてみせるから」

「それなら大丈夫だな！ よし、じゃあ蕎麦屋に行こうぜ！ ……ん？ ナルト、どうし

た？」

頭を抱えているナルトに気付き、魔理沙が声をかけた。

ナルトは右手を左右に振る。左手は未だに頭を抱えていた。

「なんでもないつてばよ……はあ、大丈夫なんかな……」

「……？ ナルトは心配性だなあ。大丈夫だって！ 魔理沙さまを信じろよ！」

「なんか余計不安になってきたぜ」

「おい！」

「あはははは、二人ともそれくらいにして早く行こうよ！」

フランが笑い声をあげた。

魔理沙が先頭に立ち、慣れた足取りでグングン先に進んでいく。その後ろをナルトとフランが付いていった。

蕎麦屋は寺子屋からそんなに遠い場所ではなかった。

卓に椅子が四脚置かれていて、ナルトたち三人は同じ卓の椅子に座った。フランと魔理沙が隣同士で、ナルトの隣には誰もいない。そこそこ繁盛しているようで、卓はほとんど客で埋まっている。

フランはざるそばを頼み、ナルトと魔理沙はかけそばを頼んだ。少し時間が経つと、ざるそばがフランの前に置かれた。

「私、つゆいらないよ。咲夜特製のつゆがあるから。器だけ欲しいな」

フランがざるそばのつゆが入っている容器を卓の端に置いた。店員はあからさまに不快そうな顔になる。

「ウチはつゆもこだわってるんです。一口も食べずにそんなこと言われても納得できません」

「まあまあ、ここは私に免じて器を持ってきてくれないか？ フランは別にこの店をバカにしたつもりはないぜ。どの蕎麦屋に行っても同じことを必ず言うよ」

魔理沙の言葉で店員は渋々、卓の端に置かれたつゆの容器を持って店の奥に消え、すぐに出てきた。

空の容器をフランの前に置く。

「ありがとう」

「次はウチのつゆで食べてみてくださいね」

それだけ言うと、店員は他の客のところに行った。

ナルトはこの店員の態度と対応に感心した。しっかりとした芯とプライドを持って仕事をしている。店員がこんなにもしっかりしていて、店主がいい加減なわけがない。

——美味いそばが食べそうだ。

ナルトは期待に胸をふくらませた。フランが血をどばどばと容器に注いでいる光景から目を逸らしながら。

フランが真つ赤なつゆで美味しそうにそばをすすっている。

店員が来て、かけそばを二つ卓に置いた。フランの真つ赤なつゆにぎよつとした顔になる。慌てて店の奥に消えていった。

店の奥から店主らしき人物がでてきて、ナルトたちの卓の前に立った。なかなか体格の良い四十代くらいの男性だ。

面倒なことになりそうだとナルトはため息をついた。

「申し訳ございませんが、他のお客様がご不快に感じられるかもしれませんので、個室の方に場所を移していただいてもよろしいでしょうか？ ご要望とあれば、かけそばを作り直しますのぞ」

店主はぺこぺこ頭を下げながら、丁寧な口調で言った。

てつきり叩き出されると思っていたナルトは、この店主の対応を好ましく感じた。何度も来たくなるような店はどういう店か、店主の頭の中にしつかりとしたイメージがある。客をなんとも思っていない店主だったなら、こんな言葉は出てこない。魔理沙はそんな店主を見て笑いをこらえている。

ナルトたちに異論はなく、店主に案内された個室の方に場所を移動した。

靴を脱いで座敷に上がり、卓の周りに置かれている座布団の上に座る。卓の上にあつたそばは店主と店員がこつちに移動した。

「すまねエ、手間かけさせちまって」

ナルトが申し訳なさそうに言った。店主ははじけるような笑みを浮かべる。吸い込まれそうな笑顔だった。

「お気になさらず。たまに妖怪のお客様もいらつしやるのですよ。この個室は特殊なお召し上がり方をするお客様のためにいつも空けているのです。いつかは妖怪と人が一

緒に同じそばをすすめるようになればいいと思いますがね」

「この店のそういうところが気に入ってるぜ」

魔理沙がかけそばを食べながら言った。店主はため息をつく。

「魔理沙さんも、店に入った時に妖怪のお客様がいることをしっかり教えてくださいよ」
「わるいわるい。久しぶりにあんたがべこべこするところを見たかったんだ」

「まったく……では、ごゆっくりどうぞ」

店主と店員は個室から去っていった。

ナルトたちは食事を再開する。

ナルトはかけそばの汁をまず飲んだ。思わずほうと息が漏れそうになるような、温かで旨味が凝縮された汁だった。出汁はどうやらしいたけを使用しているようだが、それだけではなさそうだ。

次にそばをしっかりと汁に絡めてすすする。少し食べるタイミングが遅くなってしまったため、そばの食感は普段より悪くなっているだろうが、それでもしっかり歯応えのあるそばだった。次は出来立てのそばを食べたい。そう思わせてくれるかけそばだった。

「うめエな」

「だろ？ 私もけっこうここには食べにきてるんだぜ」

「私も血で食べてるけど、この麺の食感好きだな」

「そうか、フランも気に入ったみたいで良かったぜ」

そこからの会話はなく、ただ目の前にあるそばに集中した。

あつという間に食べ終わり、会計をすませる。

「ありがとうございます！」

店員が一礼した。

ナルトたちは店を出て、寺子屋の方に向かった。時間は四十分ほど経っている。

「ねえ、ちよつと！」

金髪碧眼の少女が近付いて声をかけてきた。肩に小さな人形が乗っている。青が目立つワンピースにロングスカートを着用し、頭に赤いリボンを巻いていた。

「アリスじゃないか。なんか用か？」

「あんたに構ってる暇はないわ。とりあえず、この新聞に書かれていることってホント？」

アリスが新聞を広げ、ナルトたちに見せた。文々。新聞という新聞で、射命丸が書いた新聞だ。昨日の夕方に売られたらしい。

その新聞には『愛の告白!? 霧雨魔理沙に春の到来か!?』と見出しをつけられ、ナルトに抱えられている魔理沙の写真と、ナルトと魔理沙が見つめ合っているところを横から撮った写真がある。

魔理沙の顔が真っ赤になった。

「ああああああああああ!! なにしてくれてんだあのカラスううううう!! 記事にするなって言ったのにいいいいいい!!」

「はっ?! まさかアリス、お前この記事に嫉妬して……」

「何勘違いしてるのよ。あんたが誰と恋愛しようがどうでもいいわ。重要なのはここ!」

アリスが新聞記事の一部を右手の人差し指で指差した。『お相手は外来人!? 色々できる芸達者!』と小さな見出しがあり、そこにナルトの情報が書かれている。よくここまでめちやくちやに書けるなとナルトは感じたが、読み物としては面白く退屈しない。的外れでもない。脚色が過多なだけである。要約すると、火や風を操れ、分身もできて姿も変幻自在な青年ということだけだ。

「私、魔法の森に住んでます、アリス・マーガトロイドです」

「あ、うずまきナルトだ。よろしくな」

「この前強風に家の屋根を吹き飛ばされました」

「あ……」

「今は人形たちに屋根を修繕させながら、人里のお屋敷に厄介になってます」

アリスの目が据わっている。心なしか、肩の人形の目も据わっているように見える。

「あなたの血は何色かしら……?」

アリスの手にスペルカードが握られた。

「まつ、待った! 家の修繕をオレにも手伝わせてくれ! もちろん金はいらねエ!

スペルカードの光の輝きがおさまる。

「本当にいいの?」

「ああ、オレのせいだと思うしな」

「じゃあ、家に案内するわ」

「おいおい、ナルト。安請け合いもいいが、慧音の方はどうするんだぜ」

「大丈夫!」

ナルトは印を結び、影分身の術を使った。ナルトがもう一人煙とともに現れる。アリ

スは目を見張った。

「これでどっちの力にもなれるぜ」

「……ナルト、お前はあれだな、良い奴すぎるな」

「良い奴? そんなことねエと思うけどなあ。当たり前のことだろ?」

「そう言えるのが良い奴なんだよ」

魔理沙は笑った。

影分身のナルトとアリスが魔法の森の方へ歩いていった。

本物のナルト、魔理沙、フランは寺子屋へと歩きを再開した。

打ち切り

今後の展開。

ナルト、魔理沙、フランが各地を旅する。旅をしながら、九尾のチャクラを取り込んだ東方キヤラたちと弾幕ごっこをしたり、ちよつとした事件を解決したりする。そうしていく内に東方キヤラたちと親しくなり、フランに対する誤解も解けていく。旅の途中、下級妖怪が激減しているという噂を耳にする。

天魔は下級妖怪を妖怪の山に拐い、殺して九尾の力を奪っていた。そのため、天魔はナルトたちが旅をしている間、どんどん強くなっていく。

天魔が圧倒的に強くなった時、ついに天魔はナルトを殺し、九尾を解き放とうとする。九尾の力を全て奪うためである。

射命丸は本物の天魔の情報を入手し、天魔がナルトを襲撃している隙について本物の天魔を救い出す。

レミリアは運命を操る程度の能力の影響で、毎日ある夢を見ていた。フランがありとあらゆるものを破壊する程度の能力に吞まれ、暴走して東方キヤラを全員殺していく夢。

その運命を変えるために、レミリアはナルトの九尾の力を利用してしようと考えた。九尾のチャクラに意思があるため、フランの中に暴走する人格を九尾のチャクラで創れないかと企んだ。フランがその人格に打ち克てば、能力を完全に己のものにでき、暴走も無くなって幻想郷も救えると思った。

天魔の襲撃で魔理沙が瀕死の重傷を負い、それを見たフランがキレる。暴走し、天魔を瀕死にする。それでも暴走は収まらず、片っ端から破壊を始めた。

レミリアはフランが暴走するのが分かっていた。フランに自分を殺させることで元のフランの人格を取り戻し、暴走するフランにフラン自身が打ち克つように仕向ける。これがレミリアの計画であり、最初からフランに殺されるのを覚悟していた。

ナルトはレミリアが取り込んだ九尾のチャクラを通してレミリアの覚悟と苦悩を知り、レミリアがフランに殺される直前にレミリアを救う。そのままフランとナルトは闘いを始める。

九尾のチャクラを取り込んだフランの強さは凄まじく、ナルトは防戦一方となる。傷もいくつか負い、窮地に立たされた時、幻想郷に異変が起きる。

レミリアの覚悟と苦悩は、九尾のチャクラを取り込んでいた全員に伝わっていた。フランの優しさも旅を通して知っていたため、フランを救うために取り込んでいた九尾のチャクラをナルトに返す。天魔も最期に本物の天魔に本心を伝え、今まで奪った九尾の

チャクラをナルトに返した。返す際、各々の持つ能力も九尾のチャクラに宿した。ナルトは九尾のチャクラと九尾のチャクラを取り込んでいた東方キヤラ全員の能力を手に入れる。

ナルトの九喇嘛モードに変化が起きた。九喇嘛モードの周囲に無数のスペルカードが創られたのだ。ナルトは手に入れた能力を弾幕ごっこで理解していたため、スペルカードで東方キヤラの能力を使用することを思いついたのだ。幻想九喇嘛モードとナルトは名付け、東方キヤラたちのスペルカードを次々に使用し、フランと弾幕ごっこをする。

ぶつかる度にフランの中に東方キヤラの思いが伝わり、本来のフランも精神世界で暴走フランと闘う決意をする。

最後にフランは暴走フランを受け入れ、己の能力を完全に自身のものにする。

魔理沙もなんとか一命をとりとめ、レミリアはナルトにお礼をいった。ナルトは紫のスキマにより元の世界に帰る。帰る直前、紫はナルトに取り込んでいた九尾のチャクラを返した。これで全ての九尾のチャクラの回収が完了する。

ナルトは真っ先にヒナタに会いにいった。その際レミリアとフランからイタズラでキスマークを首筋につけられていたため、ヒナタと修羅場になる。

ナルトは怒りの矛先をレミリアとフランに向け、飛雷神の術を使用。すると、魔理沙

の箒に貼られていたマーキング札に飛んだ。紫は九尾のチャクラを返す際、己の能力を九尾のチャクラに宿していたのだ。ナルトは幻想郷と自身の世界を行き来できるようになった。

ナルトの顔を見た魔理沙が満面の笑みになり、東方キャラたちが笑みを浮かべてナルトのところを集まってくる。ナルトも笑顔で応えて、東方キャラたちの輪の中に入っていく。めでたしめでたし。